

# 宝林寺北遺跡

—太子龍野バイパス建設に伴う発掘調査報告 一



兵庫県教育委員会

# 宝林寺北遺跡

—太子龍野バイパス建設に伴う発掘調査報告—

1987. 2

兵庫県教育委員会



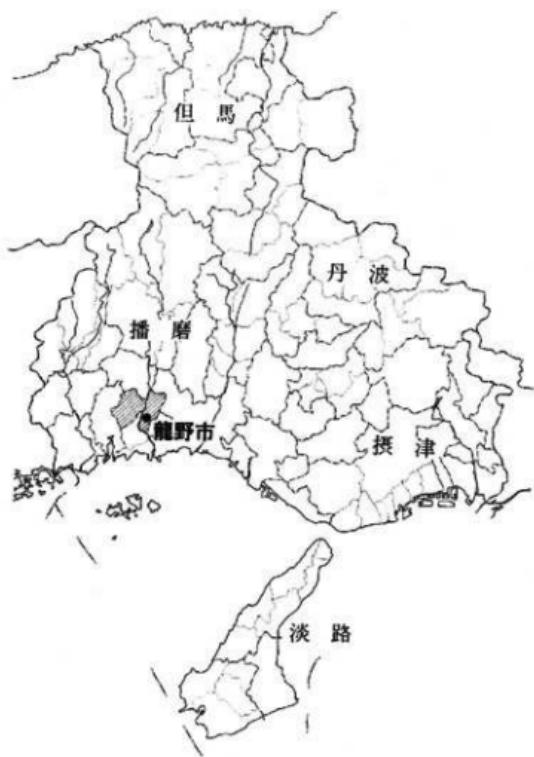
西地区 中世墓(方形周溝墓)主体部出土土器



中央地区 土塘36 出土青磁

## 例　　言

1. 本書は、龍野市揖保町門前に所在する太子龍野バイパス建設に伴う『宝林寺北遺跡』の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、近畿地方建設局姫路工事事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査を実施した。確認調査は、昭和57年12月6日～12月16日と昭和58年4月18日～4月28日の6日間を、全面調査は昭和58年11月2日～昭和59年7月3日までの156日間を費やした。整理作業は、主に兵庫県埋蔵文化財調査事務所で昭和59～61年度に行なったが、昭和59年度には山陽自動車道現場事務所でも事業を実施した。
3. 発掘調査は、兵庫県教育委員会が調査主体となり、社会教育・文化財課職員が担当した。ただ、昭和58年度全面調査については、龍野市教育委員会の協力を得、社会教育課主事・市村高規と兵庫県教育委員会担当職員で調査を実施した。
4. 本書で示す標高値は、近畿地方建設局設定のB.M.を使用した値で、方位は磁北である。
5. 遺構の写真は、調査員が撮影した。図版5の航空写真は（株）関西航測撮影のものを使った。
6. 遺物の写真は、森 昭氏に依頼し撮影して戴いた。
7. 遺物の実測は、小形の土器を3分の1、土器を4分の1、石器を2分の1・2.5分の1、土鍤を2分の1で記載した。また、実測図の断面で種別を表現した。白抜きは土師器、黒塗りは須恵器、細かいスクリーントーンは陶磁器、粗いトーンは瓦器、斜線は石鍋である。
8. 執筆分担は、本文目次の通りである。
9. 本報告にかかる遺物・スライドなどは、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）ならびに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水字立合池の下630-1）に保管している。



龍野市の位置

## 本文目次

### 例　　言

第1章　調査に至る経緯と調査経過	渡辺　昇	1
第1節　調査に至る経緯	渡辺	1
第2節　確認調査の経過	渡辺	3
第3節　全面調査の経過	渡辺	6
第4節　整理作業の経過	渡辺	12
第2章　地理的環境	高橋　学	17
第3章　歴史的環境	市村　高規	25
第4章　中央地区の調査		
第1節　位置・概要	渡辺	31
第2節　建物跡	渡辺	31
第3節　井戸	渡辺	43
第4節　集石土壙	市村	45
第5節　落込み	市村	52
第6節　火葬墓	市村	67
第7節　溝	渡辺	67
第8節　屋外炉	渡辺	72
第9節　土壙他	渡辺	79
第5章　東地区の調査	渡辺	
第1節　位置・概要	102	
第2節　建物跡	104	
第3節　井戸	104	
第4節　溝	109	
第5節　落込み	110	
第6節　土壙他	111	
第6章　西地区の調査		
第1節　位置・概要	渡辺	115
第2節　建物跡	市村	115
第3節　中世墓（方形周溝墓）	市村	117
第4節　溝	市村	122
第5節　土壙	渡辺	122

第6節 奈良時代の遺構	渡辺	126
第7節 近世以降の遺構	渡辺	127
<b>第7章 遺 物</b>		
第1節 須恵器	渡辺	128
第2節 土師器	渡辺	134
第3節 瓦器	渡辺	140
第4節 陶磁器	岡田 章	141
第5節 鉄器	岡村真理子	151
第6節 土錘	小川真理子	153
第7節 石器	滝川 友子	157
第8節 石鍋	前田 陽子	161
第9節 木器	渡辺	162
第10節 古式土師器	渡辺	164
第11節 その他の遺物	渡辺	172
<b>第8章 出土遺物の検討</b>		
第1節 東播系中世須恵器について	水口 富夫	175
第2節 相生系須恵器について	森内 秀造	180
第3節 貿易陶磁について	岡田	183
第4節 古式土師器について	渡辺	186
<b>第9章 自然科学的考察</b>		
須恵器の胎土分析	三辻 利一	189
<b>第10章 おわりに</b>	渡辺	194
第1節 造構の変遷		195
第2節 中世墓（方形周溝墓）について		197
第3節 造構出土遺物の共伴関係		201

## 挿 図 目 次

第1図	姫路バイパス・太子龍野バイパスの遺跡	2
第2図	国道2号線門前付近の渋滞	3
第3図	坪掘調査調査風景	4
第4図	調査風景	5
第5図	調査風景	6
第6図	調査風景	8
第7図	現地説明会風景	8
第8図	写真測量風景	9
第9図	展示風景（西播文化会館）	12
第10図	整理作業風景	14
第11図	宝林寺北遺跡の位置	16
第12図	揖保川下流域平野の地形分類図	19
第13図	宝林寺北遺跡周辺の大字・小字界	20
第14図	宝林寺北遺跡表層地質断面図	22
第15図	片吹遺跡縄文時代住居跡	25
第16図	鳥坂2号墳	26
第17図	宝林寺北遺跡の位置と周辺の遺跡	27
第18図	奥村庵寺塔跡・金堂跡	28
第19図	福田天神遺跡	29
第20図	宝林寺北遺跡地区設定図	30
第21図	建物1土器実測図(1)	32
第22図	建物1土器実測図(2)	32
第23図	建物1・2実測図	33
第24図	建物2土器実測図(1)	34
第25図	建物2土器実測図(2)	34
第26図	建物3土器実測図	34
第27図	建物3実測図	35
第28図	建物4実測図	36
第29図	建物4土器実測図(1)	37
第30図	建物4土器実測図(2)	37
第31図	建物5実測図	38

第32図 建物5土器実測図1).....	39
第33図 建物5土器実測図2).....	39
第34図 建物6実測図.....	40
第35図 建物7実測図.....	41
第36図 建物8実測図.....	42
第37図 建物8土器実測図1).....	43
第38図 建物8土器実測図2).....	43
第39図 井戸土錐実測図.....	43
第40図 井戸実測図.....	44
第41図 井戸上部土層断面図.....	45
第42図 集石土壤1土器実測図.....	45
第43図 集石土壤1実測図.....	46
第44図 集石土壤2土器実測図1).....	46
第45図 集石土壤2土器実測図2).....	46
第46図 集石土壤2実測図.....	47
第47図 集石土壤3実測図.....	48
第48図 集石土壤3土器実測図.....	49
第49図 集石土壤4実測図.....	50
第50図 集石土壤4土器実測図.....	51
第51図 落込み1実測図.....	53
第52図 落込み1土器実測図(1).....	54
第53図 落込み1土器実測図(2).....	55
第54図 落込み1土器実測図(3).....	56
第55図 落込み1土錐実測図.....	56
第56図 落込み1鉄器実測図.....	56
第57図 落込み1陶磁器実測図.....	57
第58図 落込み2鉄器実測図.....	57
第59図 落込み2実測図.....	58
第60図 落込み2土器実測図(1).....	59
第61図 落込み2土器実測図(2)・陶磁器実測図.....	60
第62図 落込み3土器実測図(1).....	60
第63図 落込み3土器実測図(2).....	61
第64図 落込み3土錐実測図.....	61

第65図	落込み4 土錐実測図	62
第66図	落込み4 実測図	62
第67図	落込み5 陶磁器実測図	63
第68図	落込み5 土器実測図	63
第69図	落込み6 土器実測図(1)	63
第70図	落込み6 実測図	64
第71図	落込み6 遺物実測図(2)	64
第72図	落込み9 実測図	65
第73図	落込み9・10土器実測図	66
第74図	落込み10陶磁器実測図	66
第75図	火葬墓実測図	67
第76図	溝1 土器実測図	68
第77図	溝1 実測図	68
第78図	溝2 実測図	69
第79図	溝3 実測図	70
第80図	溝3 鉄器実測図	70
第81図	溝3 土器実測図	71
第82図	大溝土器実測図	71
第83図	(左) 大溝 (右) 近世溝全景	72
第84図	屋外炉実測図	73・74
第85図	屋外炉土器実測図(1)	75
第86図	屋外炉土器実測図(2)	76
第87図	屋外炉土錐実測図	76
第88図	屋外炉土器実測図(3)	77
第89図	土壠1・10実測図	78
第90図	土壠1 土器実測図(1)	79
第91図	土壠1 土器実測図(2)	79
第92図	土壠2 土器実測図	80
第93図	土壠3 土器実測図	81
第94図	土壠4 陶磁器実測図	81
第95図	土壠5 土器実測図	81
第96図	土壠9 土器実測図	82
第97図	土壠11実測図	83

第98図	土壤12土器実測図	84
第99図	土壤13土器実測図(1)	84
第100図	土壤13土器実測図(2)	84
第101図	土壤14土器実測図	84
第102図	土壤15実測図	85
第103図	土壤15土器実測図(1)	86
第104図	土壤15土器実測図(2)	86
第105図	土壤16土器実測図	87
第106図	土壤17土器実測図	87
第107図	土壤20土器実測図	88
第108図	土壤22土器実測図	89
第109図	土壤24土器実測図	89
第110図	土壤30土器実測図	90
第111図	土壤31実測図	91
第112図	土壤32土器実測図(1)	91
第113図	土壤32鉄器実測図	91
第114図	土壤32土器実測図(2)	92
第115図	土壤33土器実測図	92
第116図	土壤36土器実測図	93
第117図	土壤38実測図	94
第118図	土壤38土器実測図	94
第119図	土壤39遺物実測図	94
第120図	土壤40実測図	95
第121図	土壤40鉄器実測図	95
第122図	土壤40土器実測図	95
第123図	土壤42実測図	96
第124図	土壤42土器実測図(1)	96
第125図	土壤42土器実測図(2)	97
第126図	土壤42土器実測図(3)	98
第127図	建物5 東側ピット群出土土器実測図	99
第128図	ピット出土土器実測図(1)	99
第129図	ピット出土土器実測図(2)	100
第130図	ピット出土瓦器実測図	100

第131図	ピット出土土鍤実測図	100
第132図	ピット出土陶磁器実測図	100
第133図	ピット出土鉄器実測図	101
第134図	東地区周辺字限図	102
第135図	建物跡実測図	103
第136図	井戸1 掘り方実測図	104
第137図	井戸1 実測図	105
第138図	井戸1 土鍤実測図	106
第139図	井戸2 掘り方土層断面図	106
第140図	井戸2 実測図	107
第141図	井戸2 土器実測図	108
第142図	井戸2 陶磁器実測図	108
第143図	井戸2 土鍤実測図	109
第144図	溝3 遺物実測図	109
第145図	溝3 実測図	110
第146図	落込み1 土器実測図	111
第147図	落込み2 土器実測図	111
第148図	集石土壤2 陶磁器実測図	111
第149図	集石土壤2 土器実測図	111
第150図	集石土壤1・2・3 実測図	112
第151図	土壤1 土器実測図	113
第152図	土壤3 土器実測図	113
第153図	土壤11鉄器実測図	113
第154図	ピット土鍤実測図	113
第155図	ピット出土土器実測図	114
第156図	ピット出土土器実測図	115
第157図	建物跡実測図	116
第158図	中世墓主体部土器実測図	117
第159図	中世墓溝内出土土器実測図(1)	118
第160図	中世墓(方形周溝墓) 実測図	119・120
第161図	中世墓溝内出土土器実測図(2)	121
第162図	中世墓溝内出土土器実測図(3)	121
第163図	溝1・2 実測図	122

第164図	土壤1・2実測図	123
第165図	土壤2土器実測図	123
第166図	土壤3実測図	124
第167図	土壤5陶磁器実測図	124
第168図	土壤4・5実測図	125
第169図	奈良時代遺構実測図	126
第170図	中央地区須恵器実測図1)	129
第171図	中央地区須恵器実測図2)・瓦器実測図	130
第172図	中央地区須恵器実測図3)	131
第173図	中央地区須恵器実測図4)	132
第174図	西地区須恵器実測図	133
第175図	東地区須恵器実測図	133
第176図	西地区土師器実測図	135
第177図	中央地区土師器実測図1)	135
第178図	中央地区土師器実測図2)・瓦器実測図	136
第179図	中央地区土師器実測図3)	137
第180図	中央地区土師器実測図4)・瓦器実測図	138
第181図	中央地区土師器実測図5)	139
第182図	中央地区土師器実測図6)	140
第183図	白磁実測図1)	145
第184図	白磁実測図2)	146
第185図	青磁実測図	147
第186図	染付磁器実測図	148
第187図	灰釉・褐釉陶器実測図	149
第188図	宝林寺北遺跡出土陶磁器	150
第189図	西地区トレンチ出土鉄器実測図	151
第190図	宝林寺出土刀実測図	151
第191図	中央地区鉄器実測図	152
第192図	出土土鍤法量図	153
第193図	土製品実測図	154
第194図	土鍤実測図1)	154
第195図	土鍤実測図2)	155
第196図	石器実測図1)	158

第197図 石器実測図(2).....	159
第198図 石鍋実測図.....	161
第199図 木器実測図.....	163
第200図 古式土師器実測図(1).....	164
第201図 古式土師器実測図(2).....	165
第202図 古式土師器実測図(3).....	166
第203図 古式土師器文様拓影.....	167
第204図 甌底部.....	169
第205図 古式土師器実測図(4).....	171
第206図 瓦実測図.....	172
第207図 近世瓦拓影.....	173
第208図 古錢拓影.....	173
第209図 バンドコ実測図.....	173
第210図 中央地区土製品実測図.....	174
第211図 東播系須恵器実測図(1).....	176
第212図 東播系須恵器実測図(2).....	177
第213図 器種別比率グラフ.....	186
第214図 門前・長越遺跡出土小形丸底.....	187
第215図 宝林寺遺跡出土須恵器（奈良時代）のRb—Sr分布図.....	189
第216図 宝林寺遺跡出土須恵器のK量.....	190
第217図 宝林寺遺跡出土須恵器のCa量.....	191
第218図 宝林寺遺跡出土須恵器（平安時代）のRb—Sr分布図.....	191
第219図 宝林寺遺跡出土須恵器のクラスター分析.....	192
第220図 宝林寺遺跡出土須恵器（鎌倉時代）のRb—Sr分布図.....	193
第221図 中世墓出土土器.....	198
第222図 中央地区遺構出土土器共伴関係図.....	199・200
第223図 宝林寺と宝林寺北遺跡.....	202

## 付 図 目 次

- 付図 1 中央地区造構配置図
- 付図 2 東地区造構配置図
- 付図 3 西地区造構配置図

付図4 中央地区井戸実測図

付図5 東地区井戸1 実測図

付図6 東地区井戸2 実測図

## 表 目 次

第1表 宝林寺北遺跡の環境変遷表.....	23
第2表 土鍼計測表.....	156
第3表 宝林寺北遺跡石器観察一覧表.....	160
第4表 宝林寺北遺跡出土須恵器の分析値.....	192

## 図 版 目 次

卷頭図版	(上) 西地区中世墓(方形周溝墓)主体部出土土器 (下) 中央地区土壙36出土青磁
図版1	中央地区(上左)井戸断面 (上右) 土壙42 (下) 屋外炉
図版2	東地区(上)全景 (下) 集石土壙
図版3	東地区(上)井戸1 (下) 井戸2
図版4	西地区(上)全景 (下) 中世墓(方形周溝墓)全景
図版5	宝林寺北遺跡周辺空中写真
図版6	(上) 宝林寺北遺跡遠景(北から) (下) 宝林寺北遺跡遠景(南東から)
図版7	(上) 宝林寺北遺跡遠景(北東から) (下) 中央地区・西地区空中写真
図版8	中央地区(上)全景(東から) (下) 全景(西から)
図版9	中央地区(上)全景 (下) 井戸・溝3空中写真

- 図版10 中央地区（上）井戸埋土堆積状況  
（下）井戸全景
- 図版11 中央地区（上）井戸断面  
（下）井戸 井筒部分
- 図版12 中央地区（上）集石土壤2全景  
（下）同 上（石除去後）
- 図版13 中央地区（上）集石土壤3全景  
（下）集石土壤3土器出土状態
- 図版14 中央地区（上）集石土壤3上部土器除去後  
（下）集石土壤3土器除去後
- 図版15 中央地区（上）集石土壤4  
（下）同 上（石除去後）
- 図版16 中央地区（上）落込み1  
（下）落込み2
- 図版17 中央地区（上）落込み4全景  
（下）落込み4堆積状況
- 図版18 中央地区（上）落込み9検出状況  
（下）落込み9全景
- 図版19 中央地区（上）落込み6  
（下）土壤40
- 図版20 中央地区（上）土壤1堆積状況  
（下）土壤1全景
- 図版21 中央地区（上）土壤15全景  
（下）土壤15炭化ムギ出土状況
- 図版22 中央地区（上）土壤42  
（下）土壤42
- 図版23 中央地区（上）火葬墓検出状況  
（下）火葬墓
- 図版24 中央地区（上）屋外炉堆積状況  
（下）屋外炉・土壤36全景
- 図版25 中央地区（上）屋外炉堆積状況  
（下）溝1
- 図版26 中央地区（上）石組・溝2  
（下）溝2

- 図版27 中央地区（上）集石土壙 1  
（下）大溝堆積状況
- 図版28 中央地区（上）土器出土状態  
（下）土器出土状態
- 図版29 中央地区（上）近世溝検出状況  
（下）土壙11
- 図版30 東地区（上）全景（南から）  
（下）全景（北から）
- 図版31 東地区（上）全景  
（下）柵列・溝
- 図版32 東地区 井戸1・2空中写真
- 図版33 東地区（上）井戸1空中写真  
（下）井戸2空中写真
- 図版34 東地区（上）井戸1井側上面（北から）  
（下）井戸1井側上面（南から）
- 図版35 東地区（上）井戸1全景（南から）  
（下）井戸1井側全景
- 図版36 東地区（上）井戸1断面  
（下）井戸1断面
- 図版37 東地区（上）井戸2井側上面  
（下）井戸2全景
- 図版38 東地区（上）井戸2断面  
（下）井戸2断面
- 図版39 東地区（上）南側 空中写真  
（下）集石土壙 空中写真
- 図版40 東地区（上）集石土壙全景（北から）  
（下）集石土壙全景（東から）
- 図版41 東地区（上）集石土壙 墓壙全景  
（下）集石土壙3全景
- 図版42 東地区（上）溝3全景  
（下）建物跡
- 図版43 東地区（上）土壙1・2全景  
（下）土器出土状態

- 図版44 西地区 (上) 東半全景  
(下) 同 上 (北から)
- 図版45 西地区 (上) 中世墓 (方形周溝墓) 検出状況  
(下) 中世墓全景
- 図版46 西地区 (上) 中世墓・土壤1~3全景 (北から)  
(下) 中世墓・土壤1~3全景 (東から)
- 図版47 西地区 (上) 中世墓主体部  
(下) 中世墓主体部
- 図版48 西地区 (上) 中世墓溝堆積状況  
(下) 中世墓溝堆積状況
- 図版49 西地区 (上) 全景 (東から)  
(下) 中世墓全景
- 図版50 西地区 (上) 奈良時代遺構全景  
(下) 奈良時代ピット1・2
- 図版51 西地区 (上) 奈良時代土壤2  
(下) 西半全景
- 図版52 中央地区  
建物1、建物3、建物4、建物8、落込み1、  
集石土壤3
- 図版53 中央地区  
落込み2、落込み3、落込み6、溝1、溝3、  
大溝
- 図版54 中央地区  
屋外炉、土壤1、土壤9、土壤13、土壤15
- 図版55 中央地区  
土壤17、土壤30、土壤33、土壤36、土壤38、  
土壤40、土壤42
- 図版56 中央地区  
土壤42
- 図版57 中央地区  
建物5東側ピット群、ピット  
1:落込み2、2:落込み1、3,4:屋外炉

- 図版58 (上) 中央地区 大溝  
(下) 東地区 井戸2、落込み1、土壙1、  
ピット
- 図版59 西地区  
ピット、土壙2、中世墓
- 図版60 中央地区 須恵器
- 図版61 西地区 須恵器  
中央地区 土製品  
中央地区 須恵器  
中央地区 土師器
- 図版62 中央地区 土師器
- 図版63 中央地区 土師器
- 図版64 (上) 白磁端反り口縁碗  
(下) 白磁玉縁口縁碗
- 図版65 (上) 白磁・青白磁  
(下) 青磁 刺花文碗
- 図版66 (上) 青磁 椿描文碗(外面)  
(下) 青磁 椿描文碗(内面)
- 図版67 (上) 青磁 蓮弁文碗  
(下) 白磁・青磁・染付磁器
- 図版68 (上) 緑釉陶器(外面)  
(下) 緑釉陶器(内面)
- 図版69 (上) 白磁壺  
(下) 国産染付磁器
- 図版70 古式土師器
- 図版71 古式土師器
- 図版72 (上) 古式土師器  
(下) 宝林寺出土刀、土鍬
- 図版73 土鍬
- 図版74 (上) 石鍋、温石  
(下) 石製品
- 図版75 鉄製品
- 図版76 土壙15出土炭化ムギ・ソバ

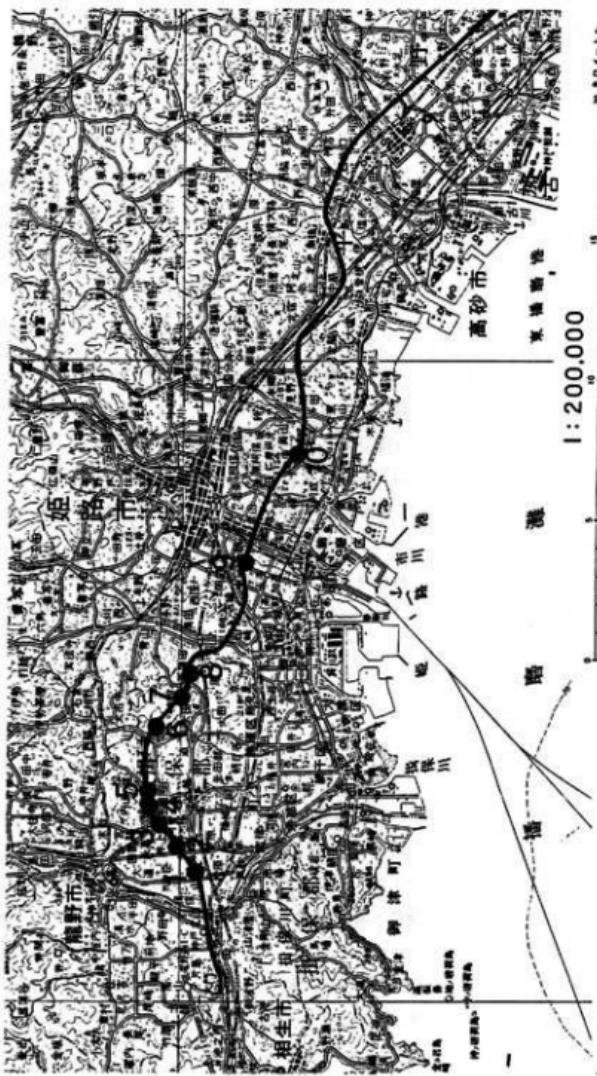
## 第1章 調査に至る経緯と調査経過

### 第1節 調査に至る経緯

国道2号線は、大阪市と北九州市を結ぶ一般自動車道である。車社会の進歩とともに道路の需要は高まり、早くは昭和30年代の第二阪神国道と呼ばれた国道43号線の建設を端緒に各地・各所にバイパスを始めとする交通網が整備されている。車重視の要求が高まり、自動車専用道の建設も進み、阪神高速道路神戸線と繋がる神戸～明石間の第二神明道路、明石～高砂間の加古川バイパス、高砂～太子間の姫路バイパスが東から順に供用を開始し、所要時間の短縮などの車社会の発展に寄与してきた。しかし、姫路バイパスの終着点で国道2号線への降り口となる太子町山田から太子町域・龍野市域全城の交通渋滞は慢性化し、長い時は相生市までの20kmに及び深刻な問題となりつつあった。そのため、自動車専用道路を西へ延伸する計画が起り、太子龍野バイパスと名を変え、通称播磨縦貫道の一翼を担うこととなった。太子町山田から龍野市揖保町門前までの9.5kmの自動車専用道路である。この間は、姫路バイパスへの昇降口となつたこともあるが、工事以外でも自然渋滞する地域でありバイパスの開通により渋滞は多少とも緩和されたが、渋滞は門前以西へ移動する結果となった。そのため、門前以西については2号線を拡幅し4車線道路とする工事が進みつつある。

これらバイパスの開通は、大動脈として経済面など多くの面で寄与しているが、その裏で埋蔵文化財の記録保存が行われてれることも否めない事実である。第二神明道路の中村古墳群・高丘古跡群・加古川バイパスの東溝遺跡・東神吉遺跡、姫路バイパスの兼田遺跡・長越遺跡・山田遺跡が調査されている。太子龍野バイパスについても法隆寺領鶴荘を横断することから、分布調査などの各種の調査・検討・協議が計画段階から行われてきた。しかし、荘園遺跡という面ともいえる広大な範囲を対象とするため、例え鶴荘を回避できても周辺に広がっている小宅荘・広庄荘が引っ掛かることになる。その他、経済効果をも考え合わすとルート変更は不可能な状態となった。昭和53年度に分布調査を行い、その結果から数地点で確認調査が実施された。確認調査は昭和54年度から実施され、龍野市域では菅田町福田由福田天神遺跡・福田片岡遺跡が菅田町片吹で片吹遺跡が確認された。また、太子町山田から鶴荘までの間でも各種問題や経済効率の上から山田大山古墳群・上太田古墳群・坊主山遺跡の太子町域の遺跡が調査されることになり、各遺跡とも多大な成果を挙げている。

宝林寺北遺跡の所在する龍野市揖保町門前の一帯も遺物散布地として協議の俎上に当初から上がっていた。南約500mに山陽新幹線建設に伴って昭和44年調査された門前遺跡が存在しており、なおさら調査の必要性が強まってきた。門前遺跡は、縄文晩期以降の複合遺跡で、特に弥生前期の一括遺物は龍野市指定文化財となっている。昭和53年兵庫県教育委員会は技術職員



1. 宝林寺北道路
2. 片吹道路
3. 榎田片岡道路
4. 榎田天神道路
5. 坊主山道路
6. 上太田古墳野
7. 山田大山古墳野
8. 山田道路
9. 長越道路
10. 犬連道路

第1図 姫路バイパス・太子難野バイパスの道路

吉識雅仁と太子町教育委員会主事三村修次を担当者として太子龍野バイパス全域の分布調査を実施した。その結果、広範囲にわたって須恵器・土師器の散布を認めたので、要確認調査地域として近畿地方建設局姫路工事事務所に返答している。用地買収も進み、本工事段階が近づいた昭和57年12月に急遽確認調査を行うことになった。確認調査の結果、2カ所で遺構を確認し、全面調査の必要性が考えられた。ただ、未買収地が含まれ、坪掘調査

を実施した地点も来春に作付けを行なうため十分な調査は行えなかった。そのため、昭和58年4月の第2次確認調査の結果を踏まえて、全面調査を実施することになった。昭和58年度は近畿自動車道舞鶴線建設に伴う調査が本格化し、また宝林寺北遺跡の調査は当初計画に入っていたため、調査員の確保が出来なかった。しかし、再度の依頼を受け龍野市の協力を得て、県教育委員会・市教育委員会が1名ずつ調査員を出して調査を実施することになった。調査は、昭和58年10月から入り、翌59年7月まで継続して行われた。なお、昭和59年度は県教育委員会職員によって調査を実施した。

宝林寺北遺跡は、当初門前遺跡として調査を手掛けたが、調査が進むと南約500mにある門前遺跡と同一の遺跡とは考えられず、同一名称では混乱をまねく恐れが生じた。調査の結果、遺跡の中心時期も異なり性格も異なるため、遺跡名を別に与えた方が妥当と思われた。小字名を与える意見もあったが、広範囲に跨るため遺跡の性格と深い繋がりのある宝林寺の北側に立地することから宝林寺北遺跡と呼称することとした。



第2図 国道2号線門前付近の氾濫

## 第2節 確認調査の経過

### (1) 第1次確認調査の経過

分布調査の結果、林田川以西はほぼ全域にわたって要確認調査の対象地となっていた。林田川から宝林寺北遺跡の東端近くまでは昭和56年度龍野市教育委員会を調査主体とし、千種高校教諭村上絹揚氏を担当者として調査が行われた。県道堂本真砂線以東を片吹遺跡として、全面調査が龍野市教育委員会によって昭和57年度実施された。確認調査の結果、県道以西は旧河道ならびに氾濫原となっており、遺構は存在しなかった。引き続き西側への確認調査が必要であったが、用地買収の問題から調査は繰り越された。翌57年度当初においても用地買収の状況に変化はなく、県・市ともに当初調査計画には組み入れていなかった。しかし、太子龍野バイパス

の供用開始の問題から、急遽用地買収などの話が進み、未買収の用地についても調査の承諾を取るなどの措置が取られた。そのため、県・市教育委員会に調査依頼があったが、市教育委員会は東側の片吹遺跡の全面調査を実施していたため対応出来ず、県も調査計画の変更は困難であった。しかし、再三の依頼と全体の状況から調査の必要性を感じたため、龍野市内の山陽自動車道の調査に従事していた調査員1名を確認調査に当てるとした。

対象地の大半は未買収地で全面調査期間を確定する必要性からも、確認調査に入ることとなつた。未買収地のため、坪設定箇所の規制を受け、一部は指定された箇所の調査を行つたことから、十分な確認調査とは言えない。

調査の方法は、原則的に20m間隔で設定することとし、道路主軸をそのまま利用し、道路主軸を数字で、道路幅をアルファベットで表し、D20・F25というようにグリッド名を与えた。グリッドは、調査承諾を得られた地域に限り、38ヶ所設定し12月8日から6日間の調査を行つた。調査段階で3ヶ所については、反対があったので調査を断念し、最終的に35ヶ所の調査となり、ある程度の全面調査範囲を決めることが出来た。なお、調査は人力のみで行い、機械力は使用していない。作業にあたっては、(株)前田組に作業員をお願いし実施した。

#### 調査の組織

近畿地方建設局姫路工事事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり調査を実施した。以下、全面調査・整理作業とも同様である。

##### 調査事務　社会教育・文化財課

課長	藤本 繁
文化財担当参事	吉村芳郎
副課長	道畠 實
課長補佐	池田義雄
課長補佐	堀 洋
埋蔵文化財係長	大村敬通
主任	西口和彦
主任	小川良太
技術職員	水口富夫



第3図 坪掘調査調査風景

事務職員 杉本恵子  
調査担当 社会教育・文化財課  
技術職員 渡辺昇  
調査補助員 利根由扶子  
調査補助員 田村成美

#### 調査日誌抄

昭和57年12月6日（月）

現地で調査箇所・方法などの打ち合わせ。

プレハブ建設立会いなど調査準備を行う。

12月8日（水）～10日（金）

東から坪掘り開始する。昨日までに地権者の了解を得られた地点に旗を立てて観き、その個所を調査する。

12月13日（月）～16日（木）

確認調査継続。実測終了したものから、順次埋め戻しを行う。西側は全て礫層で遺構は認められない。遺構の認められない坪で礫層を抜いて深掘してみると、砂層を挟んで礫層が続いている。同意を得られなかった田畠が増え、最終的に35個所について調査を行った結果、東西2個所で全面調査が必要と思われた。器材などを山陽自動車道調査事務所へ撤収し調査終了する。

#### （2）第2次確認調査

第1次確認調査によって遺跡の広がりのアウトラインは引かれたものの、未買収地区が多数あり、また要全面調査地区も細かな資料を要するので、第2次確認調査を実施することになった。未買収地区は第1次確認調査と同様に20mピッチで2×2mの坪を設定して調査を行い、要全面調査地区については第2次確認として幅2mのトレンチ調査を行った。調査対象地の田畠が、調査着手段階では今季も作付けを行うことになっていたため、それに即した調査方法となり、埋め戻し作業も実施した。

#### 調査の組織

調査事務 社会教育・文化財課  
課長 西沢良之  
文化財担当参事 大西章夫  
副課長 森崎理一  
課長補佐 池田義雄



第4図 調査風景

管 理 係 長	福永慶造
埋蔵文化財調査係長	榎本誠一
主 任	八家 均
技 術 職 員	大平 茂
事 務 職 員	杉本恵子
調査担当	社会教育・文化財課
技 術 職 員	森内秀造
技 術 職 員	別府洋二

### 第3節 全面調査の経過

#### (1) 58年度全面調査の経過

2次の確認調査の成果によって、全面調査範囲はほぼ確定できた。しかし、調査不可能な地点も残っていた。また、昭和58年度当初において年度内の調査依頼を受けていなかったので、県教育委員会も年度計画予定には組み込んでいなかった。第2次確認調査もそれを前提とし来年度の調査日数を確定する調査であり、埋め戻し作業も実施していた。しかし、下期になると9月頃から、急遽数回にわたって全面調査の依頼を受け、前記の経過を経て県・市両教育委員会職員1名ずつを担当者として調査を行った。調査着手が10月になってからであり、調査対象面積が5,500m<sup>2</sup>と広く年度内の調査終了は厳しいものと思われた。さらに、全面調査対象地の中に建物（立ち退き物件）が残っており、撤去が年度末～59年度当初の3月～4月に遅れたために2年次にわたることとなった。物件撤去の遅れにより、物件周辺の部分は二度手間となったことは明らかである。

調査は、10月6日の調査準備から入り、実際の調査は11月7日の東地区から入り、西地区そして最後に中央地区へと移っていった。調査は年度末の3月27日まで実働97日、延べ1,712人



第5図 調査風景

の作業員の方々の協力を得た。西・中央地区は、物件撤去を待つため、次年度へ調査は繰り越された。また、東地区も井戸の断ち割り作業は次年度へ繰り越した。

調査は、主に東地区を渡辺が、西・中央地区を市村が担当した。写真撮影は、主に渡辺が行い、造構実測は両名の他、片山昭悟・柳田勝・福田誠吾・小林正人が行った。積雪で4日間作業出来ないという異常気象の年の厳寒期に実測作業があたり、湧水にも悩まされたが、補助員をはじめ地元門前・下沖・井上・中臣を中心に多数の作業員の方々の協力を得て、順調に調査を終了することが出来た。国道2号線沿いの調査で、車の騒音やほこりにも悩まされ、交通渋滞時には色眼鏡で見られることも多々あったが、恙なく調査を終えることが出来た。補助員・作業員や建設省および工事関係者・事務関係者に謝意を表します。

#### 調査の組織

調査事務　社会教育・文化財課

前節 第2次確認調査の体制と同じ

#### 調査担当

龍野市教育委員会	社会教育課	主　事	市村高規
兵庫県教育委員会	社会教育・文化財課	技術職員	渡辺 昇

#### 調査補助員

片山昭悟・柳田勝・福田誠吾・小林正人

#### 調査参加者

幸内 豊・内匠忠一・上田勇夫・柳生信夫・三木省三・三村竜二・瀧北安夫  
山口重雄・土井重夫・瀧北哲也・石原康範・森澤時子・土井栄子・瀧北ゆき子  
上田しげよ・三宅康子・山崎真砂子・藤田鈴枝・赤松都子・栗川律子・出羽操  
赤松千恵子・出田敬子・横田久美・渡辺富栄・久保田忠子・金治美香・岸野英代  
西田まさ子・田中ひとみ

#### 調査日誌抄

昭和58年10月6日（木）

現地にて近畿地方建設局・県・市両教育委員会の三者による協議を行う。プレハブ建設の位置やバイロット道路の位置確定する。調査方法などについても協議。細かな点については今日以降、調査開始まで随時行う。地権者との話し合いが残っているのと、調査準備のため10月末から調査開始する。

11月2日（水）～11月5日（土）

全面調査を、重機によって機械掘削開始する。畦畔バケットを装着した0.4と0.75のユンボを使って行う。撤去されていない小屋と作物が残っている畠は余分に控えて掘り下げる。公民

境界からも2m控えることとする。

#### 11月7日（月）～11月11日（金）

今週から本格的な作業に入る。東地区から手掛け始める。山陽自動車道の現場（中井古墳群）から器材搬入する。遺構まで下げ、遺構検出作業に入る。ピット・落込みなど検出され始める。東地区・中央地区間重機によって土層の堆積状況を含めて確認をする。

#### 11月14日（月）～11月18日（金）

東地区遺構個々に検出前の写真撮影し、掘

り下げ開始する。井戸2基検出し、ともに石組円形の井戸。埋土から青磁片・土鍋・土師器出土。西地区再度確認のためトレンチ2ヶ所設定する。

#### 11月21日（月）～11月22日（火）

東地区井戸2基とも底まで掘り下げ終了し写真撮影。井戸1は平面図実測始める。西地区遺構面認められたので全面調査に切りかえる。中央地区の約半分表土など機械掘削行う。

#### 11月24日（木）～11月26日（土）

東地区割り付け後、実測開始する。中央地区へ発電機・ベルトコンベアなど移動設置し、遺構面まで人力掘削始める。

#### 11月28日（月）～12月2日（金）

東地区井戸1実測終え井戸2実測始める。中央区遺構面まで掘り下げ、遺構面清掃始める。溝・土壤・ピット検出される。

#### 12月5日（月）～12月9日（金）

中央地区東側中央の落込みは井戸であることを確認する。土層断面撮影・実測後、掘り下げ継続。西側へ行くほど砂礫層が表れ、遺構面残っていない。調査を5mメッシュで杭打ち行う。南北をアルファベット、東西を数字で表し、北東隅の杭の番号をグリッド名とする。



第6図 調査風景

#### 12月12日（月）～12月16日（金）

中央地区遺構検出作業継続。部分的に写真を撮影してから遺構掘り下げ始める。井戸は東地区と同タイプの円形石組の井戸で、井筒は確認できない。竪穴住居跡状の方形落込み



第7図 現地説明会風景

(落込み4) 検出する。集石土壙など新たに検出。

12月19日（月）～12月23日（金）

中央地区造構掘り下げ継続。西地区表土除去作業行う。中央地区西側の部分も排水作業実施。少しがら疊層を掘り込んだビットも見られる。

12月26日（月）

中央地区全体をシートで覆い飛ばないよう  
に鍤を置く。西地区は造構面清掃し、溝・土  
壙・ビットなど検出。密集していないので建物の復原容易。中央地区同様シートで覆う。

昭和59年1月9日（月）～1月13日（金）

中央地区造構掘り下げ継続。グリッド単位で実測行う。西地区溝が方形に巡り方形周溝状になっている。中央に長方形の主体部確認。主体部から白磁2点、土師器皿1点出土。周溝内からは魚住焼甕など多数出土。

1月17日（火）～1月20日（金）

中央地区造構掘り下げ継続。実測も平行して行う。西地区現在での調査区全景写真撮影する。  
合わせて個々の造構についても撮影。東地区東へ拡張する区域重機で表土除去。

1月23日（月）～1月27日（金）

中央地区造構掘り下げ・実測継続。南西隅の溝は宝林寺の北溝（堀）と思われ、周辺の杭列も伴うものと考えられる。西地区割り付け後実測始める。

1月30日（月）～2月4日（土）

中央地区造構掘り下げ・実測継続。小土壤から伏せた状態で龍泉窯青磁完形品出土。西地区実測。2月1日は姫路観測所開設以降最高の大雪で30cm以上積雪し、4日間まとまに作業行えず。

2月6日（月）～2月10日（金）

中央地区造構検出・実測作業継続。西地区造構に残していた畦畔除去し、全体ならびに各造構単位の写真撮影。東地区で新たに発電機借り、ベルトコンベア設置し、拡張部分造構検出作業行う。

2月13日（月）～2月17日（金）

今週も雪で作業余り遅まざる。中央地区造構掘り下げ・実測継続。西地区実測継続。東地区造構検出後、溝・ビットなど掘り下げる。南隅で集石土壙の一部を確認したため南へ拡張する。

2月20日（月）～2月24日（金）

中央地区造構掘り下げ・実測継続。西地区中世墓（方形周溝墓）溝内の遺物取り上げ、疊除去し、底まで下げる。他の造構も同様に遺物取り上げ作業。東地区南端の集石土壙3基が切り



第8図 写真測量風景

合っている。清掃後写真撮影。全景写真撮影。用地内の小屋などの物件撤去が遅れているため粗仕事を終えたので大半の作業員の方、24日から中断する。

2月27日（月）～3月2日（金）

中央地区実測継続。東地区割り付け行う。

3月5日（月）～3月10日（土）

全地区航空写真的ため清掃。ヘリによる空中写真撮影行う。井戸の写真測量を実施する。（アジア航測株式会社に委託）クレーンによる写真撮影。中央地区・東地区実測継続。

3月12日（月）～3月16日（土）

今週から本格的作業再開する。中央地区南半部分遺構面検出作業。実測継続。土壌15で炭化米（後の鑑定でムギと判明）底に固まって出土。藁も炭化して残存。

3月19日（月）～3月24日（土）

中央地区実測継続。24日に今年度の現地説明会を実施する。

3月26日（月）・3月27日（火）

58年度の作業を終了するため、土納作りなど行い、全体清掃シートで覆い作業を10日間位中断する。

## （2）59年度発掘調査

昭和59年度発掘調査は、年度が変わっただけで継続調査と何ら変わりはない。年度末・年度始めの仕事のため、10日間期間があいたにすぎない。ただ、調査体制が前年度の県・市1名ずつの調査員によって実施したのに対して、年度当初から計画に組み込まれていたので、県教育委員会職員2名によって調査が実施された。

調査は4月9日から再開し、7月3日にプレハブを解体するまで59日間、延658人の作業員の方々の協力を得て、宝林寺北遺跡の発掘調査を終了した。作業員の方々は、引き続き門前・下沖・井上を中心とした揖保町・菅田町の地元の方々の参加を得た。

宝林寺北遺跡部分の本体工事は、3月30日に工事発注を行い、4月早々から現地に事務所を建設し、本格的工事の準備が行われ始めた。そのため、調査と工事準備とが部分的に錯綜し、一部では混乱を生じ、気分的に追われる状況のもとで59年度の調査は進められた。

### 調査の組織

調査事務　社会教育・文化財課

　　課長　　西沢良之

　　文化財担当参事　　大西章夫

　　副課長　　森崎理一

課長補佐	和田富夫
管理係長	小西清
埋蔵文化財調査係長	榎本誠一
主査	坂本豊明
技術職員	大平茂
事務職員	杉本恵子
調査担当	社会教育・文化財課
技術職員	岡田章一
技術職員	渡辺昇
調査補助員	
	片山昭悟・小林正人
調査参加者	
	幸内豊・内匠忠一・柳生信夫・三村竜二・瀧北安夫・山口重雄・村瀬義一
	瀧北哲也・石原康範・森澤時子・土井栄子・瀧北ゆき子・上田しげよ・三宅康子
	赤松都子・栗川律子・出羽操・房安まゆみ・藤田鈴枝・柴原直美・赤松千恵子
	出田敬子・井上和代・清水美穂・内匠真澄・金治美香・高坂美恵子

#### 調査日誌抄

昭和59年4月9日（月）～4月13日（金）

中央地区実測継続。土壤15（炭化ムギ出土土壤）畦畔上層図作成し除去する。写真撮影。集石土壤3は須恵器甕を棺に使用していた。

4月16日（月）～4月20日（金）

中央地区南半造構検出作業。今週から本格的に調査再開。実測継続。石列・溝・屋外炉・火葬墓新たに確認。西地区残っていた建物基礎も含めて解体始まる。

4月23日（月）～4月27日（金）

中央地区造構掘り下げ・清掃・写真撮影行う。東地区集石土壤実測。石を除去し掘り下げる。2基は木棺と思われるが残存状態悪い。西地区造構上面まで重機によって排土する。

5月7日（月）～5月11日（金）

東地区井戸2基の断ち割り作業を行う。重機によって井戸1は南半を井戸2は西半を掘り下げ、清掃後写真撮影。写真測量用の撮影も8日に行う。集石土壤掘り下げ・写真撮影・実測。西地区抜張部分造構面まで下げる。

5月14日（月）～5月18日（金）

西地区造構検出作業を行う。建物撤去部分は基礎で造構面損傷を受けている。駐車場下の

部分のみ遺構残存。トレント2本設定して下層遺構面の確認を行う。南端で奈良時代の土壙・ピット確認する。

5月21日（月）～5月25日（金）

中央地区実測継続。西地区トレントに挟まれた部分下層まで下げる。遺構は南端の部分のみ残存している。2本のトレント深掘し、砂層・礫層まで下げる。

5月28日（月）～6月1日（金）

中央地区遺構掘り下げ・実測継続。西地区

トレント掘り下げ後、写真撮影・実測し、西地区的調査終了。

6月4日（月）～6月8日（金）

中央地区遺構面下げるが、遺構の広がりは狭小である。遺構実測継続。

6月11日（月）～6月15日（金）

中央地区掘り下げ継続。古式土師器出土。土師器皿が詰まった土壙検出する。

6月18日（月）～6月23日（土）

中央地区下層掘り下げ継続。遺構実測継続。23日現地説明会を行う。

6月25日（月）～6月29日（金）

中央地区実測終了。周辺の田に水を入れ始めたので湧水激しく、断面横からも入り込んでくる。井戸重機によって西半断ち割り行う。土層断面実測。東西・南北に各1本機械でトレント掘削。土層図作成。29日立面図写真撮影のため撮影。撤去準備始める。28・29日西方の西構散布地の確認調査実施。

7月2日（月）～7月5日（木）

プレハブ解体など撤去準備。器材など山陽自動車道現場事務所へ運び、宝林寺北遺跡の発掘調査終了する。

#### 第4節 整理作業の経過

##### (1) 昭和58・59年度整理作業の経過

発掘調査中、雨天の日など少量ながら現地にて水洗作業およびネーミング作業を実施した。主に現地説明会に合わせて完形やそれに準ずる土器が対象である。

また、土壙内の土を採取し、ふるいにかける作業は調査事務所に帰ってからは作業上難しいので、土の水洗は優先的に全て現地で行った。



第9図 展示風景（西播文化会館）

## (2) 昭和60年度整理作業の経過

本年度から本格的に整理調査を行った。調査が県・市両教育委員会職員が行ったため、部分的に両者で実施せざるを得ない状況であった。そのため、一部を龍野市教育委員会で実施し、大半は神戸市兵庫区の兵庫県埋蔵文化財調査事務所に搬入して実施した。コンテナ箱(セキスイ TS-28)に306箱の遺物量で、水洗作業から実測作業までと遺物の写真撮影を実施した。接合作業は遺構出土の遺物を森岡みゆきを中心に実施した。遺構単位で接合を行い、図化可能なものはほとんど実測した。土師器皿などは3分の1以上残存しているものを、須恵器などは6分の1以上をある程度の基準として図化した。特殊なものはその限りでない。鉄器は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課加古千恵子の指導の元に岡村真理子が主に担当した。鉄器処理にあたりX線撮影を導入するなど新しい方法で作業を行った。指導戴いた加古氏をはじめ機器を使用させて戴いた奈良国立文化財研究所ならびに同研究所の担当の方々に感謝致します。整理作業中に調査事務所の今年度の展示会のテーマが中世の兵庫で「莊園・館・経塚」と題して10月11日から27日まで開催され、中世墓などの出土遺物を展示した。また、引き続き開催された揖保郡新宮町の西播磨文化会館での「西播磨の原始・古代・中世をたぐる」展にも出展した。これら展示会や整理作業中に来所された方々から有形無形の教示を得た。十分に咀嚼出来なかったことが惜しまれるが御寛恕戴きたい。

### 調査の組織

調査事務	社会教育・文化財課
課長	北村幸久
文化財担当参事	森崎理一
副課長	黒田賢一郎
課長補佐	和田富夫
管理係長	小西清
埋蔵文化財調査係長	樺本誠一
主査	坂本豊明
事務職員	松本豊彦
技術職員	森内秀造
技術職員	加古千恵子
調査担当	
龍野市教育委員会	社会教育課
兵庫県教育委員会	社会教育・文化財課技術職員
調査補助員	
森岡みゆき・西上知予子・伴悦子	

岡村真理子・池田紀子・池田早恵・  
吉村幸子・赤松千恵子・出田敬子

### (3) 昭和61年度整理作業の経過

今年度は全ての作業を兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行った。継続作業ではあるが、調査事務所の全体計画もあり、本格的には秋の展示会終了後の11月から実施した。実測作業の残りからの作業を小川真理子・岡村真理子を中心に行い、トレースは伴 悅子が主担した。古式土師器の実測については長浜幸子が主に担当した。遺構に伴うものは、前年度の基準によりほとんど図化したが、見直しをはじめ手を入れたりしたため、予想以上に時間を費やした。遺構外の遺物についてもより多く図化するよう努めたが、土師器においては小片については行っておらず、遊離遺物については全てを実測していない。レイアウト作業以降は、八木和子・香春由美・池田早恵を中心に上記4名が協力して作業にあたった。報告書刊行前は、あわただしいのが常であるが、他の報告書とも重なり、より以上の多忙をきわめたが、終了したのは補助員の方々の協力によるものである。



第10図 整理作業風景

### 調査の組織

調査事務	社会教育・文化財課
課 長	北村幸久
文化財担当参考事務官	森崎理一
副 課 長	黒田賢一郎
課 長 補 佐	福田至宏
管 理 係 長	小西 清
課 長 補 佐 兼 埋蔵文化財調査係長	大村敬通
主 査	小川良太
主任	加古千恵子
事 務 職 員	松本豊彦
事 務 職 員	足立彰久
技 術 職 員	渡辺 界

調査担当 社会教育・文化財課

主 任 岡田章一

技 術 職 員 渡辺 異

調査補助員

小川真理子・岡村真理子・前田陽子・伴 悅子・八木和子・池田早恵・長浜幸子

香春由美・森岡みゆき・西田知子子・滝川友子

第11図 宝林寺北遺跡の位置



## 第2章 地理的環境

### — 摂保川下流域平野の地形環境Ⅱ —

(立命館大学・地理) 高橋 学

摂保川・林田川・大津茂川により形成された広義の摂保川下流域平野は、從来、文献史学や歴史地理学の調査対象として注目をあびてきた。それは、播磨國風土記(靈龜元年・715)をはじめ、鶴御庄条里図(嘉慶4年・1329)や大徳寺領播磨小庄内三職方条坊坪付図(文和3年・1354)といった荘園絵図および摂保川右岸地域北部に関する官宣言(建久8年・1197)、摂保川左岸南部の坪付を記した福井莊関係文書(弘安10年・1287)、東保上村地頭中分坪付(康暦元年・1379)等の史料が豊富に存在することによる。また、近年、山陽自動車道や太子一龍野バイパス等の建設に伴う遺跡の発掘調査も急速にその数を増加させている。今回報告する宝林寺北遺跡も、太子一龍野バイパスの建設に先立って実施された発掘調査によって発見されたものである。

さて、文献史学や歴史地理学等の業績にはめざましいものがあるのに対し、当地域の自然環境、特に平野の形成プロセスに関する研究は極めてとぼしいのが現状である。<sup>(1)</sup>このため、現時点で判断するならば、明らかに誤った見解が一般に流布しているようである。この見解の一部は、前に挙げた文献史学などの業績の前提条件として用いられていることもあり、早急に改善される必要がある。そこで、筆者は1985年に刊行された丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書の中で、<sup>(2)</sup>摂保川下流域平野の地形分析を行い、成果の一部を公にした。<sup>(3)</sup>今回の報告は、その続編にあたるものである。前回の論旨を簡単にまとめるところとなる。

1) 平野の中に点在する立岡山、壇特山、朝日山等は、かつて島であったと考えられていたが、御津町基山とそれに隣接する標高38mの地点および姫路市に属する下野特殊遺跡の立地する標高23mの3地点を除き、少なくとも最近数万年間に、周囲を海でかこまれた島であったところは存在しない。

2) 本来、シーカナメモチ群集が成立するはずの山地は、現在、二次植生のアカマツーモチツツジ群集の軽林となっているが、これには古代木以降の人为的な植生の伐採が大きく関与している。

3) 摂保川下流域平野は全体的には扇状地状の地形をなしている。

4) 繩文海進時には、摂保川沿いでは姫路市下余部付近まで、大津茂川に沿っては姫路市田井付近まで海域となった。また、海進の影響を受けて、京見山の南麓から姫路市宮田、同市坂出付近まで低湿化した。

5) 丁・柳ヶ瀬遺跡付近では、約3,000年前を境として、礫から砂・シルトへと堆積物が細粒化しており、堆積環境が扇状地帯から自然堤防帶へと変化したものと考えられる。

6) 従来、まだ形成過程にあると考えられていた沖積平野は0.5~2m程の崖を境に完新世段丘面と現氾濫原に細分できる。

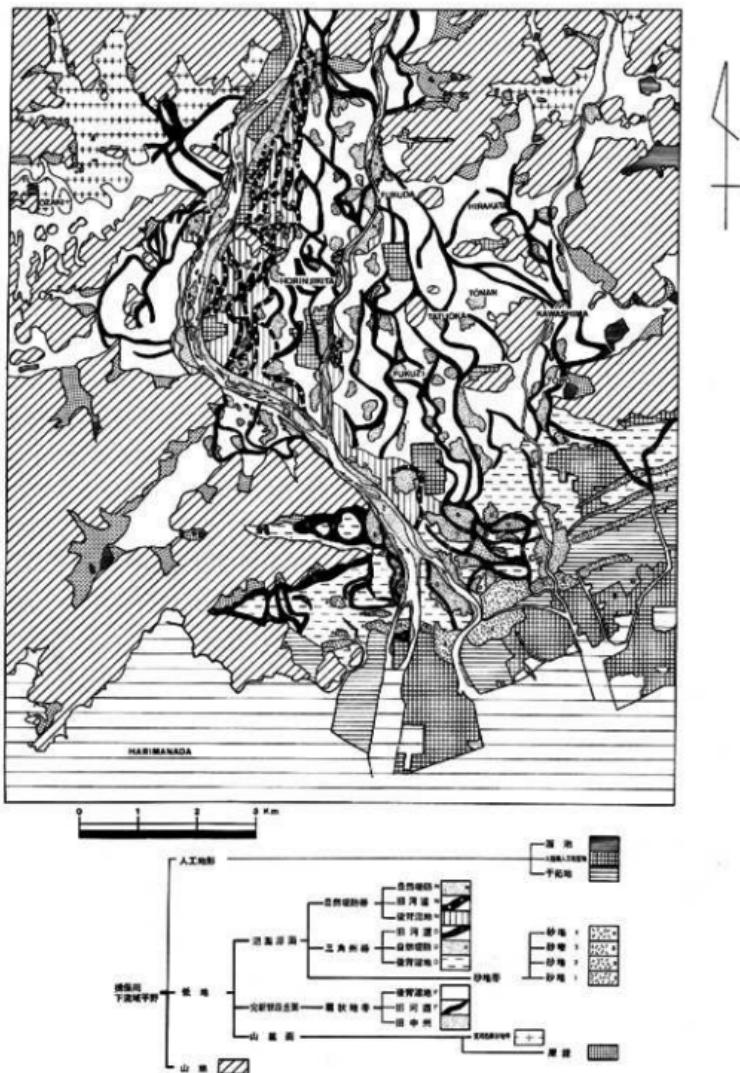
7) 完新世段丘の崖が形成されたのは古墳時代末~中世初頭の間と考えられ、それ以後、完新世段丘上では河川の氾濫による土砂の供給がほとんどなくなり、地形の形成が停止したようである。

以上の成果をふまえ今回の報告では、新しく得られた資料によって完新世段丘の性格について検討を進めると同時に、宝林寺北遺跡の地形環境の変化について考察して行きたい。

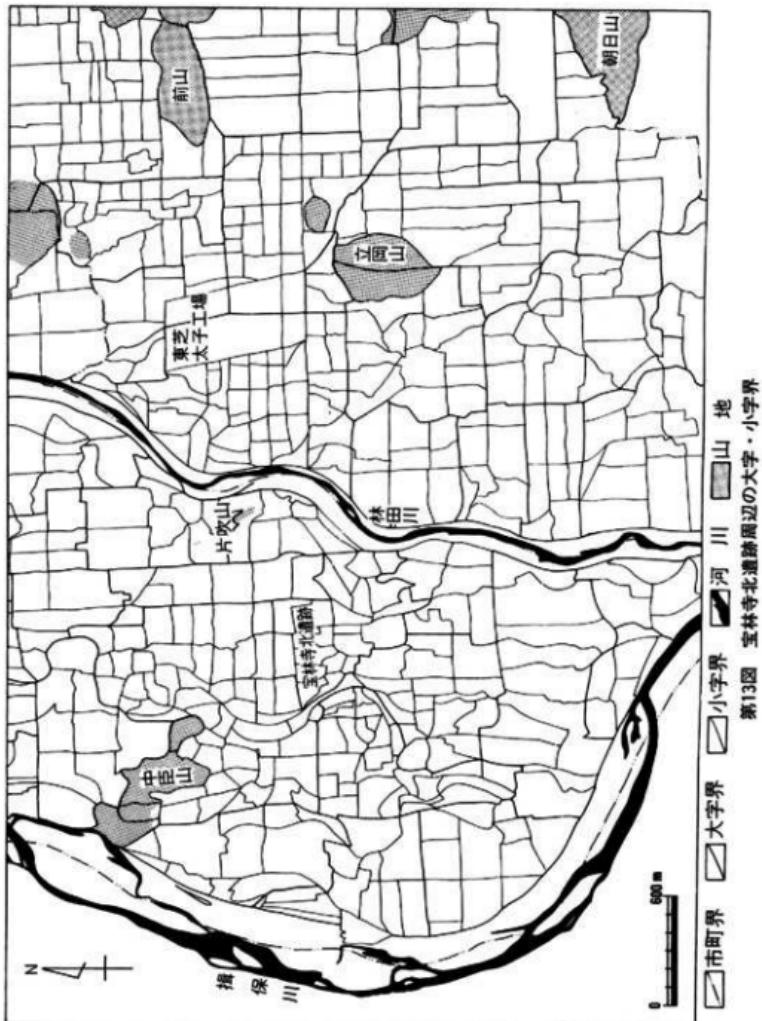
第1図は空中写真(1/10,000カラー・1/10,000モノクロ2種類)の判読と現地調査によって作成された地形分類図である。これによれば、揖保川下流平野には、市川左岸や加古川流域以東で特徴的であった大阪層群からなる丘陵や上部更新統に属する段丘の発達が顕著でない。これは六甲変動と呼ばれる地盤運動の影響により播磨平野の東部ほど隆起傾向にあるために、更新統が地表面に表われやすく、西部では沖積平野の下に埋没しやすいことによる。丘陵や段丘に代って、現地表面の広い面積を占めるのが完新世段丘面である。完新世段丘面は、いわゆる段丘が更新世に形成されたものであるのに対し、より新しい時代の完新世に属する地形である点で異なる。今回報告する宝林寺北遺跡をはじめ、すでに報告書の刊行された川島遺跡、立岡遺跡、福田天神遺跡、片吹遺跡、丁・柳ヶ瀬遺跡、さらに近年調査が実施された福田片岡遺跡、平方遺跡など、平野部で発見されるほとんどが完新世段丘面上に位置している。これは、段丘化に伴って河川の氾濫による土砂の供給が停止しているため、遺構面の埋没深度が浅く、現地表面に遺物が散布しやすい状態にあり、遺跡として認定される可能性が高いことによると思われる。

この段丘化の時期に関しては、従来、縄文時代末から弥生後代初頭のいわゆる弥生海退時にあたると考えられていたが、後に詳述するように揖保川下流域平野の場合、古墳時代末以降中世初頭までの間と考えた方が良さそうである。しかし、前者に属するものも全国各地で見出されており、それを完新世段丘I(弥生段丘)とし、後者を完新世段丘II(古代段丘)とすべきかもしれない。

さて、完新世段丘面上には現在、条里型土地割が広く展開しており、谷岡武雄(1964年)によって詳細に検討されている。この条里型土地割の施行時期と段丘化の時期の前後関係は当地域の開発史を考察するために重要な問題となる。すなわち、段丘化以降に条里型土地割が施行されたのであれば、現在の土地割や土地条件、灌漑水利システムなどは、条里型土地割の施行時と基本的に変化していないことになる。これに対し、段丘化に先行して条里型土地割が施行された場合には、土地割の破壊、土地条件の高齢化(地下水位の低下)、土地条件の安定化(河川の氾濫に対する被害減少)などが直接的な影響として顯われてくる。また、それに対する人



第12図 摂保川下流域平野の地形分類図



第13図 宝林寺北邊跡周辺の大字・小字界

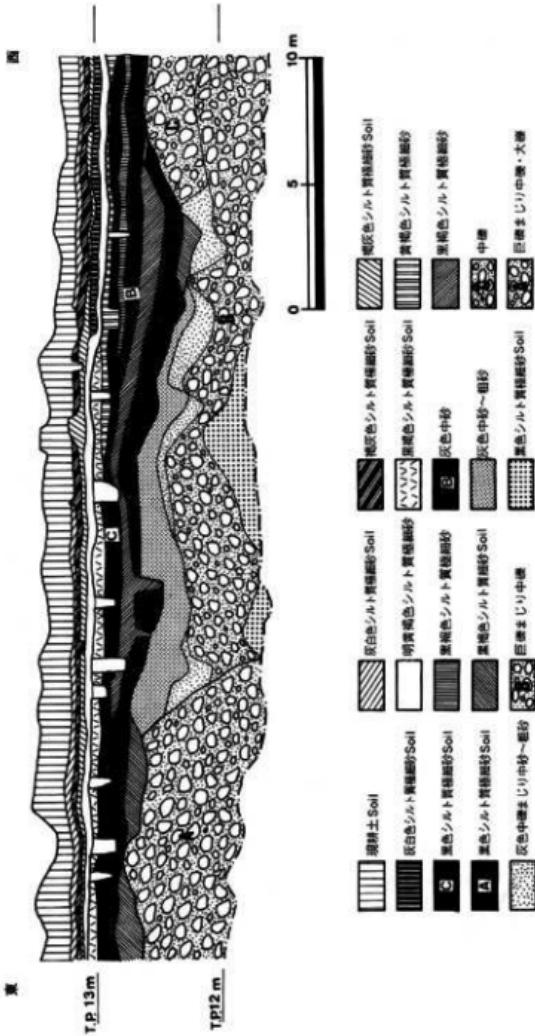
□市町界 □大字界 □小字界

□河川 □山地

間の対応として、灌漑水利システムの変更（既存システムの変更あるいは新システムの導入）をはじめ、土地利用や農法の変更、あるいは新品種の導入などが必要となってくる。これに失敗すると、耕地の放棄（荒野の出現）さえも余儀無くなる。段丘化が条里型土地割施行後に生じた場合には、土地割施行当初の状態がそのまま現在へ至ったのではなく、土地利用システムの変更、あるいは耕地の一時的な放棄の後、再開発を経たものであることになる。今までのところ段丘化の時期および条里型土地割施行の時期ともに推定年代に幅がありすぎるため、これ以上の論究は困難であるが、今後重要な問題として検討して行きたい。なお、鶴荘はじめ小宅荘、弘山荘、福井荘、そして宝林寺北遺跡の周辺に広がる浦上荘などは、いずれも完新世段丘上に比定されているが、上掛保荘、下掛保荘の比定地は現氾濫原であり、段丘化は遅くともその形成以前に遡る。また、掛保上遺跡、掛保中遺跡の性格も段丘化の時期を考える上で問題となろう。

さて、次に宝林寺北遺跡およびその周辺の地形環境に注目してみたい。宝林寺北遺跡は谷岡氏の条里（坊）復原によれば掛保郡14条10坊15坪・16坪にあたる。第2図には遺跡周辺における小字・大字界を示したが、整然とした区界の中に幾筋かの細長くうねる乱れが見出される。特に宝林寺北遺跡の西側のものは明瞭であるが、これは完新世段丘崖下を流れた掛保川本流の旧河道Nである。これと現在の掛保川との間が氾濫原にあたり、しばしば氾濫の被害を受けてきた。他方、片吹山の北側から立岡山の南西側に認められる字界の乱れおよび東芝太子工場の北方から立岡山の北西側へ連続するものは、旧河道Fが岩浦井、赤井、片吹井などの灌漑用水として利用されていることに起因している。以上の様に土地割や字界に影響を与える旧河道の他、そうでない旧河道も数多くある。それらは、完新世段丘がまだ段丘化していないかった段階の掛保川や林田川の旧流路であり、現在は埋没してしまっている。埋没旧河道は空中写真判読で色調の差として読みとることのできるものである。これらは旧河道Fと分類されるが、分布形態が網状をなすことから、扇状地的な性格の地域を流下していたものと思われる。すなわち、完新世段丘は、段丘化以前において扇状地帯であったと判断されるのである。この様な観点に立つならば、完新世段丘は、旧中州と旧河道から構成されていることが判る。また、現在の集落のほとんどは、旧中州の所に立地していると言って良い。したがって、完新世段丘上で発掘調査を実施するならば、旧中州にあたる砂礫層で構成された微高地と、旧河道にあたる凹地が流路堆積物やそれを埋没させた後背湿地性の有機物に富む細粒物質によって充填されている状態で検出されるであろうことが事前に推測された。

さて、実際に発掘を行ってみると、予想した通りの地層が観察された。第3図は東区と中央区の間に設定されたトレンチの断面を示している。第1表を参照しながら断面図を検討すると、まず3段階に地層が大別できることに気づく。すなわち、下部を占める起伏に富んだ砂礫層、中部の相対的凹地部分を充填する有機質に富んだ細粒物質、そして上部には、ほぼ平坦に堆積



第14図 宝林寺北道路表層地質断面図

第1表 宝林寺北遺跡の環境変遷表

ステージ	層相	開発	包含されている遺物	その他
ステージ12	現耕土	水田	現在	
ステージ11	灰白色シルト質極細砂	水田		上面は現耕作で擾乱
ステージ10	褐灰色シルト質極細砂	小畦畔・水田		大畦畔は前のものを利用
ステージ9	褐灰色シルト質極細砂	大畦畔・水田		条里型土地割
ステージ8	灰白色シルト質極細砂 明黄褐色シルト質極細砂	水田?		
ステージ7	黒褐色シルト質極細砂 黃褐色シルト質極細砂	掘立柱建物 墓	12C末~13C初頭	礎浅い所一住居 礎深い所一墓
ステージ6	黒色シルト質極細砂C 黒褐色シルト質極細砂	小畦畔・溝	古墳前期	水田、起伏わずか
ステージ5	黒色シルト質極細砂B 黒褐色シルト質極細砂		古墳前期	後背湿地堆積
ステージ4	黒色シルト質極細砂A	ピット	古墳前期	
ステージ3	黒褐色シルト質極細砂		古墳前期	
ステージ2	砂礫瓦層			起伏の形成
ステージ1	巨礫まじり中礫・大礫			起伏の形成

した細粒物質が認められるのである。下部に存在する砂礫層は周辺で実施されたボーリングの結果によれば、少なくとも現地表面下17m以上続いているようである。この中には、埋没段丘構成層、狭義の冲積層底基疊層、および冲積層上部砂層に対比される砂礫層が認められるはずであるが、今のところ明確な細分は不可能である。丁・柳ヶ瀬遺跡の調査成果によれば、これと同様な砂礫層中から出土した流木のうち最も新しいものは3,270±65年B.P.(N-4688)の<sup>14</sup>C年代値を示した。すなわち、砂礫層は、それより新しい時代にも堆積したものと考えられるのである。砂礫層の上面はかなり起伏に富んでおり、この起伏は後の時代の土地利用に影響をおよぼしている。微高地部分は居住域として、凹地をなす部分は水田として利用されたのである。断面観察によれば、この砂礫層は砂の間層を挟み3層に細分が可能である。このうち砂礫層Aは旧中州を構成しているものであるのに対し、砂礫層B・Cは旧河道を埋めた流路堆積物であることが堆積構造から推察される。

さて、中部にあたる有機質に富む細粒物中からは、古墳時代前期の遺物が出土している。この地層を詳細に検討すると、3層の旧表土が確認され、そのうち下層にあたる黒色シルト質極細砂Aの上面からはピットが検出された。また上層に位置する黒色シルト質極細砂Cには小畦畔や溝状の遺構が確認できた。かつて流路であった凹地は後背湿地性の堆積物によって速やかに、しかし間欠的に埋積して行ったのである。

さて、凹地が埋積され、ほぼ平坦な地形になると、掘立柱建物のものと考えられる多数のピットが検出されるようになる。また、そこからは12世紀末から13世紀初頭の遺物が出土してい

る。これ以後、当地域における土砂堆積量は減少し、連続と比較的安定した水田が営まれるようになつたようである。なお、現地表面の条里型土地割と同一方向をもつ畦畔が確認できるのは、12世紀末から13世紀初頭の遺物が出土する旧地表面よりも上層においてである。

以上のことを他の発掘成果も参考にしながらまとめると、次のようなことが言えよう。

1) 宝林寺北遺跡周辺は、古墳時代前期以前において、旧中州と旧河道といった起伏に富む地形をしていた。

2) 古墳時代前期頃には旧河道部分に後背湿地性の堆積物が速やかに、しかし2度の間隙を持って堆積し、ほぼ平坦な地形が形成された。

3) 12世紀末～13世紀初頭までに、多数の掘立柱建物が建造された。また、それに付随した井戸、墓などの施設も形成された。なお、後に詳述される周囲に溝を巡らせた中世墓はかつての旧河道部分にあたっていた。遺跡全体からみると旧中州部分に建物が集中する傾向が強く、ほぼ平坦になったものの、土地利用上は差異があった可能性が高い。

4) 12世紀末～13世紀初頭の遺物が出土する旧地表面が形成される前後から堆積物が急減する。また、東地区で検出された12世紀前半以前に使用されていたと考えられる井戸には現在湧水がなく、井戸が掘削されて以降に地下水が低下したことが考えられる。これらのことから、完新世段丘化が生じた時期は、12世紀末～13世紀初頭頃以前であると推定することができよう。

5) 現在の地表面に認められる条里型土地割と同方向をもつ畦畔は、12世紀末～13世紀初頭の遺物を出土する旧地表面より上層でしか確認できない。ただし、この事実は条里型土地割が施行された時期を示すものではない点に注意が必要である。安定した土地利用が連續した場合、その初源を求めるることは、考古学的手法ではかなり困難であると言わざるを得ないのである。

揖保川下流域平野では、開発に伴う遺跡の発掘調査が現在も次々と行われており、今後はそれらの成果も加え、宝林寺北遺跡で得られた成果の当否について慎重に検討し、当地域における土地開発プロセスを解明して行きたい。

註1) このような中で田中真吾「龍野とその周辺の地質と地形」 龍野市史編纂委員会編『龍野市史』 第1巻所収・1978年は批判に耐えうる業績として貴重なものと言えよう。

註2) 高橋学「丁・柳ヶ瀬遺跡の地形環境」および「地理的環境」 兵庫県教育委員会編『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』所収・1985年。

註3) 中西哲編『播磨西部地域植生調査報告書』播磨西部地域植生研究会・1977年。

註4) 谷岡武雄『平野の開発』古今書院・1964年。

註5) 揖保中遺跡の南側には条里型土地割が存在するものの、他の地域の様に明瞭な段丘化は認められず、当地域を現泥濘原、完新世段丘のいずれに分類するかあるいは条里型土地割の施行された時期については今後の検討が必要である。

註6) 龍野市役所および太子町役場所蔵資料より編集、一部改変し作成した。

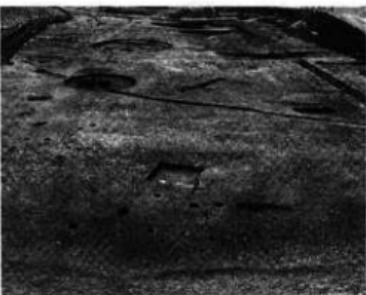
### 第3章 歴史的環境

中国山脈に源を発し播磨灘に注ぐ揖保川が山岳地帯から沖積地へ流れ込む平野の鼠蹊部にあたる龍野市周辺には、多くの遺跡が知られており、近年その数は開発に伴い飛躍的に増加しつつある。質的にも、10年あまり以前にはほとんど知られていなかった縄文時代の遺跡が各所で発見調査され、中世遺跡が広範囲に分布していることが判明しており、調査も盛んに行われている。これらの時代以外の遺跡も開発に伴い着実に資料を積み重ねており、今後もこの傾向に変わりはないであろう。

このように揖保川下流域においては日々、新しい遺跡の発見があり、調査によって内容が確認されている状況であるため、今後時間の経過とともに宝林寺北遺跡を取りまく歴史的環境の解釈も大きく変わるであろうが、現時点における知見としては、揖保川下流域に人類最初の足跡が見られるのは旧石器時代からである。しかし、旧石器遺跡とはいって、内実は数点の石器が採集されているのみで、このような遺物散布地は龍野市神岡町皿池遺跡、揖保郡太子町坊主山遺跡、同町山田岬、揖保郡御津町碇岩等に見られる。

縄文時代の遺跡は、揖保川上流域においては数多く知られていたが、沖積平野で発見されたのは最近で、その多くが後期～晚期の遺跡である。揖保川上流では早期から晚期まで各時代の遺跡が見られるが、下流では前期末の龍野市片吹遺跡が最も古い時期であろう。片吹遺跡では中期末～後期初頭の竪穴式住居が7棟検出されており、晚期まで継続している。これ以外に前期に遡る遺跡は見られず、中期に姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡、新宮町宮内遺跡に遺物の出土があり、後期になると遺跡の数は急激に増加し、龍野市倉利田遺跡、清水遺跡、小犬丸遺跡、北沢遺跡、太子町東南遺跡などが知られている。晚期になると龍野市門前遺跡、上横内遺跡、太子町常全遺跡、立岡遺跡が見られる。しかし調査されたこれらの遺跡で遺構が明確に検出されたのは、時述の片吹遺跡以外には、東南遺跡で竪穴式住居址、配石土壙、北沢遺跡の土壙、堀塹等限られた遺跡である。

弥生時代になると遺跡はさらに増加し、沖積地ばかりではなく周辺の丘陵、尾根上においても見られる。沖積地では縄文時代から継続して営まれる前期の遺跡は門前遺跡、丁・柳ヶ瀬遺跡の2遺跡が知られているが、前期の遺跡は以外に少なく他には龍野市横内遺跡、揖保川町養久谷遺跡が知られているのみであ



第15図 片吹遺跡

る。しかし中期になるとその数は急激に増加し、宝林寺北遺跡の所在する龍野市域においても、清水遺跡、福田片岡遺跡、横内遺跡、尾崎遺跡等の広い平野に立地する遺跡と平野から入り組んだ小さな谷間や丘陵上にも遺跡が営まれるようになり、龍子向イ山遺跡、タイ山遺跡は丘陵上に、沢田宮谷遺跡、東光寺遺跡は谷間に立地しており遺跡の量的な増加とともに質的な広がりがうかがえる。後期になると、前期から継続して営まれているのは清水遺跡のみで他の遺跡は途切れてしまう。後期から新たに始まった遺跡としては、門前遺跡、片吹遺跡、奥村遺跡等がある。

古墳時代になると弥生時代や築造された古墳に比べて見つかっている遺跡数が少なく、

清水遺跡と門前遺跡の2遺跡のみである。これは遺跡数が少ないのでなく、古墳が他の地方に比べても高密度に分布していることから考えると、今後平野部の調査が進むにつれて漸次増加するものと考えられる。また揖保川下流域は弥生時代終末から古墳時代にかけての墳丘墓が数多く分布していることで知られ、揖保川町と龍野市の境に位置する養久山をはじめ、太子町黒岡山、龍野市白鷺山などが調査されており他にも墳丘墓と考えられている地点が多くある。揖保川水系で知られている前期古墳は、一宮町伊和中山古墳、新宮町吉島古墳、養久山1号墳、龍子三ツ塚、太子町松田山古墳、姫路市瓢塚などである。これらの古墳を中心として次に続く時代の古墳の立地や分布から揖保川下流域では小集団がいくつか存在しており、古墳群の内容や規模から当時の社会組織の一端を明らかにできるとしてさまざまな考えが提起されている。龍野市及び周辺地域でも、近年道路敷設等開発によって数多くの古墳が調査されており、龍子長山1号墳をはじめ龍子向イ山古墳群、鳥坂古墳群、養久山古墳群、半田山古墳群、タイ山古墳群、袋戻古墳群、中井古墳群、吉島古墳群、丁古墳群などの調査結果が報告書としてまとめられている。

奈良、平安時代の揖保川下流域は東西交通の通過点として、特に数多くの遺跡を残しており中央と直結した遺跡が各所に散在している。特に東西に走る龍野上郡断層に沿うように山陽道が走っており、街道に沿って駅家、寺院跡が見られる。龍野市揖西町小犬丸には、以前より布勢駅家に比定する考えがあったが、近年度にわたって実施された調査によって、布勢駅家と明示した墨書き器や駅家本体と思われる建物区画が調査され、区画内より鍛冶工房跡などが検出



第16図 鳥坂2号墳



- |            |            |            |            |             |
|------------|------------|------------|------------|-------------|
| 1. 宝林寺北遺跡  | 2. 門前遺跡    | 3. 片吹遺跡    | 4. 福田片岡遺跡  | 5. 福田天神遺跡   |
| 6. 上福田遺跡   | 7. 内山古墳群   | 8. 小宅神社前遺跡 | 9. 宮脇遺跡    | 10. 桜ヶ坪遺跡   |
| 11. 中臣山古墳群 | 12. 中臣遺跡   | 13. 拱保上遺跡  | 14. 西橋遺跡   | 15. 東用遺跡    |
| 16. 常全遺跡   | 17. 立岡山遺跡  | 18. 鹿遺跡    | 19. 西場寺    | 20. 清水遺跡    |
| 21. 半田山墳墓群 | 22. 豊久山墳墓群 | 23. 豊久・谷遺跡 | 24. 赤山墳墓群  | 25. 神戸北山東遺跡 |
| 26. 山津屋遺跡  | 27. 宝記山古墳群 | 28. 袋尻渓谷遺跡 | 29. 金剛山古墳群 | 30. 金剛山庵寺   |
| 31. 真妙遺跡   |            |            |            |             |

第17図 宝林寺北遺跡の位置と周辺の遺跡

されたことによって『延喜式』兵部省の記述「播磨国駅馬明石三十疋、賀古四十疋、草上三十疋、大市、布勢、高田・野磨各二十疋、越部・中川各五疋」にいう布勢駅家であることが証明された。また街道沿いには寺院跡と考えられる古瓦を出土する地点があり、龍野市域のみでも中井、小神、中垣内、奥村で出土している。小神廃寺では飛鳥時代の古瓦を出土しており、畿外では希な例である。奥村廃寺は唯一、山陽道の支道である美作道に面している法起寺式と考えられる寺院である。

また街道に面していない寺院もあり、揖保川町金剛山廃寺、姫路市下太田廃寺があり、氏寺的要素を有していたのであろう。寺院・官衙的遺跡は豊富であるに比べると一般民衆の生活跡は意外に発見されておらず、龍野市内では須恵器生産跡が相生市緑野から龍野市竹原にかけてと、東端である姫路市太市から龍野市中井にかけて営まれており、一般住居を伴う遺跡としては、太子町立岡遺跡、川島遺跡、船遺跡、龍野市横内遺跡、上横内遺跡などがある。

揖保川下流域は律令制度がゆるみ始めた頃から莊園の乱立する地域でもあった。文献上から多くの記述が残されているが考古学的にも調査が進められており、特に平安時代末から鎌倉時代の遺跡が多く調査もよくされている。主なものだけでも龍野市福田天神遺跡、福田片岡遺跡、宮脇遺跡、横内遺跡、沢田宮谷遺跡、太子町城山遺跡、立岡遺跡、船遺跡、平方遺跡などがある。

揖保川下流域は畿内と比較的近く、早くから中央と強く結びついていたため早い時期の莊園も多く、聖徳太子領から始まった法隆寺領鷦鷯荘（太子町）、最勝光院領桑原荘（龍野市）、大徳寺領小宅荘（龍野市）、高野山大塔領福井荘（姫路市）、そして宝林寺北遺跡が含まれる新熊野社領浦上荘（龍野市）など数多くある。

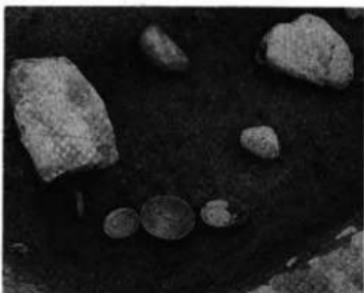
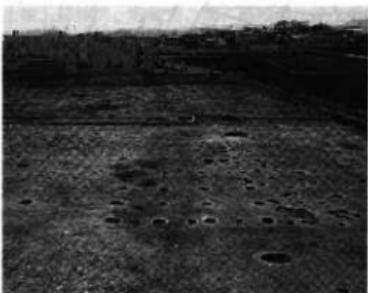
浦上荘の名称は浦上里（浦上郡）から起きたもので、現在の龍野市揖保町山下、中臣、門前、栄、西構、東用、萩原、真砂、揖保川町上河原、市場の10地区を範囲としていた。しかし「播磨國風土記」では御津町室津を含む海岸地帯をも含んでおり、宇頭川と呼ばれていた揖保川の西岸一帯を指していたようである。そして宝林寺北遺跡一帯は風土記の時代には萩原里に含まれていたようである。萩原里は宇頭川と意此川（林田川）に挟まれたきわめて不安定な所であったと考えられ、地味も「中の中」で浦上里の「上の中」、広山里の「中の上」、桑原里「中の上」、揖保里「中の中」と比べてやや悪い。ところが「倭名類聚抄」には萩原郷が記載されておらず、かわりに中臣郷の名が見られ、風土記と倭名類聚抄が編さんされた間に郷の統廃合が行



第18図 奥村廃寺塔跡・金堂跡

われたようである。のちの浦上荘は、この中臣郷と浦上荘の北部をまとめてつくられたと考えられ、養和元年（1181年12月）、後白河院庁下文案の中に新熊野社領28ヶ荘の1つとして記されている。その後、浦上荘は熊野御領から大徳寺領と変わるが、これは宝林寺北遺跡の付近において生誕した大徳寺開山住寺である大灯国師宗峰妙超の力による。宗峰妙超は浦上一国を父とし、赤松円心の姉を母として、書写山や京都萬寿寺で学び、東山の雲尾寺にいた時、円心が甥のために大徳寺の前身となる堂を建立している。宗峰妙超に花園上皇が帰依、大徳寺を祈願所とされたのをはじめ、後醍醐天皇も祈願所とされ大徳寺を五山に列し、南禅寺と並んで五山の第1位とされ、小宅荘三職方の知行安堵や、下総葛西郷の地頭職などが寄進されたが、宗峰が故郷の浦上荘の領有を望み葛西郷の替地として認められたものである。しかし浦上荘は本来、宗峰の出身氏族であった浦上氏の本貫地であったため、浦上氏と所有・管理権をめぐってたびたび争いを起こしたらしく、やがて大徳寺の勢力は浦上荘から驅逐されていったようである。また現在、門前にある宝林寺は赤松則祐が建立した宝林寺とは別のもので、赤松氏の宝林寺は備前国新田荘中山に建立、戦火で焼失後、播磨国赤松村に再建されたものである。龍野市門前の宝林寺は宗峰没後、生誕地に追善のため建立されたものである。宝林寺北遺跡の調査範囲は現在国道2号線によって分離されているが、寺城を示す堀跡が検出されており、かつては境内であったのかも知れない。しかし今回調査された宝林寺北遺跡の中心時期は宗峰妙超の生誕時期よりも古く直接は結びつかないものと考えられるが、出身氏族である浦上氏に関連する遺跡である可能性はある。

鎌倉時代になると源頼朝は、源平の争乱の終結と共に熊野御領である浦上荘の地頭に播磨守護職であった梶原景時を任命したが、景時が年貢徵収を怠り社役が闕忘するとして後白河法皇が文治5年（1189年）、頼朝に景時の地頭職の停止を要求して認めさせている。その後の本遺跡周辺は山陽道沿いの農村地帯として近年に至っている。



第19図 福田天神遺跡

第20図 宝林寺北道路地区計画図



## 第4章 中央地区の調査

### 第1節 位置・概要

調査地中央の調査面積の最も広い地区で、2,550 m<sup>2</sup>を調査した。西地区とは接しており、調査前には同一調査地区として考えていたが、両地区間に遺構の存在しない疊層が露出した部分があり、遺構面が続かないで二地区に分けた。中央地区は、国道2号線と接する部分で、遺跡名とした宝林寺の北接部分である。東地区とは180mと大きく離れ、間に旧河道があり分断されているが、遺跡の時期は同一である。中央地区は東西いずれも旧河道があり、遺跡の東西方向の広がりは60~75mと確認されている。また、今回の調査地区でも南側の方が遺構密度が稀薄になり、遺跡の南端をほぼ調査し得たものと考えている。石列による整地層の南端を確認していることからも立証出来ると考えている。ただ、北側へは遺跡が伸びていることは確実で、調査地北端で検出された遺構も多く認められるため、広がりはつかめていない。地形的に見て遺跡は幅を狭めながらも相当距離遺構面は続いているものと思われる。巨視的に見て、また遺跡群として理解するなら、中臣山から伸びてくる微高地上に含まれた遺跡の1つと考えられるものと思われ、桜の坪遺跡、揖保上遺跡などと親縁性があるものと考えられる。いわゆる揖保平野の中心地に位置している遺跡で、揖保川・林田川に挟まれた肥沃な土地と考えられる。

遺構の集中度は最も高く、建物跡を把えるのに困難を極めた。埋土によって3種に遺構を分けて調査したにとどまり、細分は行えなかった。垂直的な時期差はなく、同一平面での切り合ひ関係しか確認出来なかった。出土遺物からは、古墳時代初頭から近代に及ぶものであるが、遺構は、奈良時代の少數のピットや室町時代の少數のピットや近世以降のピット・溝・土壙を確認しているが、大半は平安時代後半から鎌倉時代前半の時期の遺構である。

遺構の種類は、掘立柱建物跡、竪穴住居跡に似た方形落込み、井戸、墓と考えられる集石土壙、屋外炉、貯蔵穴、溝、整地層に伴う石組をはじめ多数のピット・土壙・落込みを検出している。遺構数にして、1,024カ所の数のピットなどを調査している。

遺構の主軸方向はほぼ南北を向いており、新しい段階の建物跡や溝は主軸を西にやや振っている。遺物も出土せず、埋土も異なっている疊層に掘り込まれたピットも新しい段階の遺構と考えている。

### 第2節 建物跡

中央地区で960基余りのピットを検出している。重複したり、土壙・落込みで削られている

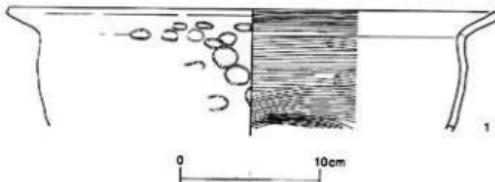
ものを加えるとさらに増加することになる。切り合い関係も多くあると思われる。そのため、明らかな掘立柱建物を検出することは困難であった。堆積土の違いなどの検討から、8棟の建物跡を確認している。ただ、上記の理由から単位として把えただけの建物もあることを断つておく。

### 1. 建物1

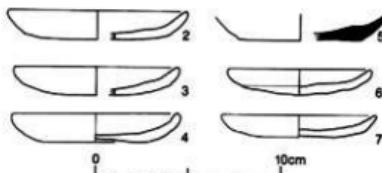
調査区北東部分の建物跡で、周辺は近世の擾乱を受けている。主軸方向は他の建物跡と異なって、やや東に主軸方向を振っている。柱間は両辺で異なっている。東西方向は、1.5m間隔で2間で、南北方向は3.6mで2×2間の建物と想定される。ただ、北へは延びている可能性があり、2×2間以上の建物と思われる。

建物1に関連する柱穴（ピット）から出土した建物は、土師器・須恵器で固化したものは須恵器1点以外は土師器に限られる。(1)は建物跡に隣接したピットから出土している。直接建物1に関係する

遺物と断定は出来ない土器である。復原径34.6cmの鍋で残存高8.6cmを測る。内面は粗いハケで整えているが、外面はユビ成形したままである。外面は全体に煤が付着している。(5)は須恵器椀の底部で、底部の切り離しはヘラで行っている。(2)(3)(4)(6)(7)は土師器小皿である。全て破片で(6)(7)は図上で完形に復原出来る。製作技法は、ユビ成形のち口縁部をヨコナデで仕上げるものである。ただ、(3)のみ内面全体にヨコナデが施されており、丁寧に作られた印象を受ける。(7)は建物跡の北西の柱穴埋土から出土している。



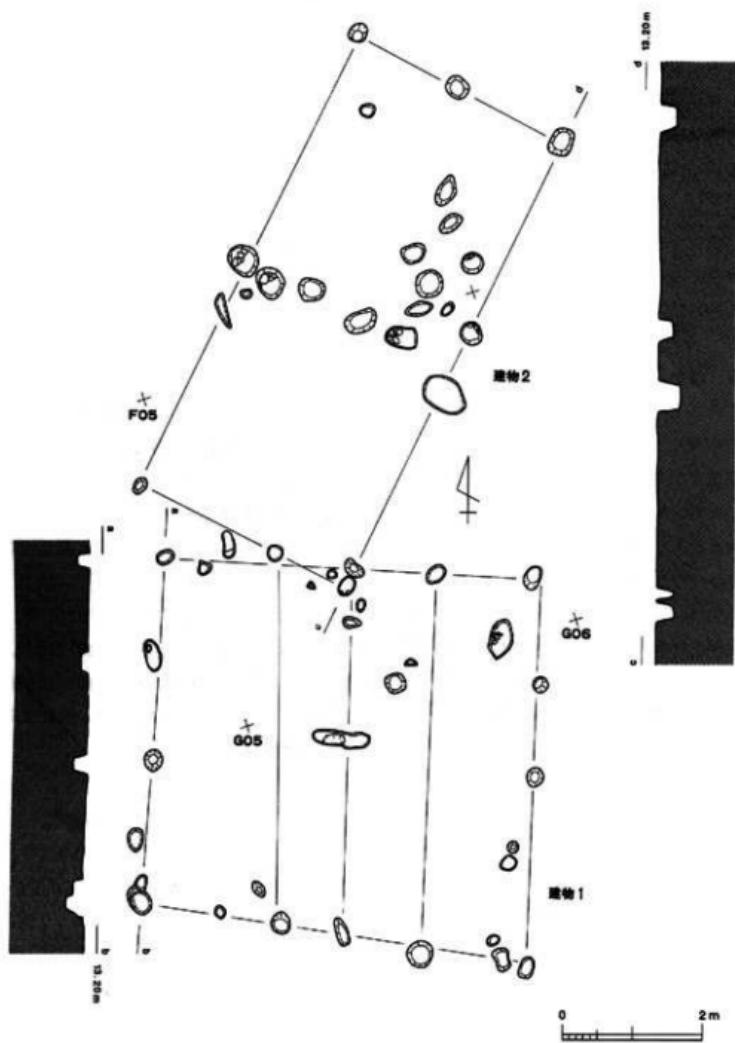
第21図 建物1土器実測図(1)



第22図 建物1土器実測図(2)

### 2. 建物2

建物1の南側にある遺構で、主軸方向は大半の遺構と同じほぼ南北方向である。確認できる建物の規模は、南北3間、東西5間である。しかし、南北方向の中央の1間は2.6mを測り、測定される値は、南北4.8m、東西5mとほぼ正方形に近い建物である。東西の1間は1mである。南北の狭い部分は1.1mを測る。不明確であるが、南西コーナー部に2×2m（東西1間、南北2間）の突出部が付属している可能性も考えられる。



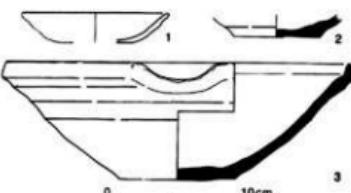
第23図 建物1・2実測図

遺物は、須恵器・土師器が出土している。図化したものは5点で、(1)は土師器で建物跡南東の柱から出土している。胎土は緻密でユビ成形のちヨコナデで仕上げている。口縁端部のみ強くヨコナデしており稜線が出来ている。口径10.4cmで時期的に遡る遺物と思われる。(2)(3)は須恵器である。(2)は精緻な胎土で糸切り底である。(3)は焼成が悪い。片口の鉢で表面磨滅している。口縁端部のみ黒色に焼き上げられている。(4)(5)は土師器皿で、(5)は深い小皿である。

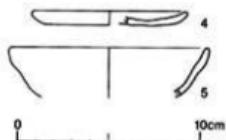
### 3. 建物3

中央地区の遺構集中部分であるFG08・09に存在する遺構で、南接して落込み1・2が存在する。建物は3間×3間の規模で、東西方向6.4m、南北方向6.5mのほぼ正方形である。ただ、柱間は、南北が北から、2.2m・2.1m・2.2mとほぼ均等であるのに対して、東西は西から2.2m・1.8m・2.4mと中央の柱間が狭くなっている。主軸方向は、他の遺構と異なっており、やや西に振っている。

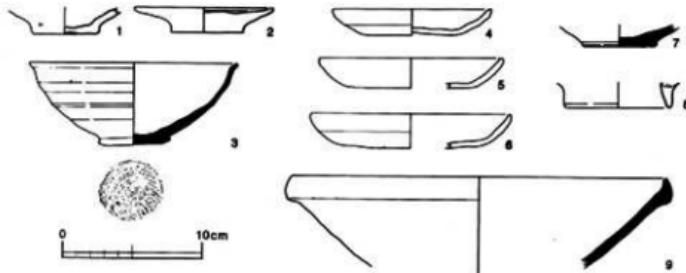
遺物は、須恵器・土師器が出土しており、図化した土器は柱穴底からのものではなく、埋土や遊離遺物も含まれている。(1)は土師器碗底部で糸切り底である。(2)(4)(5)(6)は土師器皿で、(3)(7)は須恵器碗である。(3)は図上で完形となるもので底部は完存している。底部内面に重ね焼きの痕跡が見られる。口径14.8cm、器高6.0cm、底部5.2cmを測る。色調は灰白色で、焼成は良好である。(9)は魚住産の鉢である。口径27.0cm、器高6.5cmを測る。



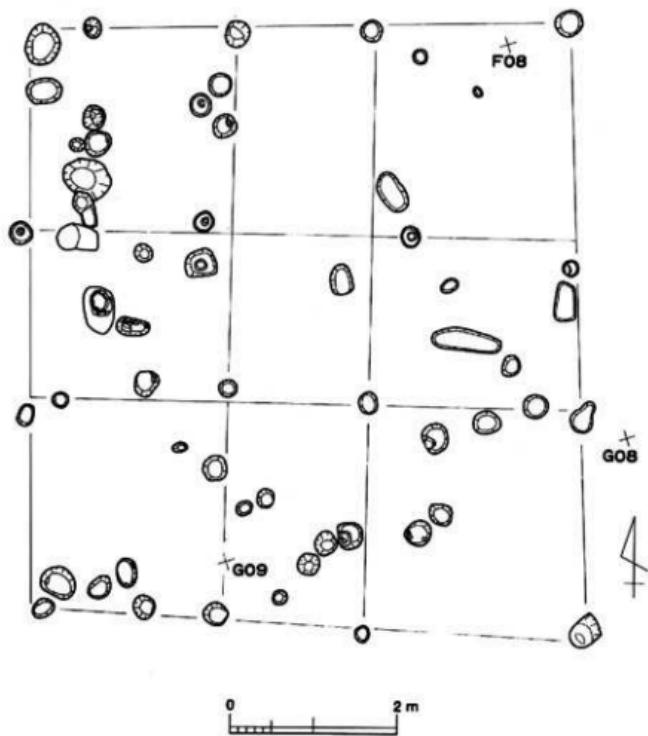
第24図 建物2土器実測図(1)



第25図 建物2土器実測図(2)



第26図 建物3土器実測図



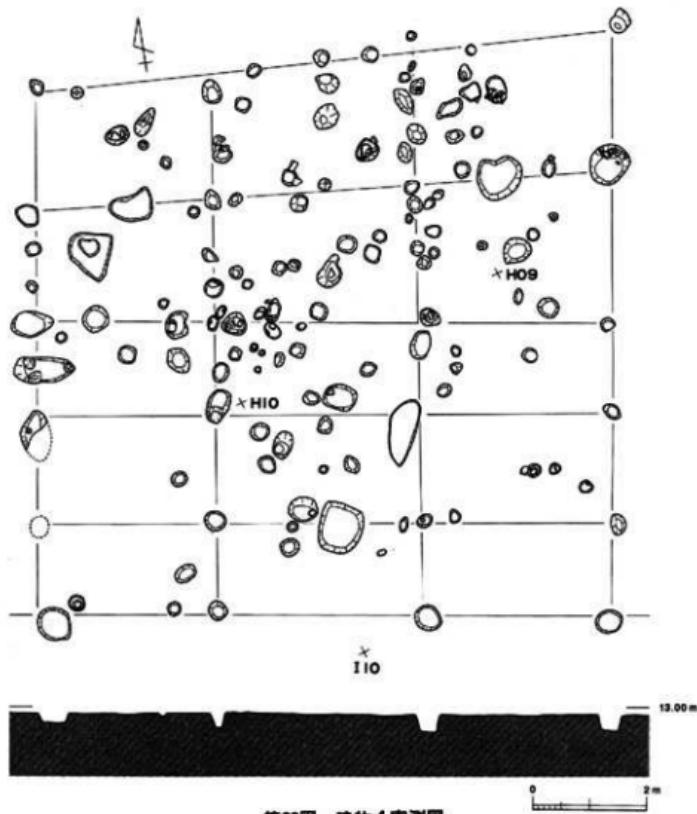
第27図 建物3実測図

#### 4. 建物4

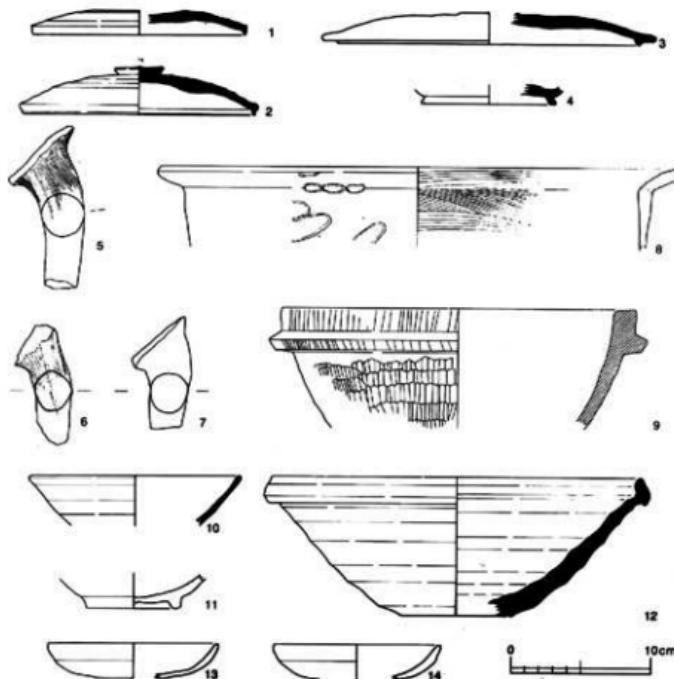
建物3の南に位置する建物跡で、遺構の密集部分に位置する。東西3間、南北5間の建物跡である。東西9.8m、南北9.6mを測る。東西の柱間は西から3m・3.4m・3.4mで、南北の柱間は北から2m・1.8m・1.8m・1.9m・1.8mである。南北方向の中央の間取りが広いのは建物2と共通している。

遺物は、須恵器・土師器・陶磁器が出土している。時期的に古い段階の遺物も比較的多く出土していることから、奈良時代の遺構も存在していた可能性が高い。(1)～(4)の須恵器と(I)の土師器が前代の遺物である。(1)(2)(3)は蓋であるが時期差がある。(3)は焼成の悪い口径21.4cmの大

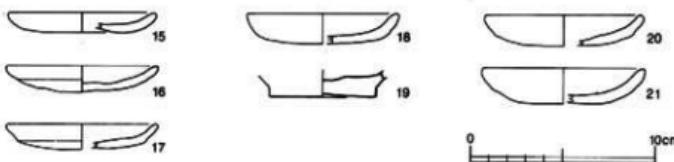
形品である。(5)～(8)は鍋で、(5)～(7)は脚の破片である。(8)は口径36.6cmで外面は全体に煤が付着している。(9)は石鍋で、宝林寺北遺跡出土の石鍋では大きな破片である。建物西側の径の大きいピットから出土している。外面は全体に煤が付いており、実用していたことを語っている。外面は整形痕を残しているが、内面は平滑に仕上げている。口径25.0cm、鉢径26.8cmを測る。鉢は断面台形で、やや下方を向いて削り出されている。(10)は須恵器椀の口縁部で、口径14.8cmを測り、口縁端部は玉縁状に肥厚している。焼成は良好ではない。(11)は魚住焼の鉢で、口径23.4cm、器高10.0cmを測る。口唇部を内外に肥厚させており、端部は黒灰色に焼き上げられている。底面は一部しか残っていないが、糸切底である。(13)～(21)は土師器で、(13)(14)は口径12cm前後の中



第28図 建物4実測図



第29図 建物4土器実測図(1)



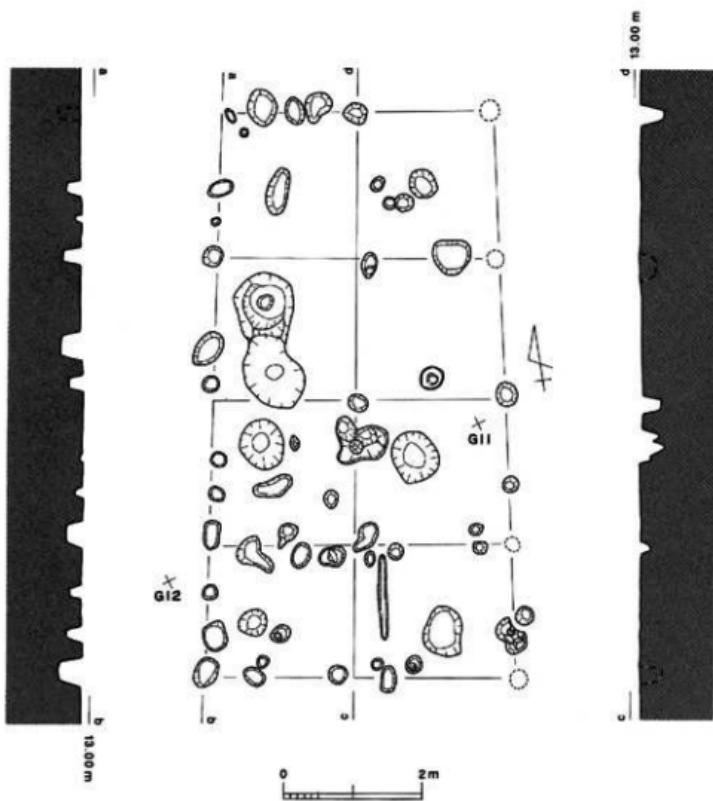
第30図 建物4土器実測図(2)

皿で、他は⑯を除いて小皿である。技法的には同じでユビ整形ののち、口縁部のみヨコナデを施している。⑯はいびつで円形とならず不定形になっており、ナデ仕上げと考えた方が妥当かもしれない。ナデを抜いた状況が看取される。全て径は8cm前後である。⑯は糸切り底の底部で楕と思われる。

## 5. 建物5

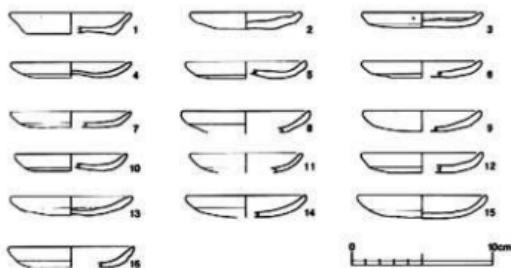
建物4の西側に並ぶ2間×4間の建物跡である。東西が2間で南北に長い建物跡である。ほぼ2mを1間とする建物跡で、東西4m、南北8mを測る。

遺物は、須恵器・土師器で、図化したものは29点である。須恵器は(17)18の2点で他は土師器である。(17)18は椀底部で18は時期の遅るものであろう。出土遺物の大半は柱穴底面には接して

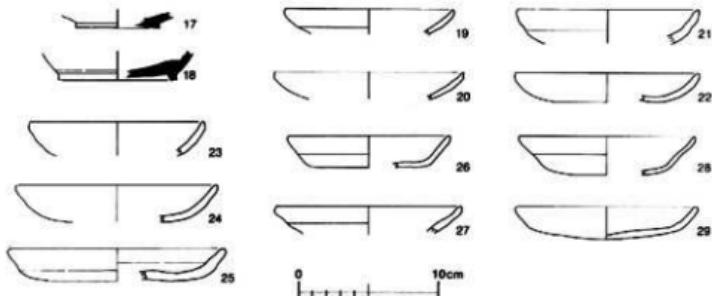


第31図 建物5実測図

いない。また、そのうちの多くは西側中央部の大形のピット3基から出土している。(1)29の土師器と(17)(18)の須恵器以外は図化したもののは全て3基のピット出土である。このことから3基のピットは建物跡に関係したピットと



第32図 建物5土器実測図(1)



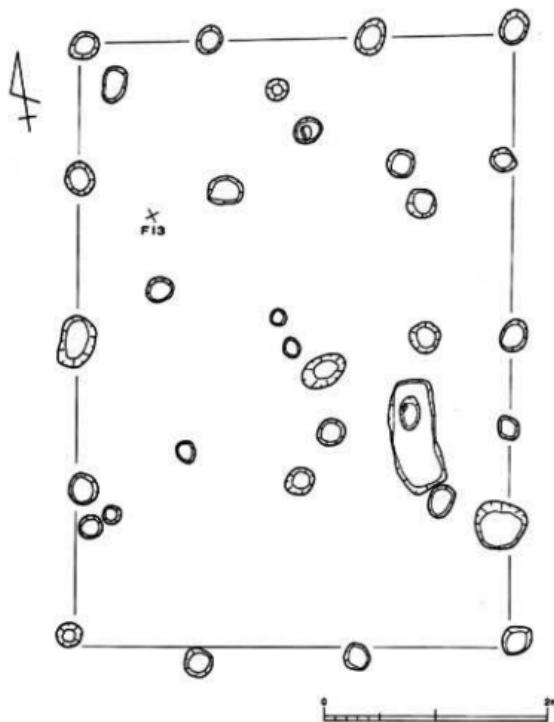
第33図 建物5土器実測図(2)

考えられ、建物8と土壤42と同様の関係が考えられないかと推定される。

(1)～(16)は小皿で、(1)だけ形態が異なっている。他は通有の技法であるユビ成形のち口縁部のみヨコナデで仕上げるもので、底部を有さない土器である。それに対して(1)は、糸切り底で、底部から口縁部へ外方へ開いている。表面磨滅しているが、口縁部はヨコナデ仕上げと思われる。(19)～(29)の土師器皿も技法的には小皿と同じつくりである。口径は11.4cm～13.0cmの中皿と15cm以上の大皿に分けられる。

## 6. 建物6

建物5の西側に位置する建物跡で、約4m離れている。主軸方向は、ほぼ同じであるが、埋土が異なっている。やや黄色っぽい埋土で、他の建物跡と異なっている。規模は、東西3間、南北4間で、測定値は東西4m、南北5.1mである。建物6の西側にはほとんど遺構が存在しておらず、礫が見えており、遺構面の西端部分の建物跡である。



第34図 建物6実測図

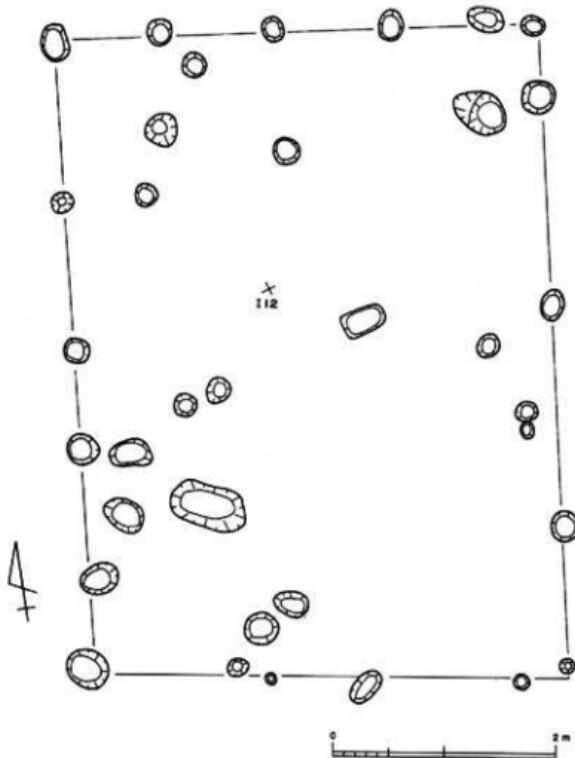
遺物は須恵器・土師器の小片のみで、図化可能な土器は出土していない。

#### 7. 建物7

H I 11・12に位置し、建物5の南側の遺構の広がる南端部に存在する。4間×4間の建物跡で、東西4m、南北5.6mを測る。総柱の建物跡ではなく、中央にはピットも16基認められるが、柱になるものかどうか不明である。主軸方向は他の遺構と同じである。

遺物は、須恵器・土師器の破片が出土しているが、図化出来るものは出土していない。

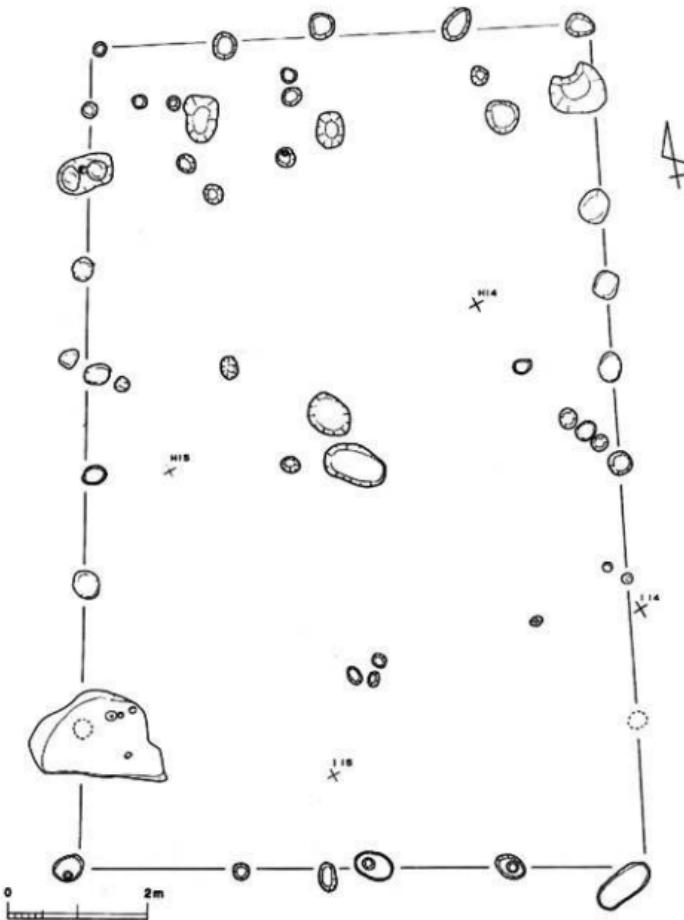
#### 8. 建物8



第35図 建物7実測図

中央地区の遺構の南西隅にある遺構で、建物8より南西には近世以降の遺構しか存在しない。削平を受けているため全ては判らないが、東西4間、南北7間の南北に長い建物跡である。建物跡の中央部分に明瞭にピットが認められず、純柱の建物とは思われない。東西7.5m、南北11.4mを測る。南側の柱列の北側に屋外炉があり、建物8を削平している。そのため南から2・3本目の柱は残っていない。

遺物は、須恵器・土師器が出土しているが図化した土器は土師器に限られる。(1)(2)は小皿で口径8.0cmで成形技法は通有の皿の技法と同じである。(3)は粗雑なつくりの鍋と思われる。一見すると古墳時代の円筒埴輪のようにも見えるが、中世の土器と考えている。口径39.0cmの大形で、残存高は9.5cmを測る。粘土紐をユビで成形した痕跡が明瞭である。口縁部のみヨコナデが

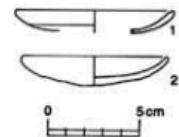


第36図 建物8実測図

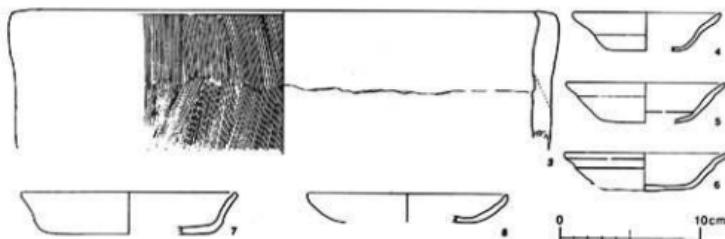
なされており、内面は指圧痕・粘土の離ぎ目が明らかである。外面はタテ方向のハケで整形されている。(4)～(6)は強いヨコナデをすることによって体部が屈曲し後線を持っている。ユビ成形のちヨコナデを口縁部のみ行っている。(6)はほぼ完存しており、胎土は良好で酸化粒を含んでいる。(7)は時期の異なる土器と思われ、古代の杯と思われる。口縁内面に浅い凹線が見られる。

建物8の北東隅の柱から0.8m離れたところに土壙42が位置している。土壙42は、土師器皿・椀を多数重ねて埋納しており、地鎮の性格を考えている。そうすれば建物8に伴うものと考えられる。

8棟の建物跡を検出したが、遺構の切り合いなどは余り明確とは言えない面もある。主軸方向は1・3の2棟が異なっており、建物1は東に大きく振っており、建物3は逆に西に僅かに振



第37図 建物8土器実測図(1)



第38図 建物8土器実測図(2)

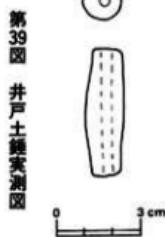
っている。建物1だけ、大きく主軸方向が異なることから時期差とも考えられる。また、埋土から見ると、建物6だけ異なっている。これは中央地区の遺構全体の埋土の異なりと同じくするもので、面としては同一であるが埋土の差があり、建物6がやや新しくなるものと思われる。

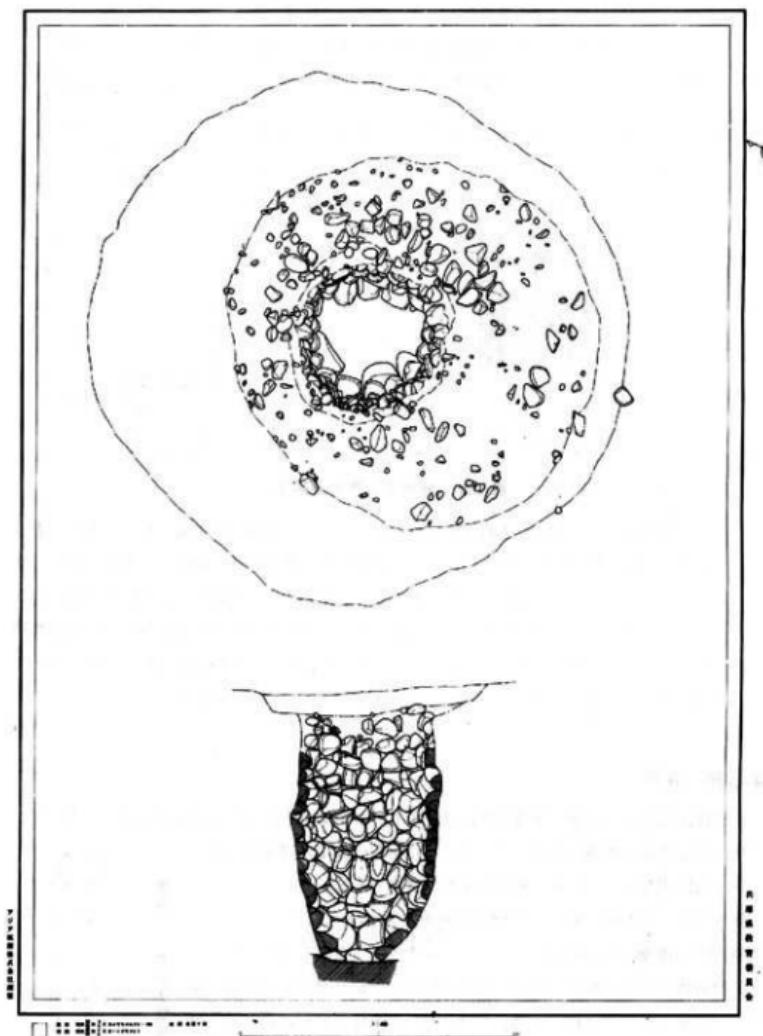
しかし、出土遺物からは明白な時期差は認められず、遺物の時期差が看取される。前代の遺物も含んでおり、掘立柱建物跡という性格上、出土土器の大半は時期決定資料となる柱穴底面出土という状況（位置）から出土していないことにもよるものと思われる。

### 第3節 井戸

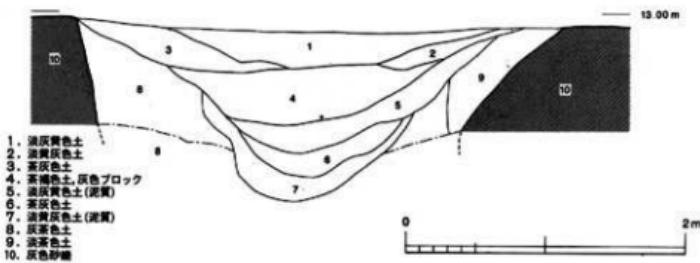
中央地区南東部の遺構の稀薄地帯に位置する。西側に溝3が東側に溝2が存在するだけで、建物跡などは北～西側に広がっている。北に集石土壙1が存在するが、井戸が南短辺を切っており、井戸が後出の遺構である。

掘り方は、上面径3.8mのやや不定の円形を擂鉢状に掘り込んでいる。遺構面から砾層・砂層を抜いている。東地区の2基の井戸と同様に円形河原石組の井戸である。ただ、断面の形態と井筒が異なっている。東地区の2基は井側が擂鉢状を呈しているが、中央地区井戸は比較的垂直に近く積まれており、深さの約3分の1のところに変換線を持ち、擂鉢状に屈曲している。石積みは原則的に時計回りに構築しているが、河原





第40図 井戸実測図



第41図 井戸上部土層断面図

石を使っているため、適合する個所に石材を置いていく方法を探用していると思われる。そのため、部分的に逆に積まれている部分も見られる。井側は1.8mを測るが、上部を崩しているので、それ以上の数値であることは明白である。石材は、地山である礫層中の人頭大の円礫を使っている。幾つかの石は剖面が見られるが、大半は河原石のまま使っている。井側残存部上面で直径1mを、下面で0.3mを測る。

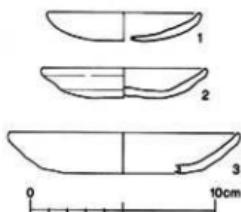
井筒部も、石組みのものである。最大長0.45mの大形の石材を6石使ってやや弧状を描く隅円方形のプランを呈している。方形の隅の個所から徐々に井側を築き円形にしている。井筒は1辺0.4×0.8mの長方形で、深さは0.5mと浅いものである。

出土遺物は少なく、須恵器・土師器・瓦器の小片と土鍬が1点出土している。土鍬は長さ4.5cmの普通タイプのものである。

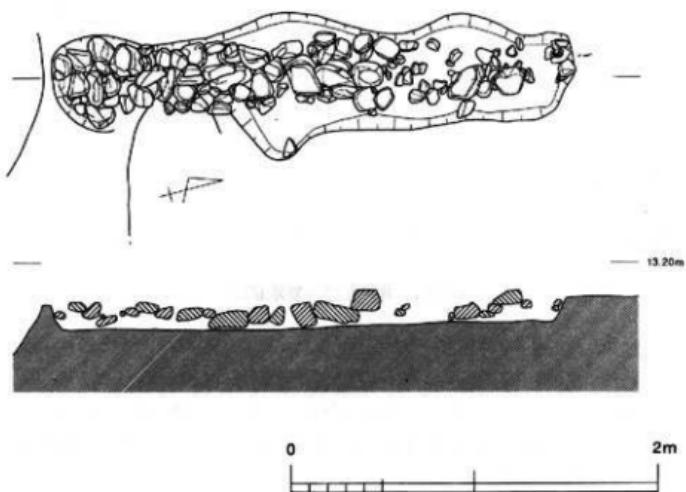
#### 第4節 集石土壙

##### 1. 集石土壙1

中央調査地区の東土壙群の南端近くにあり、井戸に接してN15°E方向へ延びており、土壙29に統くかのような形状をしている。土壙の大きさは全長284cm、幅50~60cmの溝状で最も深い所で28cm、石は5~20cm余りの河原石がかなり重複して見られる。石は南側に20cm余りの大きな石が使用され、北に5cm前後の小さな石が多く見られる。土壙の性格は他の集石土壙と同様、墓壙である可能性が最も強いが、井戸と接している点から、吸水の排水溝の可能性もある。遺物は集石に混って出土したもので、土師器の皿が3点出土したがすべて破片である。(1)は磨滅のため調整



第42図 集石土壙1 土器実測図

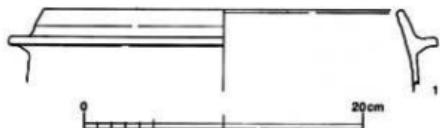


第43図 集石土壙1実測図

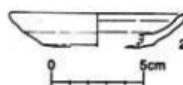
不明であるが、指頭による底部調整と回転ナデによる口縁調整と考えられる個体である。(2)は全体のまが残存しており、底と内面がナデ、口縁外表面が回転ナデによって調整されている。(3)は皿よりも杯としてもよい個体であるが、内外面共に摩滅のため調整不明である。

## 2. 集石土壙2

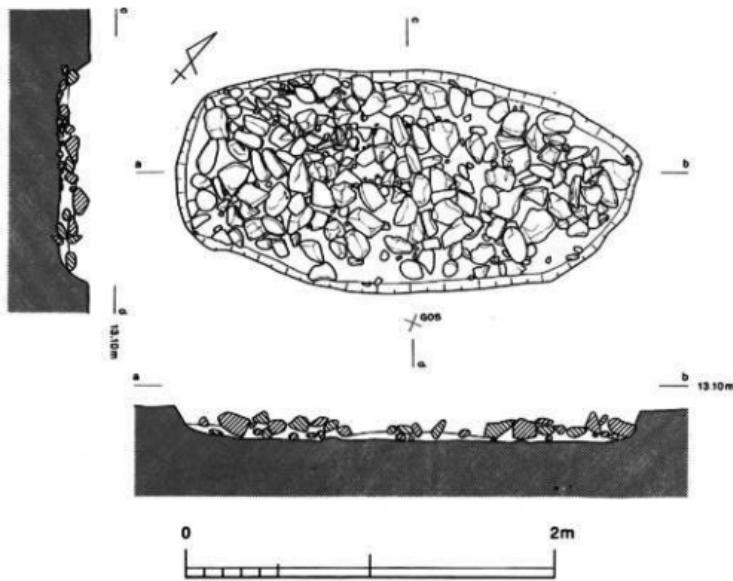
中央調査地区の北東部に位置する楕円形の土壙で、長径が250cm、短径が120cm、底はほぼ平坦で最も深い中央地区でも17cmしかなく、砂質土層を掘り込み砂礫土層上面で止めている。土壙主軸の方位はN61°E、石は土壙全面に見られ、一部は重複しているものの、ほぼ均等に出土しており、土壙底面に密着した状態を示すものが多く、土壙上部は削られているが、石は削平によ



第44図 集石土壙2土器実測図(1)



第45図 集石土壙2土器実測図(2)



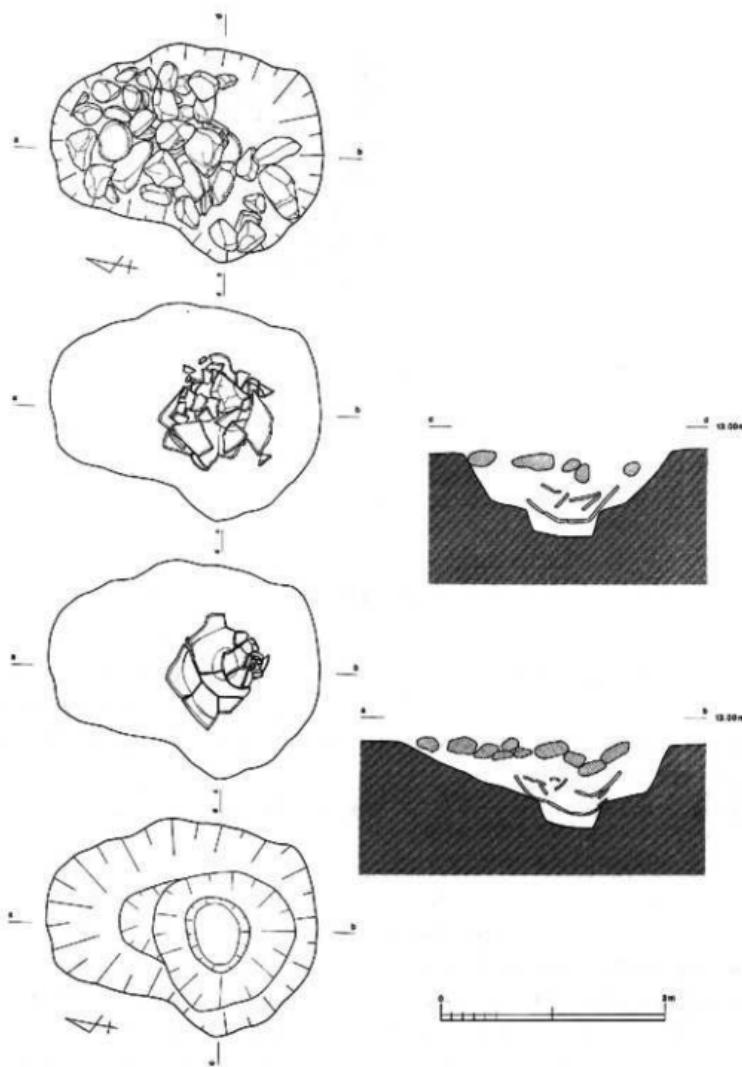
第46図 集石土壙2実測図

ってさほど失われていないと思われる。石は10~20cm前後の河原石が多く、周辺で直ぐ手に入るものがばかりである。遺物は完形品ではなく、集石と共に出土した混入品と見られるもので、図化できたものは、羽釜と土師器小皿が各1点(第44・45図)で、羽釜は径25.8cm、やや内傾する口縁と幅の狭い羽根を持ち底は失われている。小皿は径9.4cm、器高1.8cm、底部は糸切り、体部は回転ナデ調整されている。

本土壙の性格は遺物からは推察できないが、形態からは中世に多く見られる集石土壙墓と近似している。

### 3. 集石土壙3

中央調査地区の中心にあり、周囲には落込み2・6を始め多数の土壙が集中して見られる。土壙の大きさは径240cm×190cmの横円形を呈しており、N79°Wをきしている。土壙覆土の上部は20cm~50cmの河原石の集石によって覆われている。集石は面的に広がっており、一重で場所によっては二重に重なっている程度である。集石の下には須恵器の大型甕が置かれたように検出されている。甕は底部を土壙の底に接するように置いているが、土器の下にはさらに土壙が掘られており二重の土壙になっている。土壙は土器によって蓋をしたような状態で、内側の土壙



第47図 集石土壤3実測図



第48図 集石土壙3土器実測図

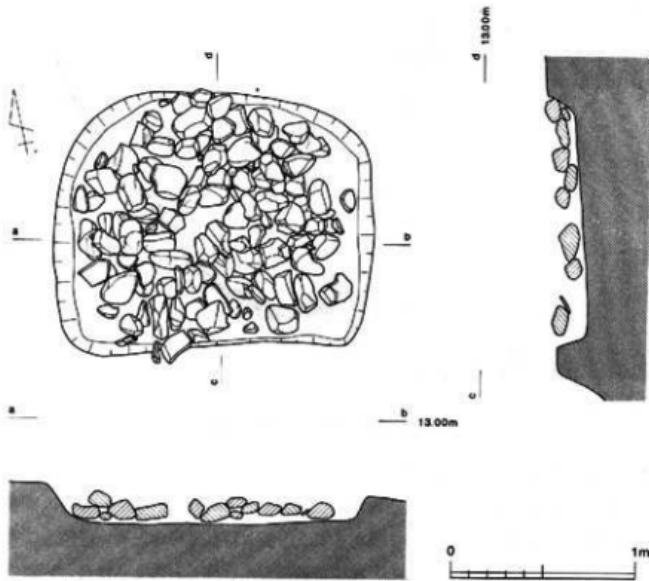
は径68cm×55cmのほぼ円形で、深さは20cm余りである。

本土壙の性格は明確ではないが、集石を伴う土壙墓と考えられる。しかし大型の妻を復元した所、口縁と底部のみで胴部でわずかに繋がらず、一部欠落しているため、妻棺とは考えにくく上部の集石に大きな乱れもない所から、妻棺が破損した状態とも考えられない。妻の破片によって遺体を覆う櫛としたものか、または二重土壙の内側の土壙が遺骨の埋納場所で、妻の破

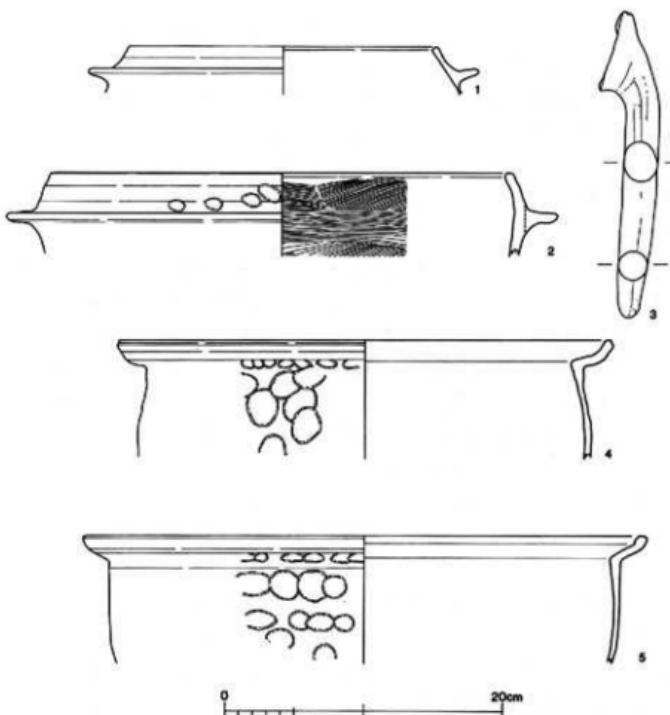
片によって蓋をした可能性もある。しかし、どちらの方法であっても、遺体は火葬等によって、骨のみになったものを再葬したものとしなければならず、集石土壙と組み合わせた、極めてめずらしい例である。出土遺物は前述の須恵器の大甕のみで、胴部の中央部が欠落しているため、図上復元を行った。口径は46.2cm、底径は16cmの平底、器高97cm余り、胴部の最大径は胴部の肩直下にあり85.5cmある。器厚は全体の大きさに比してやや薄く1cm前後である。口縁は丸く外反しており、端部も薄く、端部外面に凹線を持つ、内面の調整はタタキによって行われており、タタキの単位は幅が6cm以上あり16本以上の条が掘り込まれているようである。1条の幅は2.5mmである。時代は中世の範囲としか、とらえることができず、本遺跡の中心である12世紀代の遺物と考えられる。

#### 4. 集石土壙4

中央調査地区の南西隅近くにあり、南を近世の大溝によって切られている。残存している部分は隅円の方形で残存部分は140cm、幅175cm底はやや鍋底状を呈するが、若干凹凸を持ち最も深い所でも20cmしかなく上部を削平されているのであろう。主軸の方方位はN78°E、土壙内の石



第49図 集石土壙4実測図



第50図 集石土塚4土器実測図

は10~25cmの河原石が中心で土壙の全面に広がって出土しており、一部重複が見られ、石は相互に関連や規則性を持っておらず雑然と投げ込まれた状態である。遺物は羽釜、土鍋、土鍋の三足が河原石に混って出土しており、完形品ではなく出土状態から見ると、石に混入して投棄されたと考えられる。羽釜は2点出土しており、(1)は口径22.2cmと小ぶりで強く内傾する口縁とやや上方へそった鶴を持ち口縁はヨコナデ調整である。(2)は径33.4cmと大きく、やや内傾する口縁と水平に横に伸びる鶴を持ち、内面に刷毛目を施し、外面はヨコナデによる調整である。鍋も2点出土しており、(4)は径35.2cmあり弯曲しながら上方へ立ち上がる口縁とやや張った胴部を持ち、胴部と頸部外面には指頭痕を多く残した無調整で、口縁はヨコナデ調整。(5)は径39.5cmで口縁はわずかに弯曲しながら立ち上がり、やや内面へ肥厚した口縁を持つ。胴部の最大径は頸部にあり、胴部と頸部外面に指頭圧痕を持ち無調整である。口縁はヨコナデ調整。(3)

の三足器は1本しか出土していないが全長22cm、最も太い所で2.8cm、ナデによる調整、鍋胴部との接合部分において剝離破損しており、(4)・(5)の鍋に伴うものであろう。

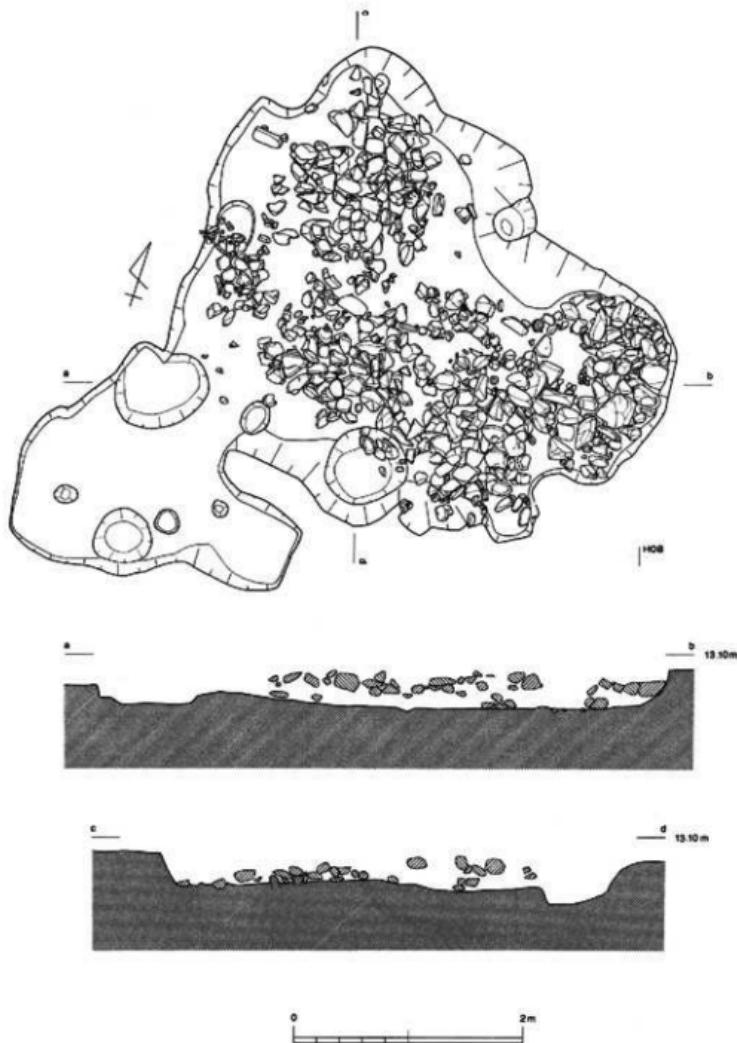
本土壙の性格は遺物から知ることは出来ず、また形態も南を欠いている状態で明確ではないが、隅円方形と考えられる。整った形から見て集石土壙墓の可能性も考えられる。

## 第5節 落込み

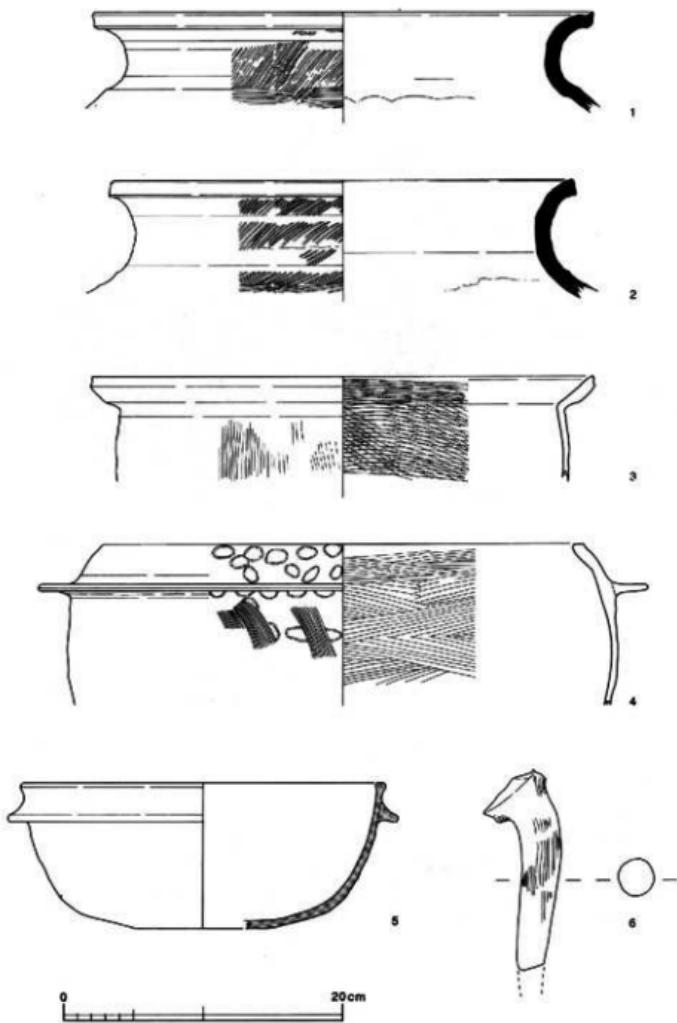
### 1. 落込み1

中央地区の遺構が最も集中した地域にあり、多くの小土壙と重複しているために、本来の形態が明確ではないが、北半分の集石を多量に包含した土壙、445cm×342cmの土壙に264cm×135cmの土壙が接合したような形をしており、2つの土壙として扱うべきものであるかもしれないが、埋土からは区別することは出来なかつた。土壙の底は場所によって凹凸があり一定ではないが最も深い所で56cmあった。石は北側で密に出土しており、南では僅かに見られる程度である。出土した石はすべて近在で採取できる河原石で、一部焼成を受けているものも混じっていた。石の配列には特に規則性は認められず、土壙の底から上面に至るまで雑然と投げ込まれた状態である。遺物はこれら石と混在して出土しており、個体数も特に多く、種類も土師器・須恵器の他、陶器・青磁・白磁などの土器以外にも鉄釘・温石など多種多様な遺物が出土している。しかも遺物は破損品ばかりではなく、完形品も僅かながら見られる。このような形態、遺物の出土状態から見て、本土壙は不用物の投棄のための土壙と考えられる。

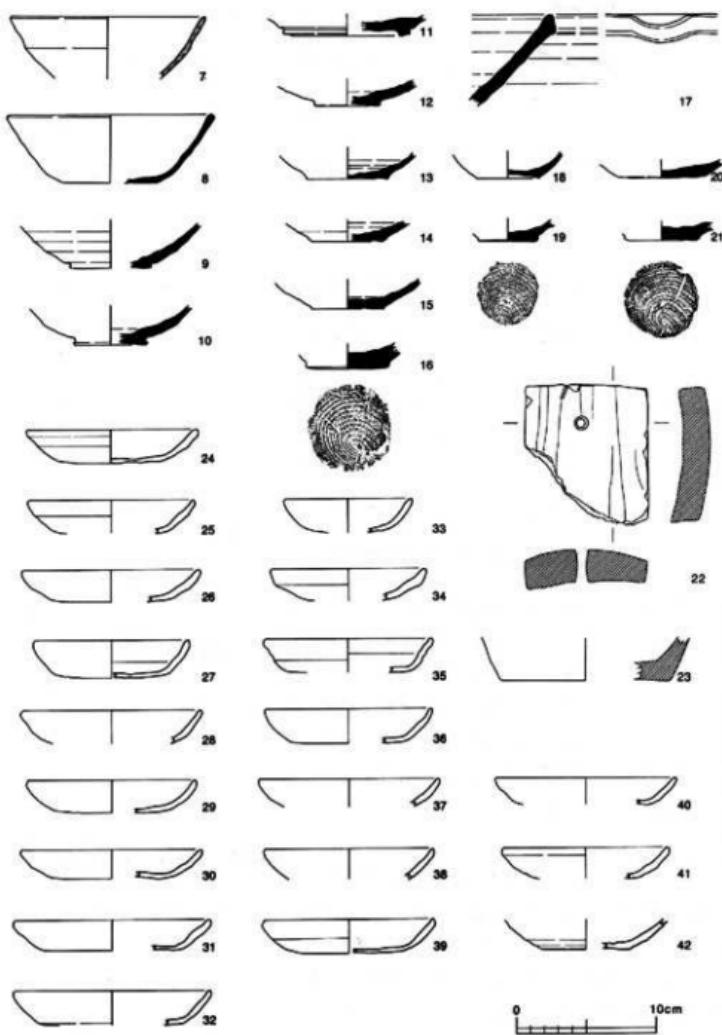
遺物は団化できたものだけでもかなりの数になり、須恵器の壺は2点出土しており、共に東播磨系の製品と考えられる。(1)の口径は35.6cmでよく外反した口縁の端部を上へつまみ上げており、(2)の口径は33cm。(1)・(2)共に頸部に粘土接合痕を持つ、内面、口縁端部は共にヨコナデ調整、外面は平行叩き目を施している。土鍋は1点団化できたが、口径35.8cm肥厚する口縁と内外面に荒い刷毛による調整が見られる。羽釜は2点あり、(4)は口径34.4cm、体部から口縁へと球状に内傾しており、内面に荒い刷毛調整、外面に指頭と刷毛調整が見られる。(5)は口径25.1cmと小型でやや外反する口縁と平底を持つが、表面磨滅のため調整が明らかでない。(6)は土鍋の三足と思われる径2.5cm刷毛調整が見られる。(7)は瓦器碗と思われるが、磨滅のため調整が明らかでない。(8)～(21)は須恵器碗であるが、口縁を団化できたものは2点のみで他はすべて底である。底は(11)が輪高台を持ちナデ調整であるのを除けばすべて回転糸切り底である。しかし体部と底部の境いが丸いものと、高台を残しているものとの間に大きな形態の差があり、同一時期の器形の差ではなく、時期差によると考えられ、平安時代末から鎌倉時代中葉の各時期と考えられる。(17)は捏鉢の口縁で魚住窓のものと推定される。(24)～(41)は土師器杯である。完形品は(4)のみで他は破片で、表面の磨滅したものが多いため、口径は(33)の9.0cmを除けば10.9cm～13.9cm、器高は1.9cm～3.2cm、体部はヨコナデ調整、底は指頭による調整である。(42)は土師



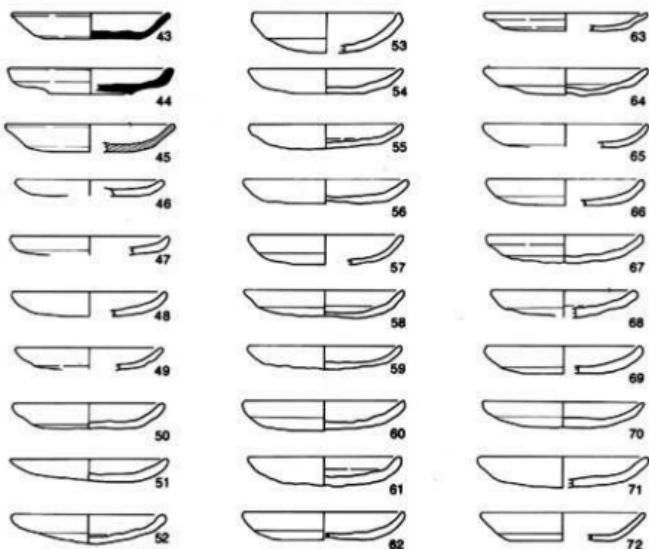
第51図 落込み1実測図



第52図 落込み1 土器実測図(1)



第53図 落込み1 土器実測図(2)



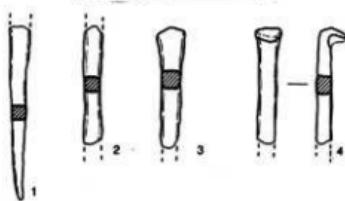
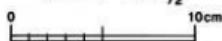
第54図 落込み1土器実測図(3)

第55図 落込み1土器実測図

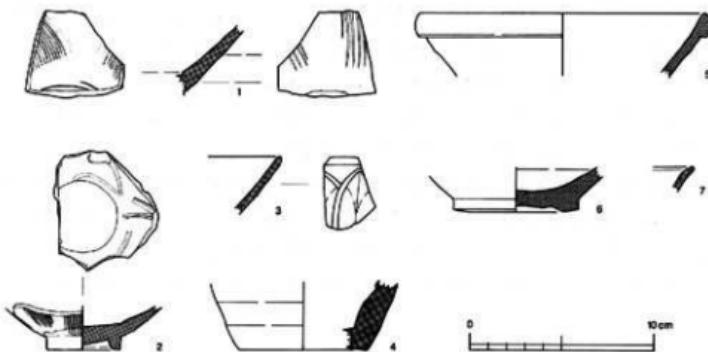


器の柄で糸切り底を持つ。須恵器と同一手法で製作されており、焼成の悪い須恵器の可能性がある。第53図22は滑石製の温石で、石鍋からの再生品であろう。幅は8.8cm、長さは残存の10.1cm、厚み1.8cm～2.3cmで中央がやや厚い。穴は表で1cm、中心部で0.65cm、類似品は福田天神遺跡、太子町前山表探品等に見られる。23は石鍋の底部と考えられるもので、底径11.9cm、材質は滑石製、本遺跡の周辺遺跡においてもかなり出土例がある。

第54図は皿で形態にも若干の差があり、底部成形も糸切りと指頭によるものがあり、糸切りは43・44の須恵器2点で、土師器は指頭によるものである。45は瓦質でおそらく瓦器と考えられるが内面底部が磨滅しているため明確にできない。これら皿の口径は7.75cm～10cm、器高0.85cm～2.15cmであるが平均的なものは口径8cm、器高1.3～1.6cmのものが大部分である。当地方



第56図 落込み1鉄器実測図



第57図 落込み1陶磁器実測図

では底部成形の技法が、糸切り・ヘラ起こし・指頭が混在して同一時期に見られるが、本遺跡ではヘラ起こしによる底部切り離しは見られない。

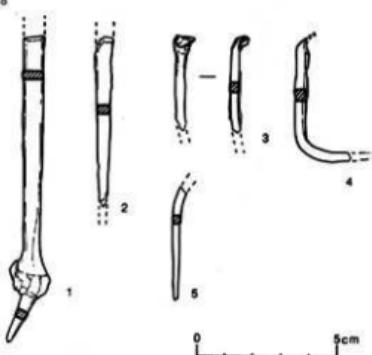
第56図は鉄製釘でほぼ正方形の断面を持ち、(1)が先端、(4)が頭で、(2)・(3)は両端を欠落したものである。第55図は土錘で長さ6cm、径1.7cm、孔径0.5cmである。

第57図は中国製磁器であるが、全て小片である。

以上の遺物から遺構の年代を考えると平安時代の遺物も少量混じっているが、大部分は鎌倉時代前半と考えられる遺物であり、種類も多く、大部分が破損品であるなど不用物の廃棄された状態をよく示しており、また本遺跡周辺の遺跡と類似した遺物も多く、関連を考える上で興味ある遺構である。

## 2. 落込み2

中央調査地区の遺構が最も密集している地区にあるため多くの土壠と切り合っており、本来の姿を残していないが、当初は長方形の土壠で

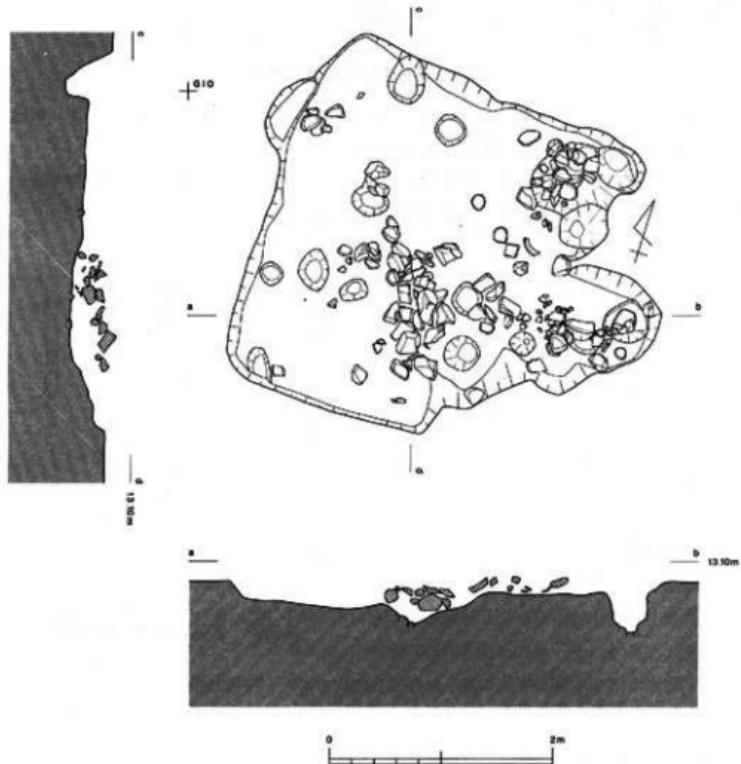


第58図 落込み2鐵器実測図

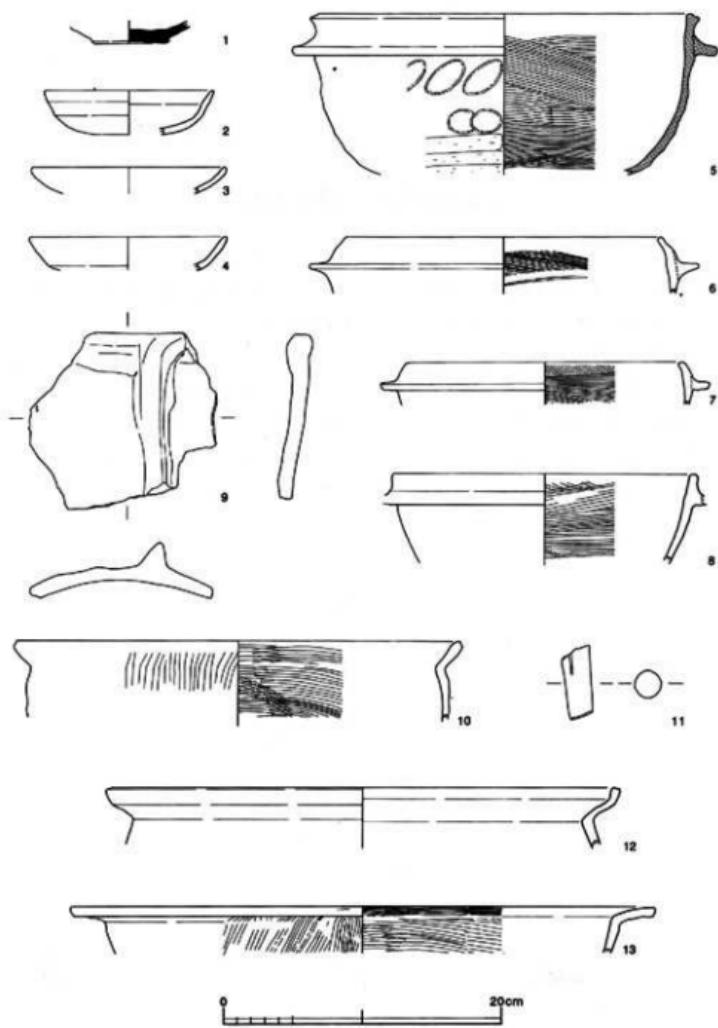
あった可能性もある。特に東辺を除く3片は直線的であり、長辺220cm、短辺210cmの長方形をした竪穴式住居跡状の遺構である。底は20~25cmであるが、集石等が見られる部分はさらに深くなってしまっており、遺構の重複と見られ、落込み4、落込み6と近似した遺構であったと考えられる。落込みの東辺は不定形になっており土壠が切り合っているが、覆土に含まれる集石が連續

的に全体に広がっているため、遺構が廃棄されたのは、方形遺構と多くの土壙が同一時期と思われる。覆土から出土した集石は20~30cmの河原石が多いが、割れた石、火を受けた石も含まれている。また石に混じって各種の遺物も出土しているが、完形品ではなく、すべて破損している。図化できたものは27点で、内訳は鉄製品5、須恵器柄1、残りは土師器の皿・鍋・釜等で、他に図化できなかったが中国製の青磁・白磁片が出土している。

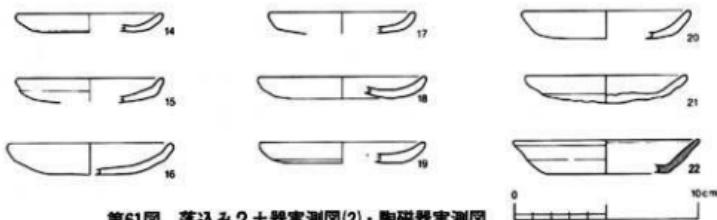
須恵器の柄は(1)、底部のみで底径5.6cm、糸切り底である。土師器の杯は(2)~(4)、口径12cm~14cmで器高は(2)で3.15cm、ほぼ直線的に外反する口縁を持ち、ヨコナデ調整を施す。羽釜は4点(5)~(8)が図化できたが、口径は19.6cm~26.7cm、(6)・(7)は内傾する口縁と張り付けた鋤を持ち、(5)・(8)はやや外反する口縁を持つ。しかし(6)~(8)は小破片で形態が十分に残されていない。



第59図 落込み2実測図

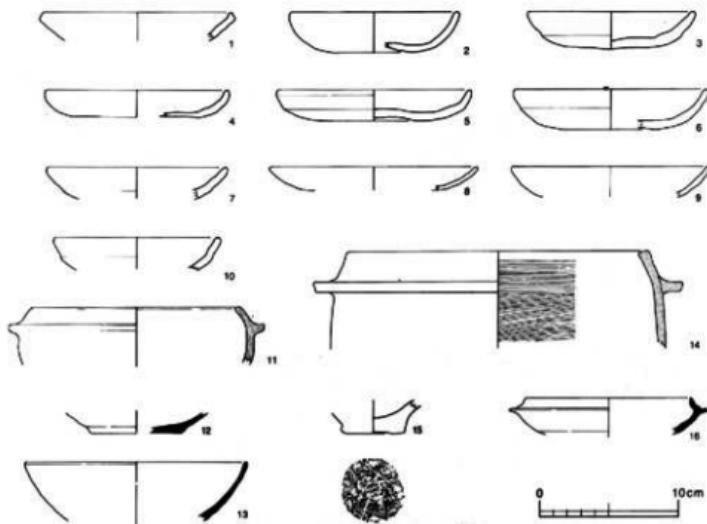


第60図・落込み2土器実測図(1)

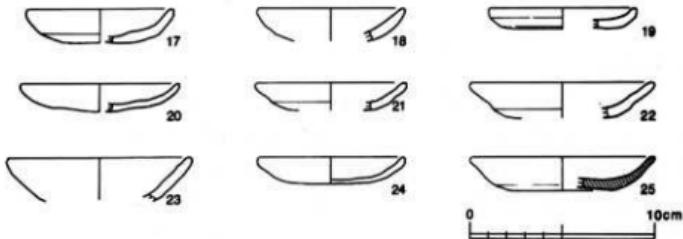


第61図 落込み2土器実測図(2)・陶磁器実測図

いが、(5)は土余り残存しており、内面に横方向の刷毛目、外面に指頭による押えと横方向の範削りが見られる。(9)は全体器形が不明確であるが、肥厚した端部と縦に走る突帯、内寄する器形から見て土師質の甕の可能性がある。土鍋は3点(10・12・13)図化できたが、口径は31.8cm～41.6cmで、(10)は内外面共に刷毛目、(12)は外反する口縁が上方へ立ち上る端部を持ち、(13)は垂平に外反する口縁に、内外面共刷毛目調整である。土師器の小皿は8点出土したが【(14～21)】、口径は7.8cm～9cm、器高は1cm～2.2cmで調整は口縁及び内面がヨコナデ、底部は指頭による調整である。鉄製品(第58図)は5点出土しているが、(4)を除いてすべて角の鉄釘である。完形品はなく(1)・(5)が先端、(3)が頭である。(4)は釘の曲ったものか他の製品であるかは明らかでない。



第62図 落込み3土器実測図(1)



第63図 落込み3土器実測図(2)

### 3. 落込み3

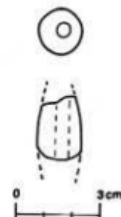
中央調査地区の北に位置しており、周囲には多くの土壙が見られる。土壙はバチ形をしており全長270cm、柄の部分で幅150cm、最も広がっている部分で160cmある。底は凹凸があり、最も深い所で32cmある。本土壙の用途を示す特徴は見られず、また遺物から見た場合も出土遺物はすべて破片で完形品ではなく、投棄された状態で出土している。

土師器の杯は9個出土している〔第62図-②～⑩〕が、口径は11.7cm～14.8cm、器高は1.65cm～28.5cmである。調整は口縁をヨコナデ、底を指頭による押えのみで、底部中央が窪んでいる個体も②・⑤・⑥のように見られる。(1)は一見杯の口縁のように見えるが、口縁端部が内方向へ摘まみ上げられており、器形としては、甕の口縁とも考えられるが、前時代の混入品であろう。羽釜は2点出土しているが、(11)は口径14.9cmと小型で内傾する口縁と球状の体部を持ち、鈎は短い。(14)は口径21.5cmで若干内傾するものの、ほぼ垂直に立ち上がる口縁を持ち、内面を刷毛による調整、外面をヨコナデによる調整を施している。(12・13)は須恵器の椀で(12)は糸切り底に高台部を若干残している。(13)は口縁部のみであるが、(12)の底部に似た底を持つと思われる。口径は15.7cmで、調整は表面剥離のため不明である。(15)は甕の底部と思われ、底径4.8cmを測り底に木葉痕が残されている。これも(1)と同様に古墳時代の混入品であろう。(16)は須恵器の有蓋杯の身で立ち上りがかなり内傾しており、古墳時代後半の混入遺物である。〔第63図-⑯～⑭〕は土師器の小皿で口径が7.7cm～9.8cm、器高が1.1cm～2.3cmのものである。本遺跡内より出土した他の小皿に比べると器高が高いものが多く検討を要す。また⑯・⑰のように杯と小皿の中間的な大きさのものも含まれている。調整は底を指頭で、体部をヨコナデによって仕上げており、⑯・⑰のように体部中央にゆるやかな段を持つものもある。

第64図  
落込み3土器実測図



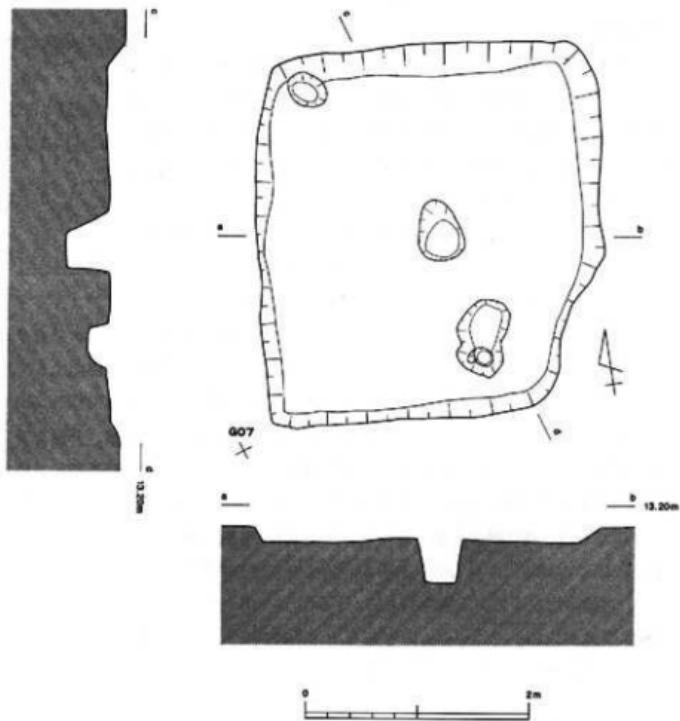
第65図 落込み4土錠実測図



本遺構の属する時代は12世紀後半～13世紀と考えられるが、古墳時代の遺物も多く含まれており、遺物年代に幅を持たして考えざるを得ない。

#### 4. 落込み4

中央調査地区の北東部に位置する。南北335cm、東西320cmのほぼ方形をした竪穴式住居跡状の遺構である。深さは10cm～18cmの平坦な床面を持っており、方向はN 4°W。東辺が若干凹凸を持つ以外は、ほぼ直線的で、外見状は竪穴式住居跡と変る所はまったくない。しかし、遺構内と周辺で検出された土錠はすべて、本遺構に伴うものではなく柱穴に相当するものは見られず、また壁内周溝も見られない。覆土は淡灰色土で、周辺の遺構や切り合って



第66図 落込み4実測図

いる土壤ときわめて似ており、同時期とも考えられるが、遺物は伴っておらず、わずかに土鍤の破片が出土しているのみである。



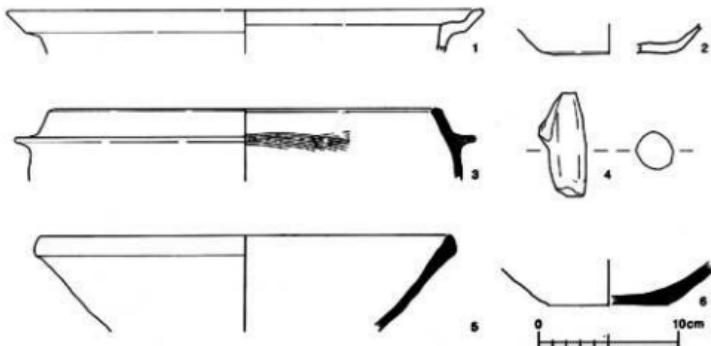
### 5. 落込み5

落込み4と集石土壤1に囲まれた位置にある。径170cm×190cmの隅円の土壤である。深さは21cmで底は平坦になっている。覆土は淡灰色土層で、周辺の造構と同時期と思われる。

遺物は数点出土したが、図化できたのは8点である。第68図-(1)は土鍋の口縁で、(4)の三足を持つ形と思われる。(2)は土師器杯の底部であるが磨滅している。(3)は羽釜で内面に刷毛による調整が見られる。(5)は須恵器の捏鉢で端部が若干肥厚し、胎土の小石を混えているなど、東播磨系の



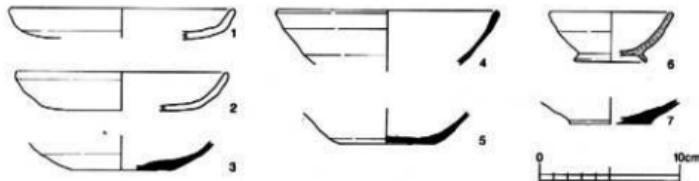
第67図  
落込み5陶器実測図



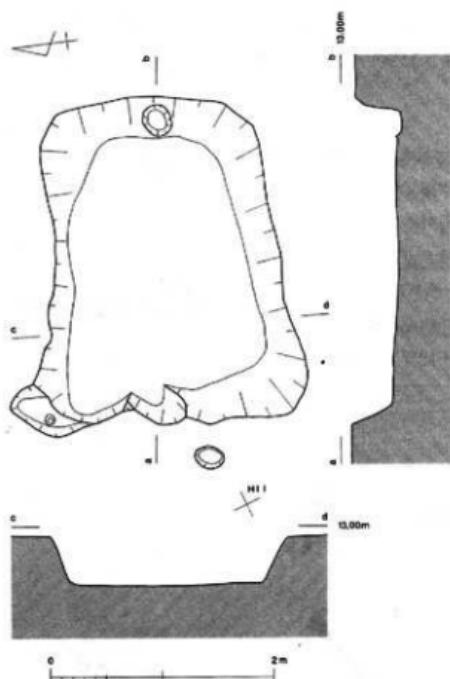
第68図 落込み5土器実測図

製品と思われる。(6)は須恵器の捏鉢の底部で、(5)と同様に東播磨系と考えられる。第67図は中國製の青磁碗の口縁部で鎧蓮弁文を持つ。

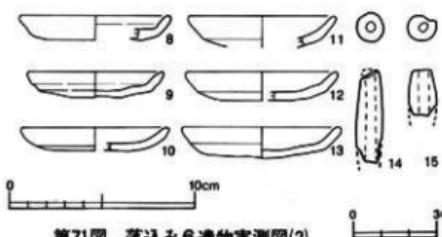
土壤の性格は不明であるが、時期は遺物から見て鎌倉時代前半と考えられる。



第69図 落込み6土器実測図(1)



第70図 落込み6実測図



第71図 落込み6 遺物実測図(2)

大径1.1cm、孔径0.5cmである。

造構の性格は不明であるが、年代は鎌倉時代初頭と考えられる。

## 6. 落込み6

中央調査地区の中心あたりに位置しており、土壌35を始め数個の遺構と切り合っている。径は南北250cm、東西282cmのやや隅丸の長方形を呈し、長軸の方位はN84°Wである。底は40cmあり、ほぼ平坦で、覆土は淡色土で遺物をかなり伴っている。

図化することのできた遺物は、土師器、須恵器共に、皿・杯などの小型品ばかりである。土師器杯〔(1)・(2)〕は、口径15.8cmと14.8cm、深さ2.2cmと2.8cmと似た大きさで、調整も口縁をヨコナデ、底を指頭による押さえと同じである。須恵器の杯は〔第69図-(3)～(4)・(7)〕底部の(3)・(5)共に糸切りで高台部をまったく残しておらず、(7)は糸切りであるが高台部を若干残している。口縁部の(4)は内外面共にヨコナデ調整である。(6)は瓦質の椀であるが表面が磨滅している。口径8.5cmで外へ張った高台を持つ、出土例のあまりない品である。土師器の小皿は6点〔第71図(8)～(13)〕図化できたが、すべて破損している。口径は8.4cm～7.2cmで器高も1.25cm～1.7cmと揃っており、調整も口縁部がヨコナデ、底部は指頭による抑えである。土鍾は2点〔第71図-14・(15)〕出土したが、共に破損しており、(14)は最大径1.1cm、穴径0.4cm、(15)は最

## 7. 落込み7

中央調査地区の北端にあり、隅円の方形を呈しており、東西径190cm、西北径145cm、深さ23cm、底はほぼ平坦であるが、疊層を掘り込んでいるため凹凸が見られる。主軸の方位はN4°Eである。覆土は淡灰色土で、遺物は出土しなかった。

遺構の性格は不明であるが、遺物のない点から他の遺物を排棄した土壤とは別に土壤基の可能性もある。

## 8. 落ち込み8

中央調査地区の南西隅にあり、疊層を掘り込んだ不定形な土壤である。南北の径が730cm、東西径が385cmあり底は凹凸が激しく、深い所で39cmある。遺構内には、土壤が2個あるが切り合い関係にあるものであろう。

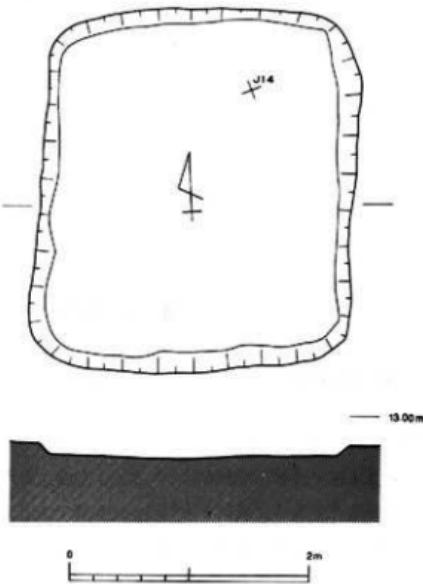
遺物も出土しなかったため、遺構の性格もわからないが、凹地を整地のために埋めただけの遺構とも考えられる。

## 9. 落込み9

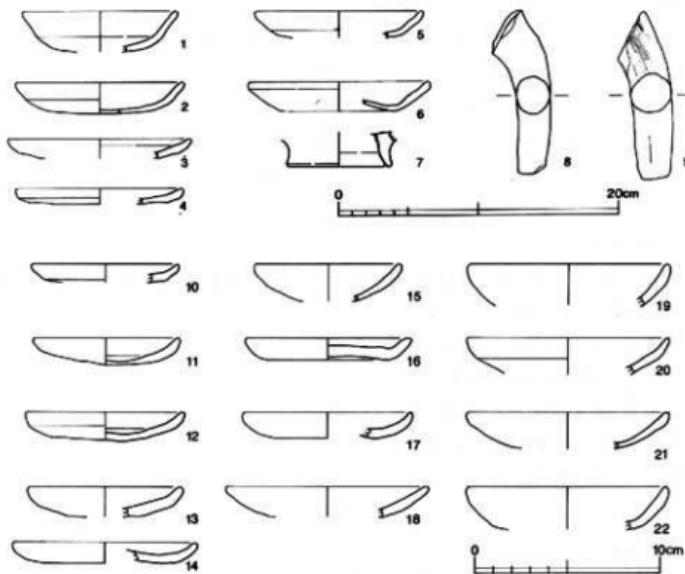
中央調査地区の南西にあり、北に土壤36が近接している。外形は竪穴式住居跡と同一の形態をしており、東西265cm、南北305cmの隅円方形で、主軸の方位はN2°W、底は深さ15cmあり、平坦である。底には柱穴、壁内周溝などは見られず、遺構の周辺にも柱穴と推定されるものは見られない。覆土は淡灰色土で、石がわずかに含まれており、遺物も1点出土しているのみである。

出土した遺物は〔第73図-7〕盤の高台部分と思われるもので底径7.2cm、高台の高さ1.9cmの品であるが年代は特定できない。

本遺構のような竪穴式住居跡状の遺構は、落込み2・4においても見られるか、どの遺構も性格を示す出土遺物はなく、今後、調査例が増加するに伴い判明するであろうが、龍野市内では、神岡町上横内遺跡において掘立柱建物の倉庫群に付属するように2基確認しており、倉庫的機能を持つ遺構とも考えられ、本遺跡も共通のものとして考えられるのではないだろうか。



第72図 落込み9実測図



第73図 落込み9・10土器実測図

#### 10. 落込み10

中央調査地区の中心当たりにあり、落込み6の南にある。丸みのある不定形な土壙で、南北径270cm、東西径145cmである。深さは30cmで底は凹凸がある。覆土は暗灰褐色で、遺物がかなり出土しているが、完形品はなくすべて投棄されたものであろう。

出土した遺物は須恵器・土師器・陶磁器であるが、須恵器は図化出来るものはない。杯は、〔第73図-（1）・（2）・（5）・（6）・（17）～（21）〕の9点であるが、口径10.6cm～12.6cm、器高1.6cm～2.3cmとほぼそろっており、体部から口縁をヨコナデ調整、底を指頭による抑えによって調整している。皿は〔第73図-（3）・（4）〕のやや大きめの皿と〔（10）～（16）〕のやや小形の皿がある。大きめの皿は口径11.6cm、12.8cmで底から角度を持って立ち上る口縁を持っている。調整はヨコナデと指頭による抑えである。小形の皿は口径7.7cm～9.7cm、器高は1.0cm～2.0cm、いずれも丸みを帯びた口縁を持っており、調整はヨコナデと指頭による抑えである。三足の破片は



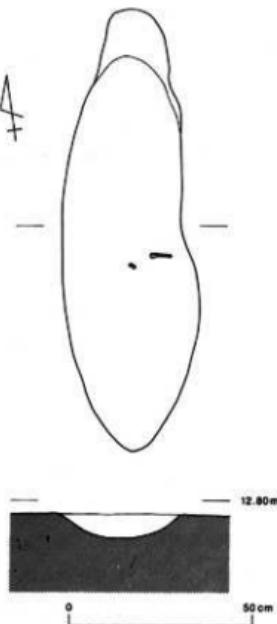
第74図 落込み10陶磁器実測図

〔第73図一(8)・(9)〕 鍋との接合部より剥離しており、全長は不明である。陶磁器は白磁碗で、外反する口縁部で端部は丸くおさめている。外面にはクシ書き文が見られる。

## 第6節 火葬墓

中央調査地区の南西部、J-08において砂質土層を掘り込んで作られており、造構としては隔絶して築かれている。覆土は灰色土に炭が多く混っている。検出した時点での大きさは長径120cm、短径31cmでN10°Eの方向である。すでに上部を大きく削平されていたのであろう。深さは、最も深い所で11cm、凹凸が激しいが、一応舟底状土壤であったと思われる。中央南側が最も深くなっている。北側の方が緩やかな斜面になっている。残存部の側面から底一面にかけて炭が散かれたように出土しているが、焼土面は、まったく見られず、この地点で火葬したものか、焼成後の炭と骨を埋納したのかは明確ではない。骨は灰の直上においてかなり出土したが、すべて火により脆くなっている。しかも細片となっていたために取り上げることはできなかった。

出土遺物は5cm余りの角鉄釘が1点出土したが、取り上げ後破損により図化できなかった。時期は年代を示す遺物が出土しなかったため不明である。



第75図 火葬墓実測図

## 第7節 溝

溝は南東部分で3本検出されている。溝1は主軸方向が異なっており新しい段階かもしれない。溝2は整地層に伴っている。大溝はやや新しい時期の造構で、近代まで存続した造構である。また、2ヶ所で近世の溝が検出されている。

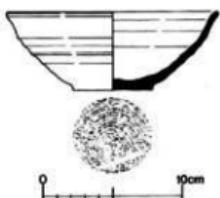
### 1. 溝1

調査区南東で確認された溝である。主軸方向がN15°Wとやや異なっている。大半の他の造構とは時期が異なっているかもしれない。出土遺物は埋土中で、底・肩についておらず決定資料とは言えず、新しい段階の造構である可能性が高い。

溝は、幅0.5~0.7mで最も広い部分で1.2mを測る。長さは、調査した長さは6.2mであり、北側は削られており、さらに北へ延びていたことは確実である。溝内は灰褐色土とともに拳大~人頭大の円礫が多数含まれていた。深さは、平均0.3mと浅い溝である。

出土した遺物は縹内から須恵器・土師器片が出土している。図化したのは須恵器楕1点である。口径端部は約2分の1しか

残っていないが底部はほぼ完存している製品で、口径14.9cm、底径5.7cm、器高5.6cmを測る。底部は糸切りで切り離している。整形はロクロナアで、色調は内外面とも灰白色で、胎土に小石粒を含む。相生窯跡群の製品である。



第76図 溝1土器実測図

## 2. 溝2

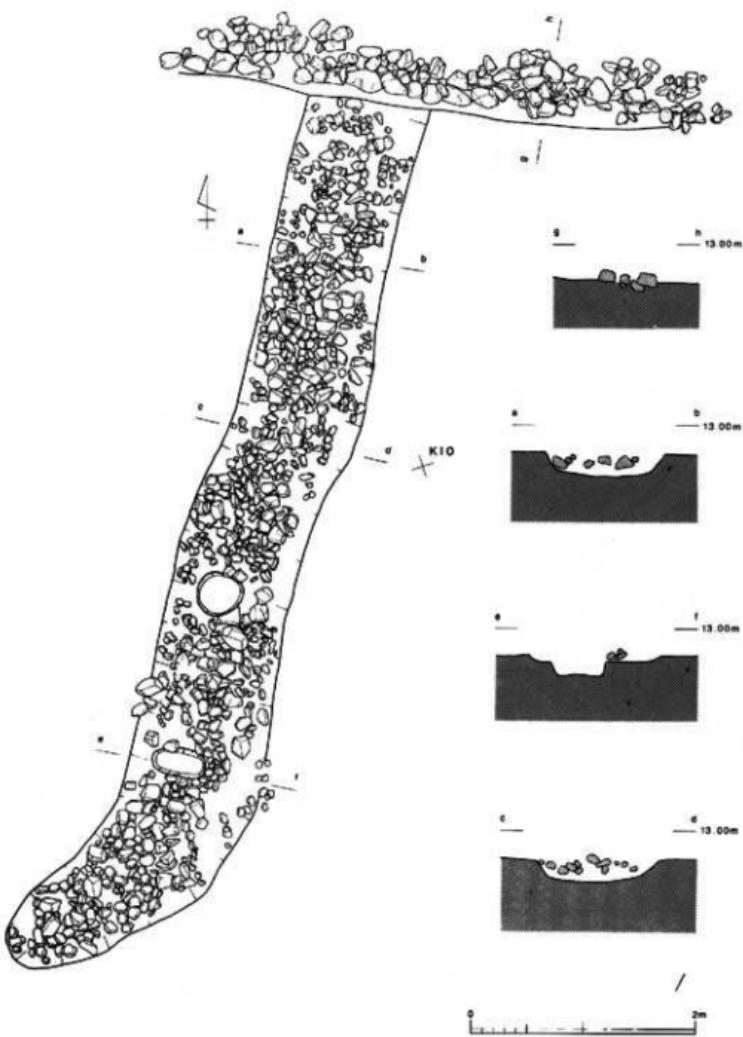
J K09・10に位置し、整地層に伴うとみられる石組に直交する位置に築かれた溝である。石組下から掘られており、全長9m近くを測る。平均幅は1mで、石組下から南へ7.5mのところで西へ方向を変え、約1.5mで終息している。深さは、0.3~0.4m前後と浅いもので溝内に円礫を多数有している。円礫に規則性はないが、中央部分の方が大形の石を置いているようである。

溝内に2基のピットがあり、北側のピットは溝主軸方向と直交する柵列の柱穴の1基と思われる。時期の先後関係は明確でないが同時期とも考えられる。遺構が多数存在する整地層の端から延びており、柵列とも深く関連しているように思われることから、溝2はこれら遺構と有機的に深く関係した同時期の遺構と考えられる。

+ J09



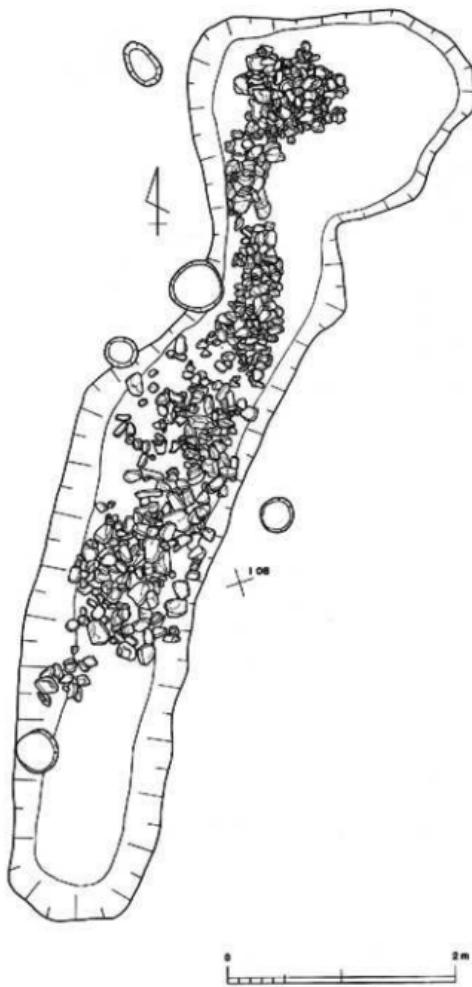
第77図 溝1実測図



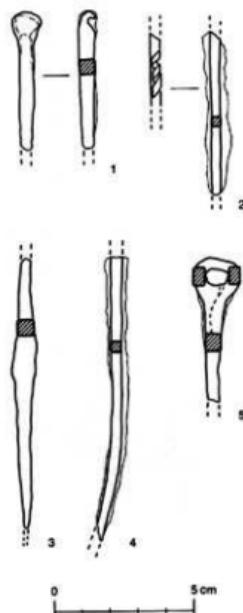
第78図 溝2実測図

### 3. 溝3

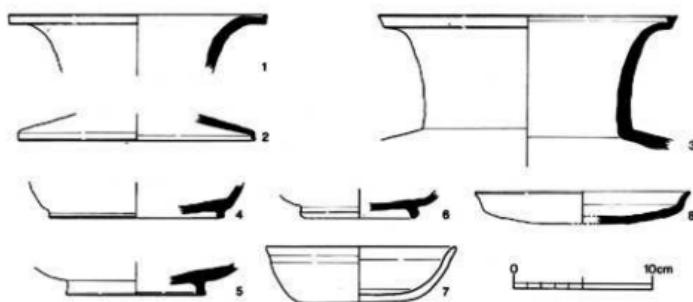
東側に井戸はあるが、遺構が存在する東端に位置している。主軸方向は溝2や他の多くの遺構と同じで、ほぼ南北をとっている。溝全体は、長さ8mで、幅1.2~1.5mを測る。深さは一律でなく、0.2~0.7mと差がある。全体的に北から南へ向かっているが、深い部分が間にあり明らかでない。溝内で北端から5m位まで円礫が並べられている。



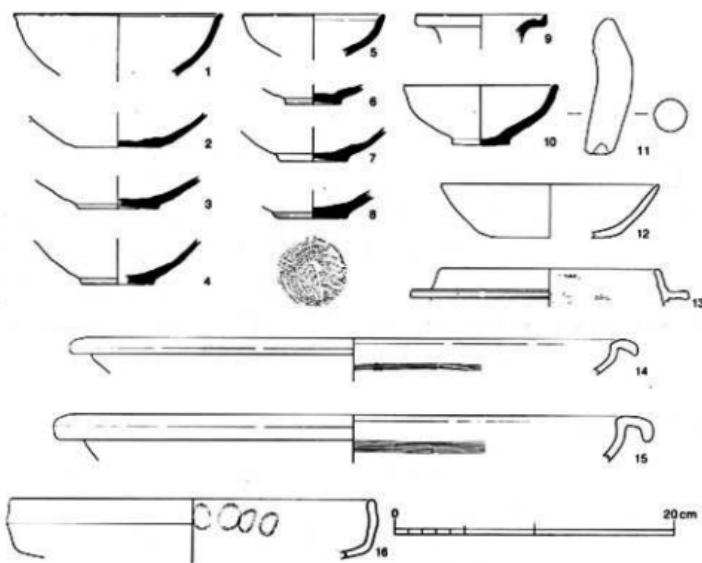
第79図 溝3実測図



第80図 溝3鉄器実測図



第81図 溝3土器実測図



第82図 大溝土器実測図

#### 4. 大溝

調査区南西隅のJ K14～J K18に位置する遺構で、調査区内でほぼ直角に曲がっている。東西方向に17m、南北方向に8 m調査した。幅は3～4 mを測り、深さは0.8～1.2mを測る。底

は若干の凹凸はあるが比較的平坦である。底にはヘドロ層があり、水があったことは確実である。その上層も青灰色～黒色粘土層で、当遺跡で大溝からのみ木器が出土している。木器（第199図）は下駄・曲物・漆椀・容器が出土しており、他に板材や自然木が数点認められる。字限図でも当地点で小字界（松之後と国師門前）があり、国道2号線敷設前は、宝林寺の一画であったことが判る。大溝は宝林寺を巡る濠の一部と考えられる。

出土遺物は、須恵器・土師器・陶磁器・木器がある。時代的には、古墳時代初頭から近世（近代）に至る時期の遺物がある。古い遺物も混入しているが、造構の時期は宝林寺の造営と同じものと思われ、国道2号線開通まで存続した造構と考えられる。

### 5. 近世溝

中央地区北東部と南西部の両端で近世溝を確認している。北東部は調査区北東コーナーから南西へ主軸をN28°Eで大半の造構より東へ掘っている。全長14.2mを測り、北東へ続いている。幅は0.6～1.2mで浅い溝である。南西部の溝も浅く幅0.6m前後で11m残存している。



第83図 (左) 大溝 (右) 近世溝全景

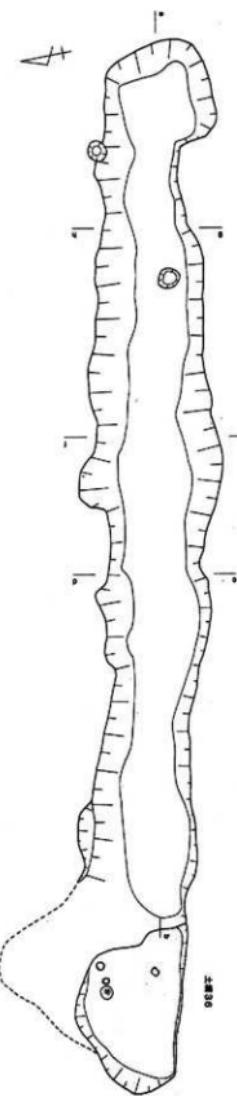
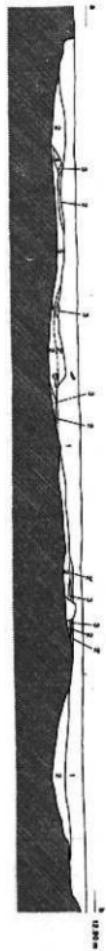
### 第8節 屋外炉

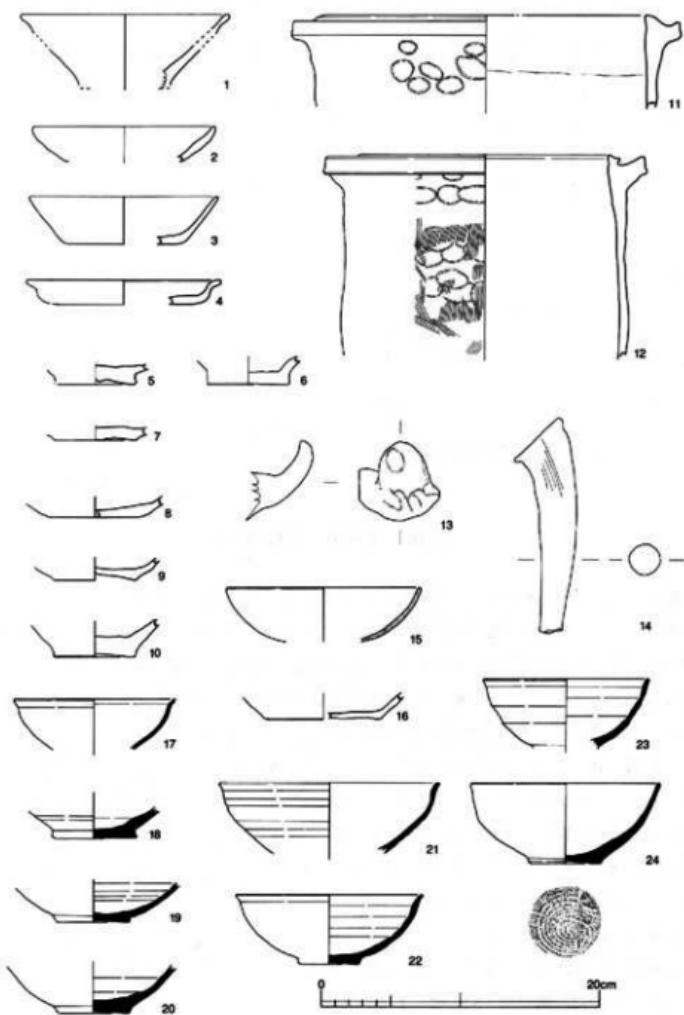
中央地区的南西部分であるI13からH15にかけて、ほぼ東西に伸びる溝状の造構である。西側端に土壤36が後に築かれているため、上端の一部が損壊を受けている。長さ10.3mの狭長な溝で、幅は0.8～1.5mと場所により異なるが、平均1m前後である。直線に伸びる細長い溝状であるが、底面は平坦ではない。縦断面は緩やかな起伏があり、横断面は逆台形とU字形の部分がある。底には炭・焼土層もしくは炭・焼土混じりの暗茶褐色土が堆積している。造構内全体に炭・焼土が多く見られ、灰層も存在することから火を使用した造構であることは確実である。造構の主軸方向は、中央地区のほとんどの造構と同じ方向である。底面に径22cmのピットが掘られているが、同一の造構か否かは判然としない。埋土は、上層の造構を全体に埋めてい

第四章 地質學圖說

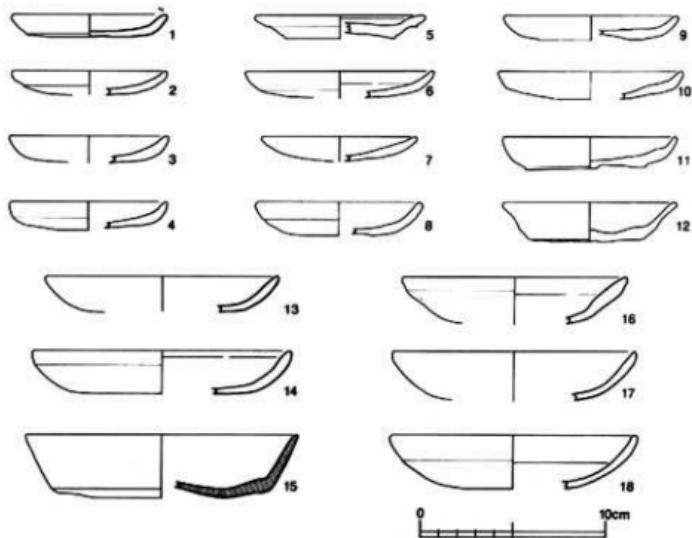
— 0 —

1. 河漫地帶  
2. 河漫地帶  
3. 河漫地帶  
4. 河漫地帶  
5. 河漫地帶





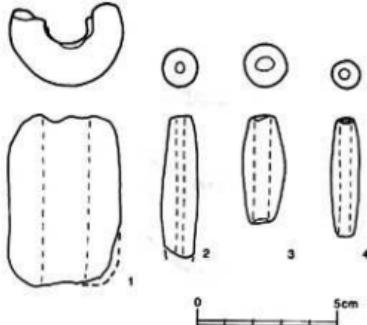
第85圖 屋外爐土器実測図(1)



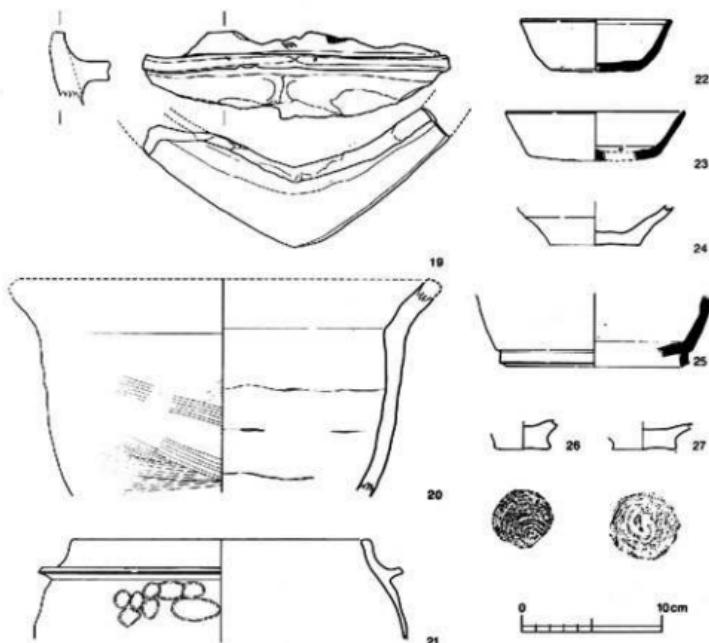
第86図 屋外炉土器実測図(2)

る灰褐色土以外は、造構全体に広がる土はない。縦断面で緩やかに起伏している低い部分は層序が複雑である。炭層砂層・焼土層が入り組んでいる。中央に位置する深い部分の上層で、頻・繁に使用された土鍋〔第85図-12〕が原位置と考える状態で出土している。西側に炭層があり、土器の下層は炭・焼土が多く入った土層である。周囲の壁も焼成を受けており、出土鍋の外面に煤が付着していることから、造構の性格を火に強く関係した造構と考え、種々の状況から見て屋外炉と考えている。部分的にブロック状に黄灰色砂層があるのも炉に関する造構を察くための土と思われる。溝状の屋外炉の低くなつた部分を主に使用したものと思われるが、時期によっては位置を変えていたかもしれない。

出土遺物は比較的多く、須恵器（椀・皿）、須恵器質盒、土師器（皿・椀・鍋・甕）、瓦器（椀・鍋）が出土している。奈良時代の須恵器椀や土師器皿も数点見られるが、ほとんどは12世紀

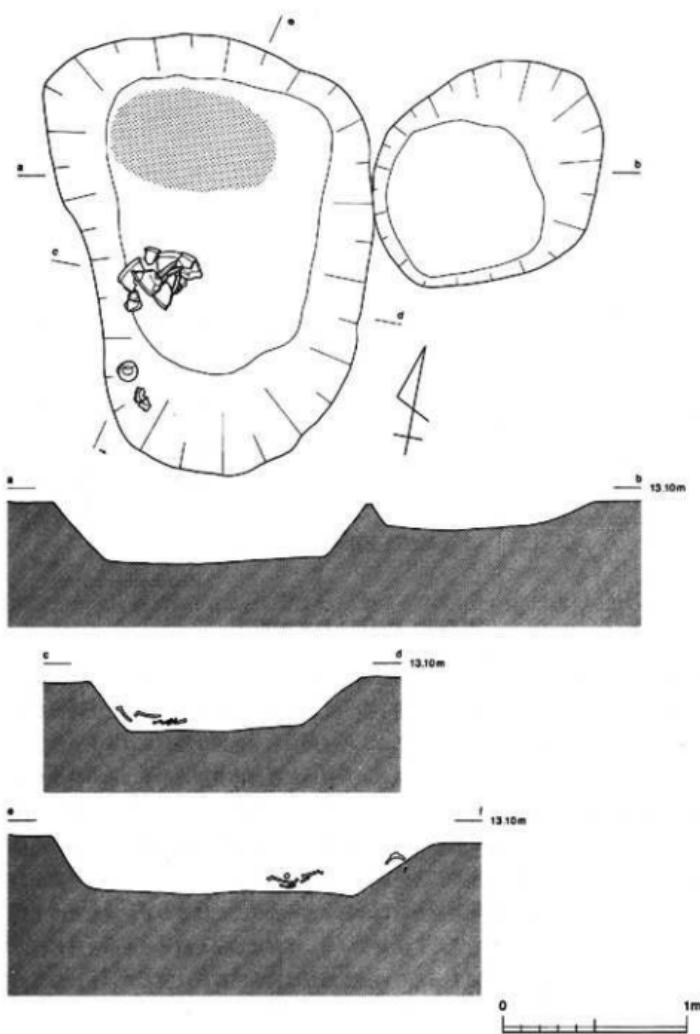


第87図 屋外炉土器実測図

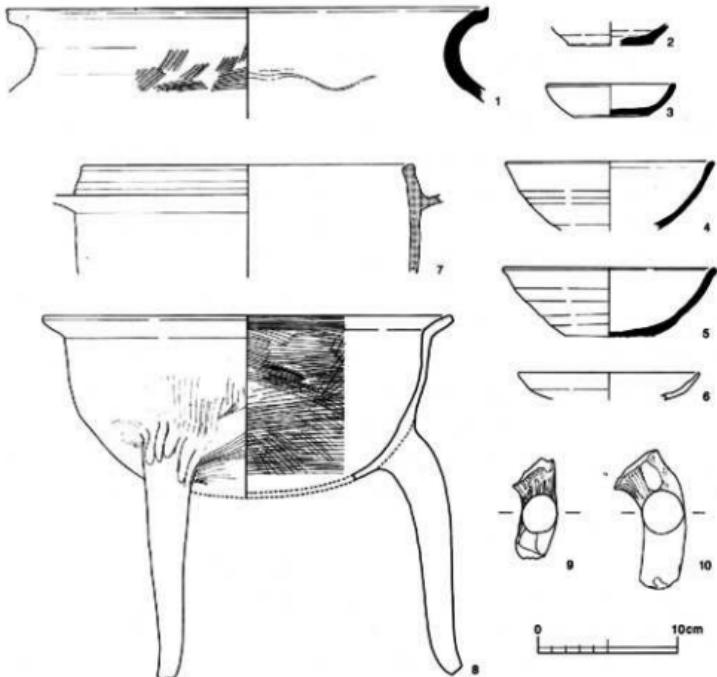


第88図 屋外炉土器実測図(3)

代の遺物であるが同一の時期ではなく、ある程度の幅を持っている。図化したのは55点で、内訳は土師器37点・須恵器11点・須恵質土器1点・瓦器2点・土鍤4点である。土師器皿も口径は9cmから15cmのものまでバラエティがある。技法的にも全体的に強いヨコナデで仕上げたものと口縁部のみヨコナデを施したものがある。宝林寺北遺跡の遺構の中では古い時期を示すと思われる遺物の方が多い。楕も底部のしっかりしたベタ高台で、ヘラ切りの方が多い。甕・鍋は全て良く使われており、外面に煤が付着している。瓦器羽釜も同様である。遺構の性格を肯定出来るように鍋・甕の破片は多い。三足器の脚部や把手の部分も出土している。鍋が口縁部に接して付加されている鍋で図化可能なものは第85図-⑪・⑫だけである。須恵質の土器〔第88図-⑯〕は大形の土器で、径を正しく出せないが、体部は25cmを越えるものと思われ、外部に隅円方形の鍤を付けている。幅1cm余りの鍤で端面は緩い凹線状に凹んでいる。体部の整形は6本/cmの粗いハケで行っており、鍤の接続後の整形も下側は同様の工具で行っている。鍤コーナー部から下に突帯を付けている。一部分のため断定は出来ないが、隅円方形の鍤を付けた盒と思われる。



第89図 土壠1・10実測図（トーン部分は穀集中部分）



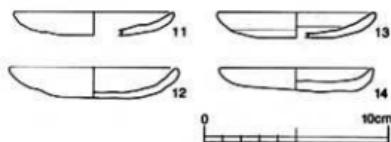
第90図 土壌1土器実測図(1)

### 第9節 土壌他

#### 1. 土壌1

南側の方が径の大きい倒卵形をした不定形の土壌である。ほぼ南北に主軸を持ち、最大長242cm、最小長140cmで、深さも径の大きい南側が最も深く掘られており、北側は緩やかな傾斜で肩部となるが、南側はやや急な傾斜である。最深部上に1個体の三脚付土鍋が出土している。煤の付着した使用された鍋である。

土壌底面で鍋が出土していない方の浅い部分から指頭大の小礫が径45cmの範囲に集中して検出されている。性格は不明であり、出土した土器が自然に埋もれたか、廃棄されたかによって、意味が変わると思われるが、判定出来ない。土壌の位置は調査区域の北端であるが、遺跡の中



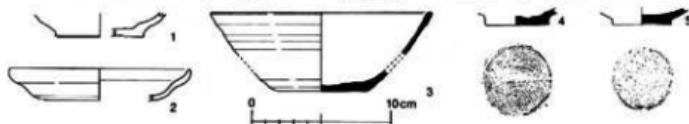
第91図 土壌1土器実測図(2)

心部分と考えられる。

出土遺物は、土壌の中では多量に出土している遺構である。須恵器・土師器・瓦器が出土しており、土師器には鍋・椀・皿の器種がある。須恵器には甕・椀・皿があり、瓦器は鍋である。土壌1出土の遺物は圓化可能な土器が多く、総出土遺物の大半を実測出来た。(1)は須恵器甕で魚住産のものである。復原径34.4cm、残存高6.8cmの甕の口縁部で、口唇部は内側に肥厚させており、端面に1条の凹線を持つ。胴部には右上りのタタキが施されている。口縁部にもタタキメが見られ、タタキ成形のちヨコナデしている。内面には粘土の雜目があり、ユビ押えのあとが見える。(2)は須恵器椀の底部で糸切りが見られ、復原底径6.2cmである。(3)は須恵器小皿の完形品である。口径9.5cm、底径5.5cm、器高2.2cmを測る。糸切り底で、東播系の須恵器で魚住焼の可能性が高い。(4)(5)は須恵器椀で西播系(相生窯跡群)の土器である。(4)は復原径14.6cm、(5)は口径15cmを測る。ともに回転ナデで仕上げてあり、底部は糸切りである。色調は明るい青灰色である。(5)は器高4.9cm、底径6.4cmを測る。(6)は大形の皿で復原径12.8cmで、残存高1.9cmの土師器で、ヨコナデで仕上げている。(7)は瓦質の鍋(羽釜)で、鋸端部を欠失している。復原口径23.6cm、残存高7.8cmで鋸部は2cm弱あるものと推定される。残存部全体にヨコナデが見られる。(8)は三脚付きの土鍋で1脚は欠失しており、鍋底部も残存していない。煤が外面に付着しており、実用に供していたことは明らかである。鍋体部は外側とも粗いハケで整形している。鍋は緩くの字形の口縁部から丸底となる体部へと続く。口唇部は角張り気味である。脚は、弯曲しながら垂直に近く下降し、着地部で外方向に広がっている。(9)(10)も鍋の足で、(10)は(8)の1脚となる可能性がある。(9)は小形であることから別個体であることは脚数からも間違いない。(11)～(14)は土師器小皿で、全てユビ成形のち口縁部のみヨコナデで仕上げている。(14)はやや白っぽいが、赤褐色を呈し、砂を含んでいる。(12)のみ完形品で器高1.7cmで口径9.0cmを測る。

## 2. 土壌2

E05に位置する土壌で、最大径150cmで深さ27cmを測る不定形の土壌である。東側が広く西側が狭い形態で主軸はほぼ東西になっている。上面に円暈が見られるが、規則性はないように思われる。遺物は須恵器・土師器で小片が多いが、5点を圓化した。(1)は土師器碗の底部でヘラ切りの底である。調整は底面を除いてヨコナデである。(2)は土師器皿で丁寧なつくりである。ユビ整形のちヨコナデを施している。復原径は12.4cm、残存高2.25cm。(3)～(5)は須恵器椀で、糸切り底



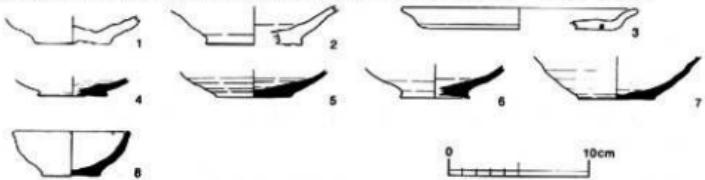
第92図 土壌2土器実測図

である。(3)は復原径16.0cm、推定器高5.6cmで、口縁端部がやや肥厚しつつ丸くおさめられている。(4)(5)は底部は完存しており、(4)は5.2cm、(5)は4.4cmの底径を測る。

### 3. 土壙3

土壙2の北西に約2m離れて築かれている土壙でE06に位置している。土壙2との間は1段溝状に約7~10cm掘り下げられている。溝状の中にピット39・40が築かれている。土壙3の上面形状は不定円形で約200mで東側は溝とつながっている部分が不定形となっている。下端のラインは方形に近い形状になっている。深さは35cmで西側が浅く東側が深くなっている。底近くに10数個の円窓が含まれている。

遺物は須恵器、土師器が出土しているが、全て小片である。須恵器は甕・椀・皿で、甕は大形のもので格子タタキと平行のタタキがある。椀は口縁部と底部があり、底部は糸切り底である。口縁部は玉縁状のものもあり、備前系の土器と相生産の土器がある。小形椀(8)が1点出土しており、朱を入れた皿と思われる。底径4cmの糸切り底で器高3cmを測る。外面にも朱が付いており、丹塗した土器の可能性もあるが、容器として使われたものと考えている。図化していない出土土器の総数は28点で、口頸部6点・底部3点で、うち甕の破片が4点含まれている。土師器は4点出土しており、皿1点と椀3点である。椀は2点ともヘラ切りである。

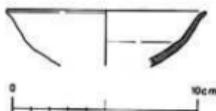


第93図 土壙3土器実測図

### 4. 土壙4

北東に土壙3が南東に土壙5が、肩を接して築かれている。隅が丸くなった長方形をしている。最大長206cm、最小長68cmを測り、深さは20cmである。緩やかな傾斜で掘り下げられ、底は狭く断面は薺研状に近い形状である。底面東端にピットが掘られており、深さは7cmと浅いもので、上層の造構のピットの可能性もあるが識別出来なかった。

遺物は22点出土しており、土師器は皿と甕・鍋の破片である。白磁の皿で復原径10.6cmで、底部は釉がかからず露台となっている。



第94図  
土壙4陶磁器実測図



第95図 土壙5土器実測図

## 5. 土壙5

E06にある小形の土壙で、土壙4と肩を接している。不定形をしており、最大長100cm、最小長68cm、深さ21cmを測る。

遺物は、土師器と須恵器が10数点ずつ出土している。土師器には皿・椀・鍋があり、須恵器は椀に限られる。椀は高台の付くものと糸切り底のものがある。実測した須恵器は相生産の椀で、復原径16.0cmで残存高4.8cmを測る。灰白色を呈し、小石粒を含む。

## 6. 土壙6

E07にある土壙で深さ8cmと浅い土壙である。不定形で最大長230cmを測る。東側はピットで切られており、壇内西端に最大径48cmのピットが2段に掘られている。深さは32cmである。遺物は、土師器のみが出土している。皿・鍋・甕が出土しているが、全て小片である。

## 7. 土壙7

土壙6の北東に隣接して掘られた土壙で、主軸もほぼ同じである。最大長155cm、幅65cmの溝状の土壙で不定形で深さ11cmと浅い。

遺物は、須恵器椀の小片7点と土師器30点が出土している。土師器は椀・皿・鍋で椀は糸切り底のものであるが、通有の底部と高台部が1cmあるベタ高台のものがある。

## 8. 土壙8

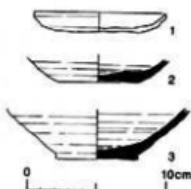
E05にある土壙で西側に土壙2が位置している。最大長100cmの卵形の平面プランをしており、深さは28cmである。

遺物は4点を除いて土師器ばかりで総数26点を数える。口縁部が6点で鍋も5点含まれる。瓦器椀の破片が出土しているが、他の瓦器同様磨滅しており暗文など残っていない。

## 9. 土壙9

隅円長方形の土壙で105×50cmで深さは22cmを測る。南側に土壙2があり、その間に12cm前後に1段下がった部分がある。

遺物は総数22点で、須恵器3点で他は土師器である。(1)は土師器皿でユビ成形のうち口縁部を強いヨコナアで仕上げる。口径9.5cm、器高1.4cmで砂粒を含む。他に径15cm前後の大型の皿も1点出土している。甕・鍋の破片も見られる。(2)(3)は須恵器椀の底部であるが、底面の切り離し方法は異なっている。(2)はヘラ切りで(3)は糸切りである。ともにロクロナアで仕上げている。(3)は底径5.6cm、残存高3.8cmである。

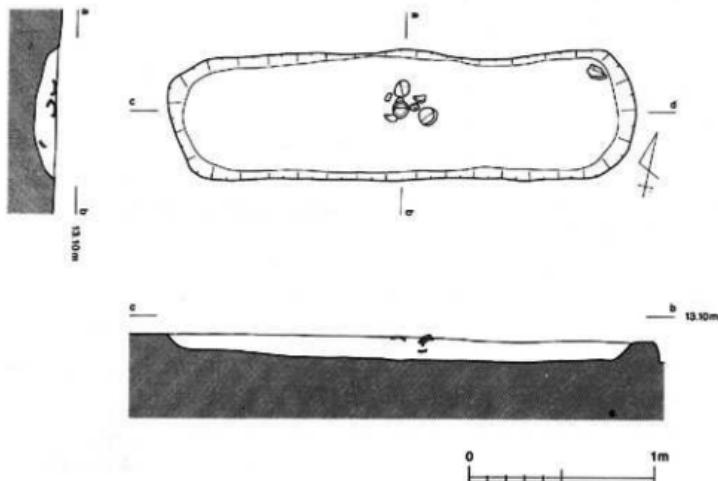


第96図  
土壙9土器実測図

## 10. 土壙10

調査地北端にある土壙で、土壙11と接している。西側に土壙1があり、一部肩を共有している。最大径1.4m、最小径1.05mを側る不定形の土壙で、西側の肩は急角度で落ち込むが、東側は緩い斜面となっている。深さは0.14mと浅いものである。

遺物は、瓦器椀1点と土師器28点、須恵器7点で全て小片のため、図化出来る土器はない。土師器には口縁部が1点含まれ、器種は鍋と皿である。須恵器は古墳時代末の杯蓋1点以外は椀の破片である。



第97図 土壙10実測図

## 11. 土壙11

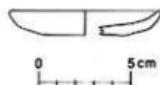
E09に位置する土壙で、隅円長方形をしている。長さ255cm、幅70cmで、深さは11cmと浅い。中央部分に5個体以上の土師器小皿があり、東端から土師器椀の破片が出土している。底のレベルは西側の方がやや高くなっている。土壙の形状や遺物の出土状態から見ると、木棺墓・土壙墓などの墓としての色彩が濃いものと思われるが断言は出来ない。浅く底近くしか残っていないかったことも墓として断定する資料を弱めている。調査段階では木棺の痕跡は検出されなかった。

土師器皿は全て赤褐色～淡赤褐色の色調で、径9cm前後の口縁部のみヨコナデした皿である。

## 12. 土壙12

土壙11の南に位置しており、楕円形のプランで長径140cm、短径80cmを測る。深さ10cmと浅い土壙である。

遺物は土師器のみ出土しており、総数56点で甕の口縁部1点と  
碗の高台部1点を含む数点以外は皿である。大形の皿と小皿があり、  
図化した小皿は復原径8.0cmを測り、チャートの酸化鉄を含む。

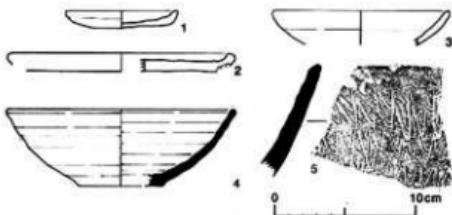


第98図 土壙12土器実測図

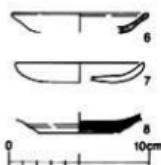
### 13. 土壙13

土壙12の西側に110cm離れて位置する土壙で、最大径120cmの不定円形をしている。深さは34cmを測る。

出土遺物量は、土壙のなかでは比較的多い方である。須恵器は数点で土師器の占める割合は高い。須恵器は柄があり、図化した(4)は粗生産のもので口径16.0cm、底径6.2cm、器高5.5cmを測る。(8)も須恵器柄で糸切りである。(6)は瓦器小皿の口縁部で口径9.6cmを測る。ユビ整形のうち口縁部をヨコナデで仕上げており、口縁部をやや外側へ広げている。土師器は皿・高台付皿・碗・鍋が出土している。(1)は小皿の完形品でユビ整形のうち口縁部のみヨコナデで仕上げている。口径は最大径で8.0cm、最小径で7.4cmを測るいびつな形となっている。(3)(7)も皿で、(3)は12.4cmと大形で(7)は9.0cmの口径である。(2)は高台付の皿で高台部を欠失している。糸切りで切り離したのち高台を付加するタイプである。赤っぽく焼き上げており、奈良時代のものである。



第99図 土壙13土器実測図(1)

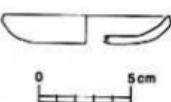


第100図 土壙13土器実測図(2)

### 14. 土壙14

平面形が卵形をしたプランで最大長90cmの土壙で、深さは22cmを測る。南西部部分が幅も狭く、深さも浅く緩斜面となっている。

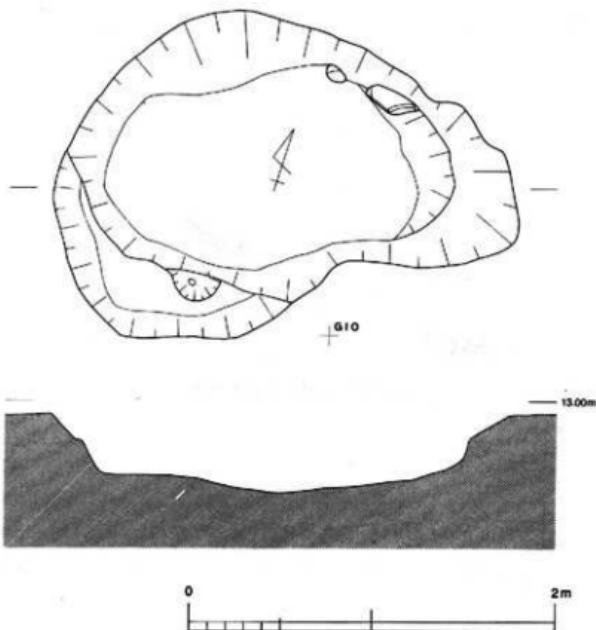
遺物は、少量の須恵器以外は土師器を出土している。皿・碗・鍋・甕の器種がある。図化したものは復原径9.0cmで口縁部と内面をヨコナデで仕上げている。



第101図 土壙14土器実測図

### 15. 土壙15

平面の形態は、最大長250cm、最小長115cmの不定形を呈する土壙で、断面は垂直に近く掘

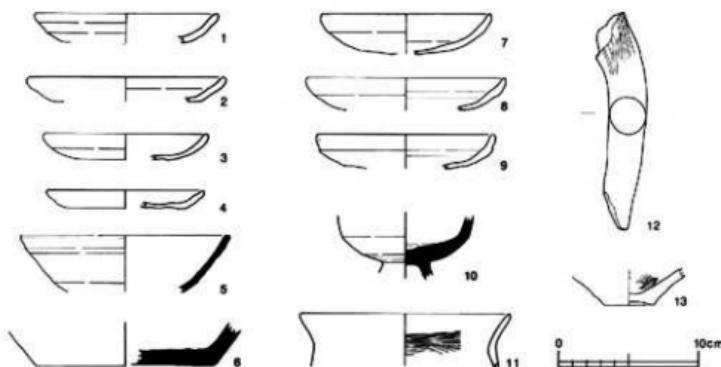


第102図 土壌15実測図

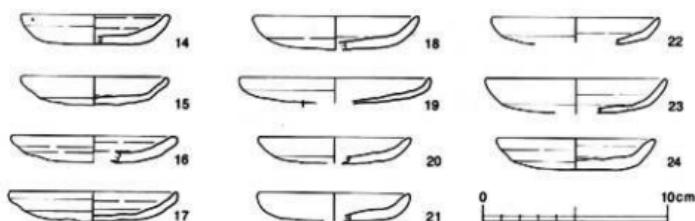
り込まれており部分的には袋状の下の方が広くなる形態をしている。検出時の堆積土は灰褐色土で宝林寺北遺跡の盛行した時期の埋土である。掘り下げた途中から炭化した穀物粒が検出され始め精査したところ、多量の炭化粒が出土した。底面近くには炭化した藁状のものも確認している。総量は約410gを測り、個数は29,000個前後と思われる。土器などの他の遺物は小片が少數埋土に混在していただけである。

断面形態が、部分的ながら袋状となることと炭化粒のみの出土であるから貯蔵用の土壌と考えられる。そして土器が伴出していないことから容器に入れて埋納したのではなく、直接土壤内に貯蔵したものと考えられる。藁状の炭化物も出土していることから、一部については穂のまま貯蔵していた可能性が高い。焼土などは出土しておらず焼けたものとは考えられず、自然状況で炭化したものと思われる。

出土した炭化粒を京都大学東南アジア研究センター長・渡部忠世教授に鑑定頂いたところ、



第103図 土壤15土器実測図(1)



第104図 土壤15土器実測図(2)

コムギもしくはハダカムギであるとのことである。少量のソバも含まれている。

出土した炭化ムギの量としては多いかもしれないが食糧として貯蔵するには少なすぎるため、次期への種穀として貯蔵していたものと考えている。ソバは、少量しか出土していないことから混在したものと思われ、周辺に雑草のように生えていた種子が混入したものと思われる。

炭化ムギの出土は、農業史のうえで裏作の可能性を示唆している。安藤廣太郎『日本古代稲作史研究』によるとムギ・アワなどの裏作は平安後期の平氏盛行時からと記されており、宝林寺北遺跡例は初現期の例と考える。

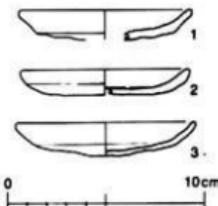
出土遺物は須恵器・土師器・瓦器が出土している。時期の違う遺物は古式土師器が1点(13)出土している。壺の底部で底径3.6cmを測り、底部再成形である。内面は8本/cmの細かいハケで整形している。出土点数は多いが大形のものはなく、完形品は皿に限られる。(5)は備前系の須恵器口縁部で、復原径14.6cmを測る灰白色の椀である。他に魚住焼捕鉢の口縁部も出土してい

る。土師器は皿・鍋・甕・椀が出土している。図化出来るのは皿が大半で、甕口縁部Ⅱと脚付鍋の脚Ⅱを図化した。皿は多数出土しており、8cmから13cmまでの口径の皿がある。大形の皿はユビ整形のちヨコナデで口縁部を仕上げている。小形の皿は全てヨコナデで仕上げている。糸切りの皿は含まれない。特殊なものとしてスラッグが1点出土している。

### 16. 土壙16

F09に位置し、長径80cm、短径50cmの隅円長方形の土壙で深さは11cmを測る。

出土遺物は、土師器・須恵器で比率的には土師器が多数を占める。須恵器には備前系椀をはじめ擂鉢・皿の破片が出土している。土師器は皿・椀・鍋・甕・甕が出土しており、やや古い時期の土器も含まれる。図化したものは小皿3点で、口径8.4cm～9.0cmのものである。精選された胎土で、ユビ整形のち口縁部をヨコナデで仕上げている。

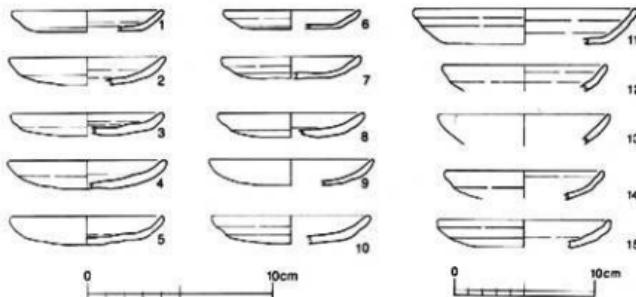


第105図 土壙16土器実測図

### 17. 土壙17

78×65cmの楕円形プランで、深さ38cmと比較的深い土壙である。

須恵器は他の土壙と同じく少量である。土師器は皿・椀・甕・鍋が出土している。図化したものは皿に限られ、15点を掲載した。口径は8cm前後のものから16cm近くの大形品まで大小の差はあるが、9～12cmのものが多數を占める。Ⅱは大形の皿で復原径15.6cm、残存高2.5cmを測る。ユビ整形のち口縁部のみヨコナデを施す。小形のものも大半は同じ技法である。強いヨコナデによって段がつくものもある。



第106図 土壙17土器実測図

### 18. 土壙18

不定形の土壙でL字形をしている。南北に延びる部分は長さ125cm、幅65cmで深さ22cmを測り、北端が東へやや曲って終結している。東西に延びる部分は55cmを南北部分と共有しており、長さ140cm、幅60cmで深さ19cmを測る。

出土遺物は須恵器・土師器と石鍋の破片1点が出上している。須恵器は楕・甕の器種がある。土師器は遺構の時期の皿・楕・鍋以外にやや古い時期の皿・楕や古式土師器も出土している。

### 19. 土壙19

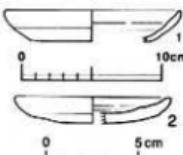
土壙18の南に位置し、やや不定の台形を呈している。最大長100cmで深さは20cmを測る。壙内隅にピットが1基存在するが、土壙との直接の関係はないものと思われる。径25cm、深さ35cmのピットである。

出土遺物はほとんどなく小片数点である。

### 20. 土壙20

F08に位置する不定形の土壙で、最大長170cmを測り、3段に掘り込まれている。上段は長さ170cm、幅50cmの東西に長い不定形で9cm掘り下げている。2段目は東半分にあり、さらに10cm下げられている。下段は径60cmの円形で30cm2段目から深掘されている。底近くに最大長20cmの河原石がある。下段の円形のピットは建物に伴うピットの可能性も求められる。建物Ⅲとした遺構の範囲内ではあるが、柱としては把えられない。径の大きさなどから、古い時期の遺構に伴う可能性が高い。埋土からは判別出来ず、周辺の遺構と同様の暗褐色土である。

出土遺物は少量の須恵器と土師器で、土師器は皿・楕・甕・鍋が出土している。図化したのは皿2点で(1)は復原径12.2cm、残存高2.2cmで、(2)は復原径8.2cm、残存高1.4cmでともにユビ整形のうち口縁部をヨコナデで仕上げる。



第107図 土壙20土器実測図

### 21. 土壙21

最大長105cm、最大幅70cmの梢円形プランで約10cm掘り下げ、南に接して最大長85cmの不定形をさらに15cm深掘されている。

出土遺物は小片が多く図化出来るものはない。須恵器は楕・甕・こね鉢が出土し、土師器には皿・楕・鍋が出土している。高台部の高い楕の破片もある。

### 22. 土壙22

最大長115cm、幅80cm、深さ10cmの不定形の土壙である。東側は直接的になっており、他は

楕円形を呈している。南東部分に径60cmのピットが掘られている。深さは土壤22底面から20cm下げられており、前時期の遺構と思われる。

出土遺物は、須恵器・土師器・瓦器と砥石がある。砥石は図化しなかったが、仕上げ砥石で残存部の2面が使われている。他の砥石同様良く使われており断面は弯曲している。須恵器は甕が多く椀底部・口縁部が数点含まれる。土師器は皿・椀・鍋があり、図化したのは皿4点である。小皿3点と口径14.0cmの大皿1点である。調整はユビ整形のち口縁部をヨコナデしている。(2)(4)は緻密な胎土で赤っぽく焼き上げている。瓦器は煤の多く付着した鍋の胴部である。

### 23. 土壌23

長径110cm、短径47cmの楕円形を呈した土壤で、深さは11cmとやや浅いものである。西に土壤22が近接して築かれている。

出土遺物量は少なく、図化出来る土器はなかった。須恵器甕・椀・鉢と土師器椀・皿・鍋が含まれる。

### 24. 土壌24

不定形の土壤で、最大長295cmを測る。ただ、ピット部分を除くと深さ5~10cmと浅いもので遺構と考えない方が妥当かもしれない。壇内にピットが2基あり、壇底から各々10cm、21cmで底となる。

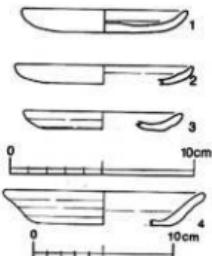
出土遺物の点数は多いが小片が多数を占める。図化したものは土師器皿2点と椀1点である。(1)は復原径13.4cmを測りユビ整形のちヨコナデを施すという通有の技法である。(2)は小形の椀の口縁部で復原径12.8cmを測る。(3)は口径7.0cmの小形の皿で丁寧な作りである。他に鍋・甕も出土しており、羽釜や脚部も出土している。瓦器も7点含まれており鍋と椀である。

### 25. 土壌25

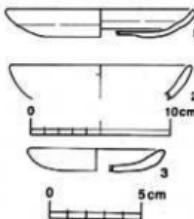
G06に位置し、隅円方形に近いプランである。長さ210cm、幅100cmで深さ27cmを測る。底は平坦でなく、北側が高く南側に向かって底面が斜めになっている。断面形も不定形である。

小片ばかりで図化出来る土器はない。土師器が多数を占め、皿・椀・鍋の器種がある。

### 26. 土壌26



第108図 土壌22土器実測図



第109図 土壌24土器実測図

第2次確認調査トレンチ内で確認された不定形の土壇で最大長180cmを測る。底の小さな掘鉢状になり、法面は緩やかである。土層から古い時期のものであるが、自然地形かもしれない。

### 27. 土壇27

やや角張った不定形をした土壇で、最大径100cmを測る。深さは12cmとやや浅いものである。

### 28. 土壇28

F04に位置する土壇で、長方形を呈している。東端部は削平を受けているが、長さ200cm、幅85cmで木棺墓を想定させるが、断定は出来ない。出土遺物も小片で図化可能の土器は含まれないため、性格は決定しがたい。深さは9cmと浅いが、底面は水平である。

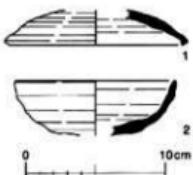
### 29. 土壇29

G05・06に位置する土壇で、北側は方形で南小口部が円形の形状をしている。長さ180cm、幅50cmで3~11cmと浅い土壇である。坡円には円礫を少量含む。

### 30. 土壇30

隅円方形の80×90cmの土壇で、深さは20cmで、遺構密集地域に存在する。出土遺物の中に古い時期のものも含まれるが、時期的には大半の遺構と同じ時期である。

出土遺物は須恵器・土師器・瓦器で、瓦器は瓦の破片数点で須恵器も甕・椀を少量出土しているだけである。図化したものは須恵器2点で杯蓋と椀1点ずつである。(1)は古墳時代末の蓋で口径13.0cmを測る。宝珠つまり部は欠失している。(2)は椀で口径10.8cmに復原され、底部を除いてヨコナデで仕上げられている。大半の出土遺物は土師器で、甕・鍋・椀がある。鍋の点数は比較的多く、脚部や各種の口縁部が含まれており、大形品もある。



第110図 土壇30土器実測図

### 31. 土壇31

H08・09に位置し、南北方向に長い土壇である。北西部が底辺となる台形プランをしている。底辺150cm、上辺100cm、高さ120cmを測る。壇内に多くの円礫が入っていた。

遺物は、須恵器・土師器の小片しか出土していない。

### 32. 土壇32

不定形の大形の土壇で、自然地形の可能性が高い。整地する際の整地層の端部かもしれない。出土遺物は、須恵器・土師器・瓦器が出土している。須恵器は甕・擂鉢・椀があり、椀は備

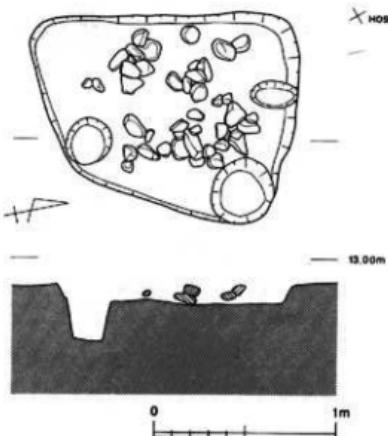
前系のものが多い。瓦器は楕・皿が出土している。土師器は、鍋・楕・皿が出土している。図化したものは7点であり、(1)(2)は小皿で他の皿同様ユビ整形のち口縁部をヨコナデで仕上げている。(8)は13.0cmの口径の皿で強いヨコナデによる稜線を有している。(3)～(5)(7)は鍋で、(3)(4)は羽釜である。(3)は口径25.0cm、(4)は24.0cmを測り、ともに内面はハケで整形している。(4)は円弯する口縁部でハケは粗く赤褐色を呈し、外面羽釜部下にススが付着している。(5)は口径30.6cmの大形のもので火をよく受けており、鍋として使用頻度の高い製品である。全体に暗茶褐色を呈しており、金雲母・長石の砂粒を多く含む。外面はユビ成形の上に僅かにハケで整えているが、粗雑なつくりである。内面と口縁部はヨコナデで仕上げているが、粘土紐の痕跡は明瞭である。(7)は脚部の小片である。須恵器擂鉢は魚住焼に限られるようで、図化した(6)は口径29cm、残存高6.4cmを測り、口唇部のみ黒灰色を呈している。口縁部下に沈線状のラインが通っている。須恵器のなかには前時代の遺物も含まれている。杯蓋(11)をはじめ高杯・鉢の器種が認められる。

また、釘と思われる鉄器も2点出土している。瓦の小片も1点だけ含まれ、平瓦の端部で凹面に布目が見られる。

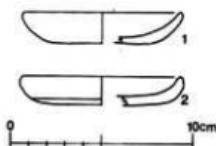
### 33. 土壌33

楕円形の平面プランでE10に位置する。長径190cmで短径は80cmを測る。深さは40cmで底部は平坦でなく緩やかなU字形となっている。東側が浅く、西側が深くなっている。

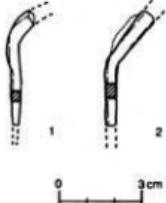
出土遺物の総点数は多いが、小片が大半である。図化したものは土師器小皿4点である。(2)は完形品で口径9.0cm、器高1.9cmを測り、全般的にいびつな形態である。技法は多くの皿と同じく、ユビ成形のちヨコナデで仕上げている。(3)も(2)と同じ技法の皿であるが、色調は赤く焼かれている。口径はやや小さく8.3cmである。(4)は口縁端部は内側に折り曲げた数少ないタ



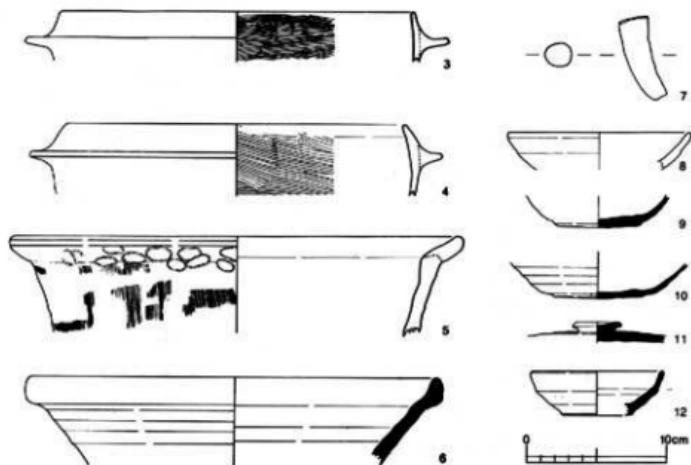
第111図 土壌31実測図



第112図 土壌32土器実測図(1)

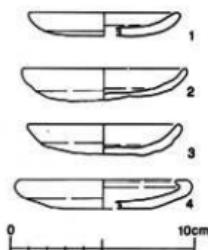


第113図 土壌32鉄器実測図



第114図 土壌32土器実測図(2)

イブの皿で、口径9.6cm・器高1.6cmを測る。底はユビ整形のままだが、内面・口縁部はヨコナデで仕上げている。胎土は精良で赤褐色に焼き上げられている精製品である。土師器は皿の破片が多数を占めるが、鍋・椀・壺の器種も見られる。鍋には羽釜と脚付鍋の破片が出土している。羽釜は内弯する口縁部と直立する口縁部のタイプがある。須恵器は椀の底部・口縁部が数点出土しており、平安時代の突帯壺の破片も出土している。また、2点だけであるが、縄文土器かと思われる破片が出土している。磨滅しているため確言出来ないが、1点は端部は欠失しているものの波状口縁の口縁部の可能性がある。



第115図 土壌33土器実測図

#### 34. 土壌34

最大長270cmの大形不定形の土壌である。H10・I10に位置し、南北に長い土壌で深さは30cmを測る。

出土遺物は須恵器・土師器・陶磁器の小片が出土している。全て小片で表面磨滅しており、図化出来る土器はない。

### 35. 土壙35

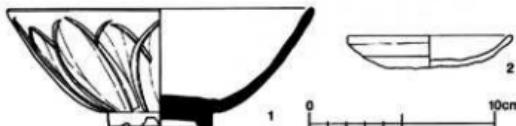
G10に位置し、南接して落込み6が築かれている。最大長190cmの大形の土壙で擂鉢状になつており、深さは30cmを測る。

遺物は須恵器・土師器の小片数点である。

### 36. 土壙36

H15に存在し、屋外炉の西端部を切って築かれた土壙である。長さ190cm、幅120cmで残存する深さは10cmである。南側は直線的であるが、北側は弧を描いている。中央北側で青磁碗完形品が伏せた状態で、土師器皿が斜めに傾いて出土している。肩は緩やかな傾斜面となっている。

出土遺物は、完形品の青磁碗と土師器小皿が各1点と須恵器・土師器の小片が10数点ずつ出土している。須恵器のなかには前代の遺物も含まれ、碗口縁部・高台部などが出土している。土師器小皿は、口径9.0cmで器高1.8cmを測り、チャートの酸化粒や石英の砂粒を含み、ユビ成形のち口縁部のみヨコナデで仕上げている。色調は淡く、乳褐色を呈す。口縁部は正円でなく、いびつである。青磁碗も完形品で淡いオリーブ色を呈する。底面には輪はかかっていない。高台は付け高台で高台端面はナデている。外面に蓮弁文が描かれており、16弁を数える。1弁おきに描いており、8弁は両方の弁で頂部・鋸部を除いて消されている。見込み部には櫻線に近い変換線が見られる。口径16.0cm、器高6.6cmを測る。



第116図 土壙36土器実測図

### 37. 土壙37

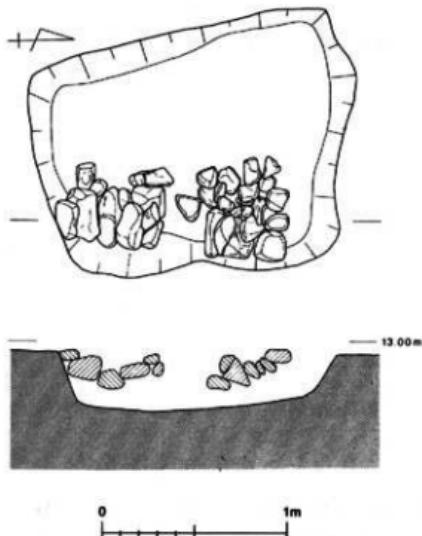
長方形の土壙で、長さ140cm、幅95cmを測り、深さは6cmと浅いものである。

出土遺物は須恵器・土師器の小片しか出土しておらず、図化可能な土器はない。

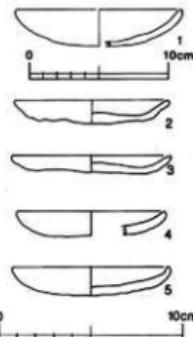
### 38. 土壙38

やや不定の長方形の土壙で遺跡南端近くに位置している。長さ165cm・幅130cmで東側が幅をやや狭めている。東側にのみ礎が集中している。最大長30cm前後の人頭大の円礎を集めており、他の土壙の礎の入り方とは明らかに異なり、意図するものがあるようと思われる。深さは30cmあり、礎は底には着いていない。土壙上面に置いたものと思われ、南側は肩に接している。

出土遺物は、須恵器・土師器の小片だけで、図化したものは土師器小皿5点である。(1)は口



第117図 土壌38実測図



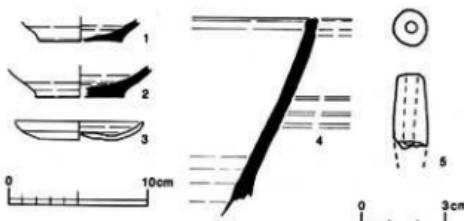
第118図 土壌38土器実測図

径11.8cm、器高2.5cmの中皿でヨコナデで丁寧に仕上げた精製品である。(2)～(5)は口径8.0～8.4cmの小皿でユビ成形のちヨコナデで仕上げている。色調は(2)(3)が褐色で(4)(5)は赤褐色である。

### 39. 土壌39

J11に位置し、整地層の外側に存在する。最大長210cmで長軸方向に二段に掘り下げられている。上面で幅155cmで、深掘される部分は140cm四方の不定形である。深さは、まず15cm下げ、さらに17cm下げている。

遺物は須恵器・土師器・瓦器



第119図 土壌39遺物実測図

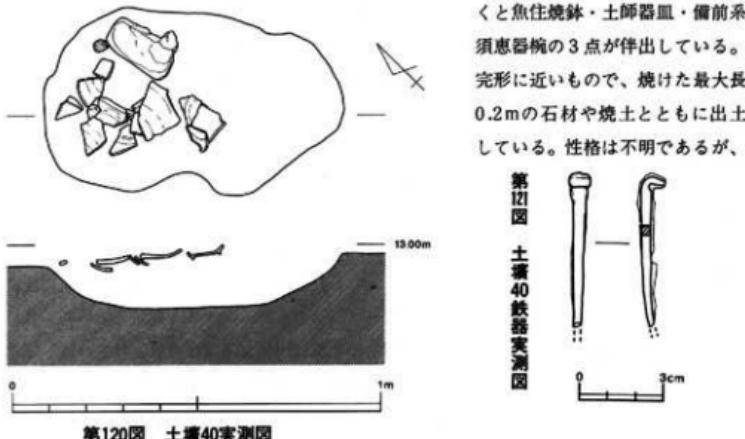
が出土している。須恵器には破片としては甕の破片が多い、図化したものは椀底部2点と甕口縁部1点である。(1)(2)はともに糸切り底でヨコナデで仕上げている。奈良時代の須恵器の破片も含まれる。(4)も須恵器大甕の口縁部で古墳時代に遡る遺物である。外面に4条の凹線文があり灰白～灰色を呈する。土師器は鍋・椀・皿で図化したのは皿1点(3)で口径9.1cm、器高1.3cmを測る。口縁部のみヨコナデをしている。(5)は土鉢で半分が残存している。残存長2.6cmで、最

大径は1.2cmを測る。瓦器は鍋1点で鉢部が出土している。

#### 40. 土壌40

E 06の調査区北端で一部検出したため、拡張して調査した土壌である。不定形をしており、最大長0.8m、幅0.5mを測る。深さは0.15~0.2mと浅いものである。壙内には小片の遺物を除くと魚住焼鉢・土師器皿・備前系須恵器碗の3点が伴出している。

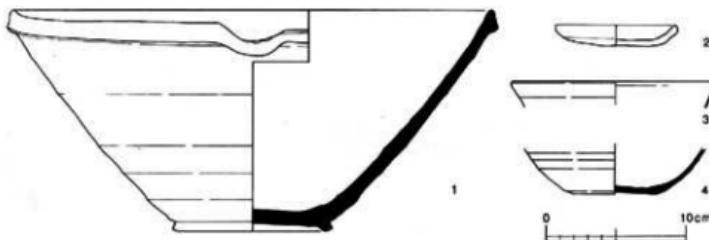
完形に近いもので、焼けた最大長0.2mの石材や焼土とともに出土している。性格は不明であるが、



第120図 土壌40実測図

共伴関係とともに興味深い土壌である。

出土遺物は、図上で完形となる2点(1)(2)や須恵器碗(4)の底部はあるが、全体的に須恵器・土師器の小片である。(1)は魚住焼の片口鉢で、口径36.0cm、器高15.8cmの大形品である。高台を有し、ヨコナデで仕上げている。(2)は土師器小皿で口径8.5cm、器高1.5cmを測り、ユビ成



第122図 土壌40土器実測図

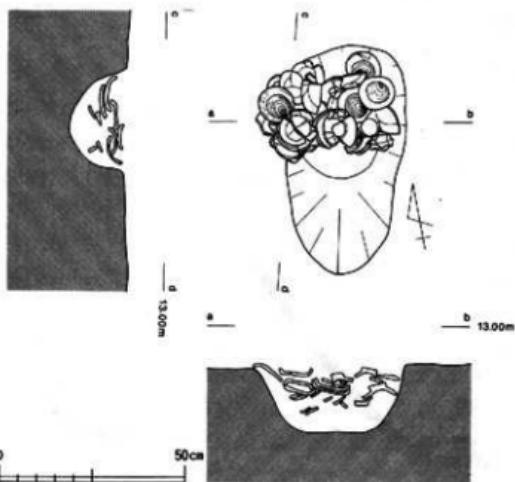
形ののち口縁部のみヨコナデで仕上げている。(3)は須恵器楕で端部が丸く肥厚した復原径14.8cmの口縁部である。(4)も須恵器楕で底径6.1cmの糸切り底の底部である。(3)(4)は同一個体の可能性が高く、備前系の製品で重ね焼きの痕が看取される。鉄釘1本も出土している。5.4cmで0.4~0.5cmの方形をしており、頭は曲げて作っている。先は曲がっており、使用によるものであろうか。

#### 41. 土壌41

土壌40に隣接する土壌で、用地外へ延びているため全てを調査していない。残存長0.4mで埋土も土壌40と同じである。出土遺物は須恵器・土師器の小片で図化可能なものは出土していない。

#### 42. 土壌42

G13に位置する小形の土壌である。44個の土師器完形品を収めた土壌で、検出時に須恵器1点(1)を出土しているが、遺構に伴わないものと思われ、時期的にも古くなるものである。土師器の器種は楕と皿で、楕は5個出土している。法量の違いはあるが、形態は似たものである。意識的に埋めたもので、重なり合って出土している。正置に重ねるのではなく、交互に正置・倒置としている方が多い。小皿を下に上にはベタ高台の皿37~40や楕が位置していた。長径62cm、短径40cmの楕円形の上面プランで、下面では北側に円形に下端が確認されている。下端径は22cmで南側は緩やかになっている。土器が土壌西側へ坡外へ出て重なり合って出土している。

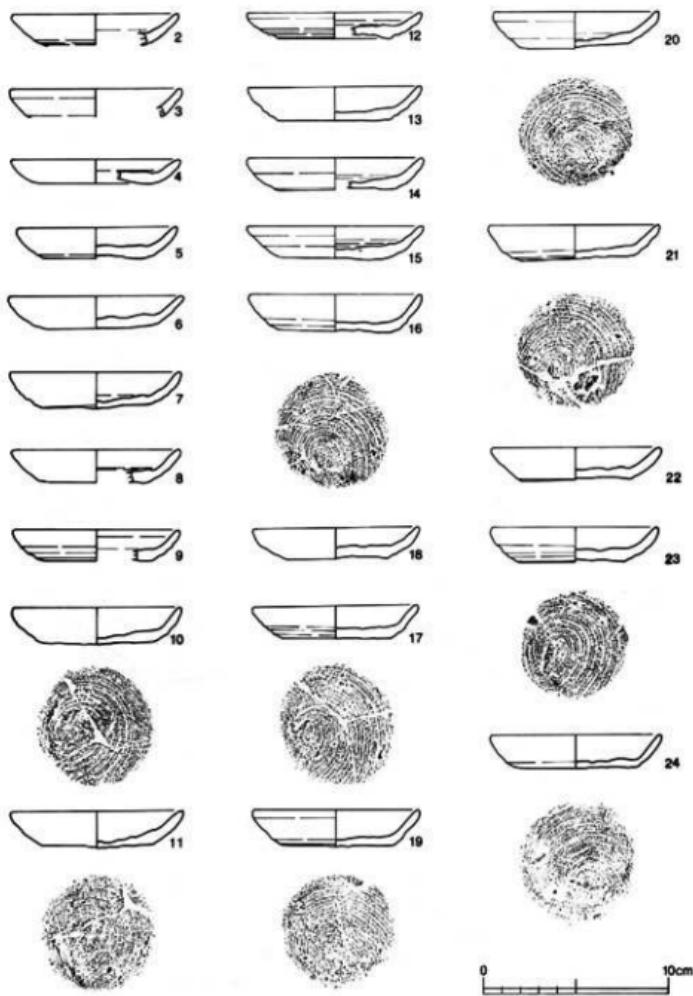


第123図 土壌42実測図

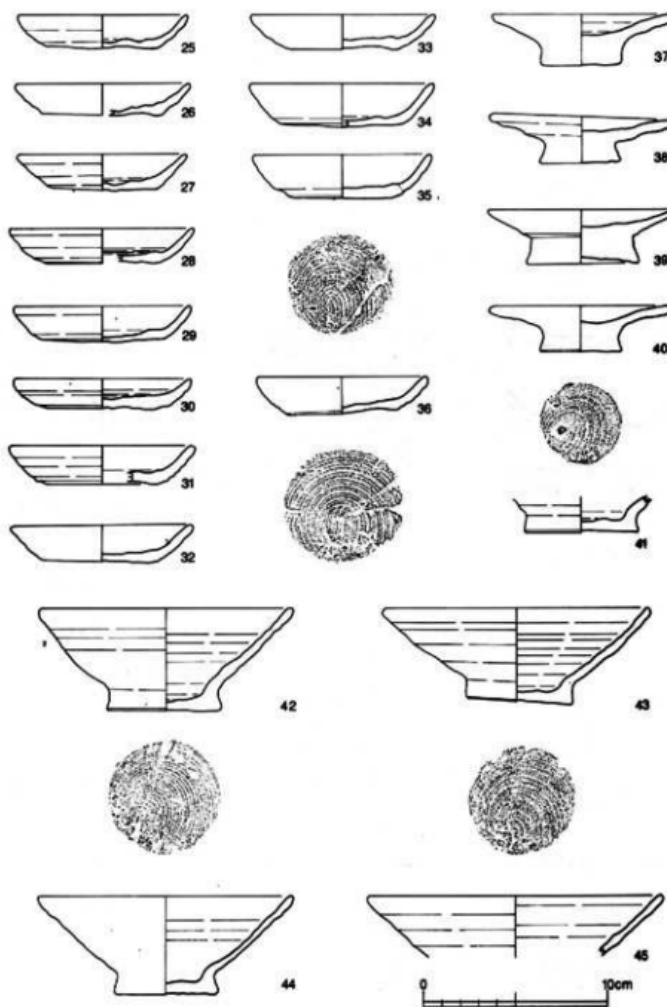
出土遺物は1点の須恵器を除いて、土師器のみ44個体出土している。本来完形であったものを埋納したものと思われる。楕は口径16.2cmのものを最大とし、13.4cmのものを最小とし器高は5.3~5.6cmである。底は糸切りで体部はヨコナデで仕上げている。皿はベタ高台と一般的なタイプの2



第124図 土壌42土器実測図(1)



第125図 土壌42土器実測図(2)



第126図 土壌42土器実測図(3)

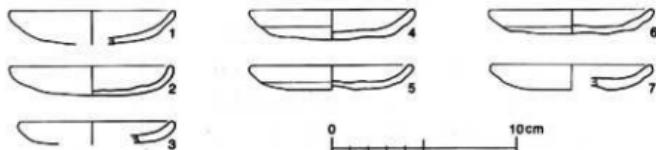
種がある。ベタ高台のものが丁寧に作っており、色調も赤っぽく焼き上げられている。全て糸切り底で、強いヨコナデで整形されている。

土壇の位置は、建物Ⅴの北東隅に位置しており、多数の土師器を埋納していることからも建物を建てた際の地鎮祭的な祭祀と考えられる遺構である。

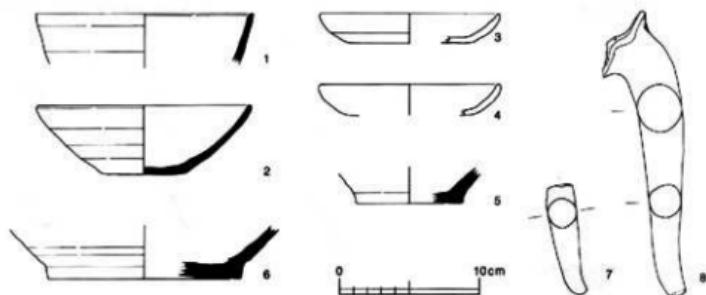
#### 43. 構造遺構

K08～K10に位置するピット列で、10基のピットを検出している。調査区の南端もあるが、遺構面の南端にも相当する。大多数の遺構と主軸方向を同じくする。東側方向へは、さらに遺構が続いている。遺構面の端に当たり、ピットが1列に並ぶことから、柵列と考えられ、遺跡を画す柵と考えて大過ないものと思われる。

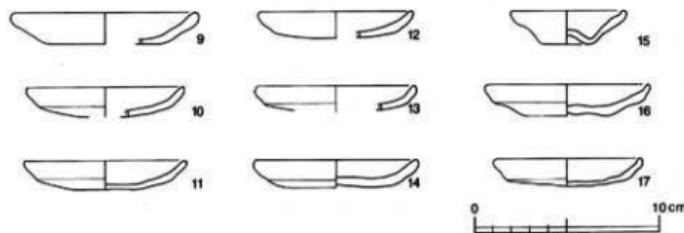
柵列は、8基のピットが1列に並び、2基のピットが南にはずれて存在する。1.8m間隔に並ぶのを基本とし、柱が密になる部分はその限りでない。支柱であると考えるのが妥当かと思われるが、斜めに柱が据えられた痕跡は確認出来なかったことから、明言は避けたい。溝2と直交し、ピット1基は溝の中央部に位置している。また、溝2に伴う整地層端部の石組と平行して築かれている。溝2より西側に伸びていないことから溝2や石組と有機的に強く関連した遺



第127図 建物5東側ピット群出土土器実測図



第128図 ピット出土土器実測図(1)



第129図 ピット出土土器実測図(2)

構と考えられる。溝2内に南側に1基直角に曲がった地点にピットが1基確認しているが、柵と直接的に関係するピットであるかどうか判然としない。

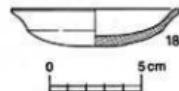
遺物は、ピット中から少量の須恵器・土師器が出土しているが、図化可能な土器はない。

#### 44. 石組

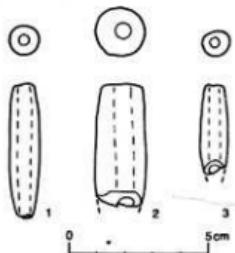
J09・J10に位置する遺構で、溝2の北端に直交する位置に存在する。主軸方向は大半の遺構と同じで、東西方向に5m検出している。当遺構まで整地層が延びており、整地を行う際の端部の石組と思われる。石組は地山に含まれる円礫を使っている。

#### 45. その他の遺構

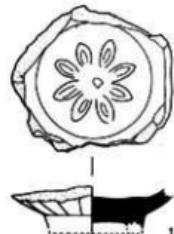
多数のピットを確認しているが、柱の痕跡を認めているもの



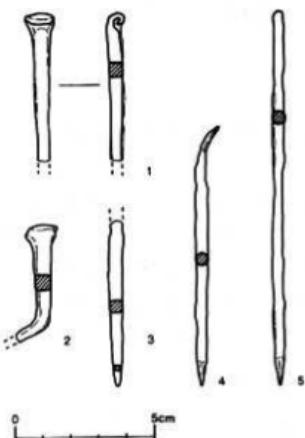
第130図  
ピット出土瓦器実測図



第131図 ピット出土土錘実測図



第132図 ピット出土陶磁器実測図



第133図 ピット出土鉄器実測図

は建物に伴うものと考えられる。それ以外のピットもある程度は柱になるものと思われるが、明らかでない。掘立柱建物跡は8棟想定したが、それ以上存在したことは確実と思われる。ピットのなかには、P 745のように第129図(15)の土師器小皿のいわゆる「ヘソ皿」を出土しているピットもあり中世末に下る遺構も含まれているようである。概して西側のピットは新しい時期のものである。埋土も灰色っぽい砂質土で、僅かに異なっている。

遺構とは言えないかもしれないが、中央地区中央部分全域に整地層が広がっている。大半の遺構を築く際に行つたものであろう。南端には石組が伴う遺構として確認されており、北側では図版28の状況で整地面下で土師器小皿が多数出土している。整地に際しての祭祀の一貫かと推定される。

## 第5章 東地区の調査

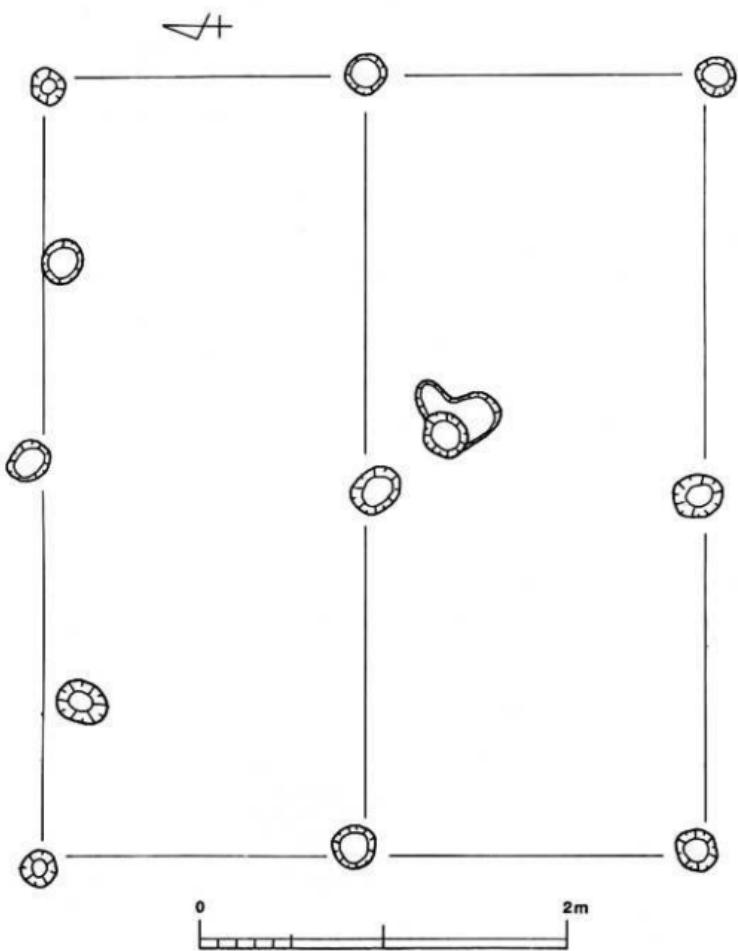
### 第1節 位置・概要

東地区は調査地区の東端で中央地区と約180m離れている。その間には、旧河道が通っており、近世以降に水田開発が行われた地域と思われる。

東地区は確認調査で井戸2の上面を検出したことにより確認した地域である。調査中途で東側及び南側に遺構面が広がっていることが判明したので調査区を拡張した。当然ながら調査は路線部分に限られており、路線部分の南北とも水田耕作を行っているため水路部分と路肩を損傷しない範囲は調査を行っていない。ただ、東西方向はどちらも砂利層が露出しており、遺構はさほど広がらないものと思われる。北方向へ遺跡は広がっているものと思われ、調査を行っ



第134図 東地区周辺字限図



第135図 建物跡実測図

た北端の田字である「ホンガンジ」の高台域をはじめ居住域の存在が十分に考えられる。

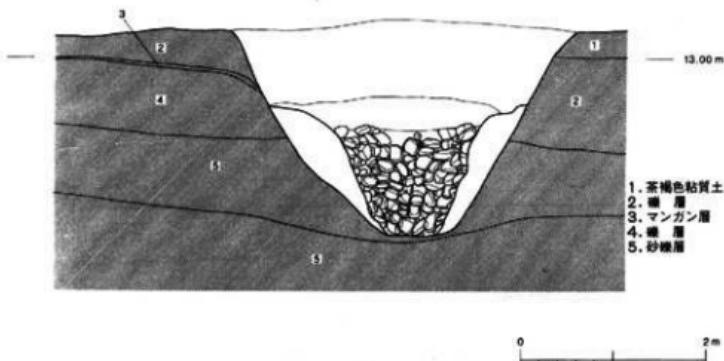
遺構は、「ホンガンジ」に伴う溝・柵状遺構と集落跡の建物跡・井戸・墓・土壙・溝などを調査している。時期的には、一時期のもので宝林寺北遺跡の盛行した11世紀～12世紀の遺跡である。調査面積は約 690 m<sup>2</sup> とさほど広くはないが、建物・井戸・墓と生活に関係の深い遺構が検出されている。東側にも林田川の旧河道が存在し、その北東方向の同一路線内に片吹遺跡が立地する。現林田川とは、直線距離で 550 m の距離を持つ。

## 第2節 建物跡

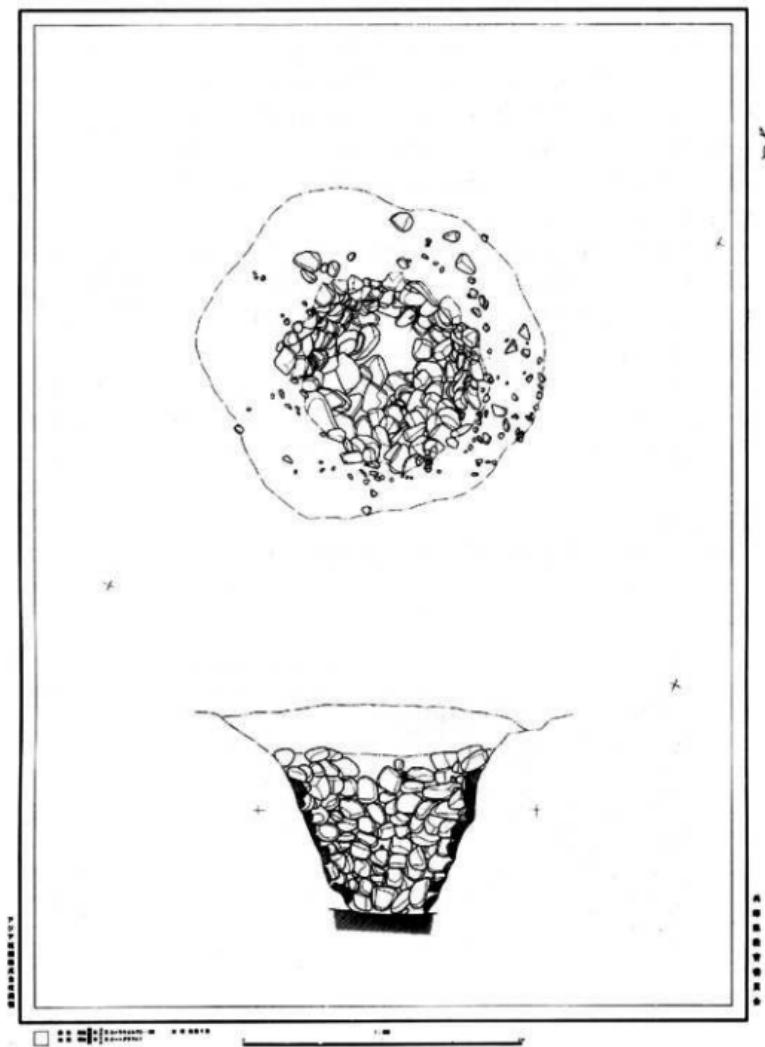
ピットは多数検出しているが、明瞭に建物跡と断定出来るものは井戸に伴うものと推定している例を除いて 1 棟のみである。2 × 2 間の建物跡で柱穴は最小径 20 cm、最大径 35 cm を測る。規模は東西方向 4.1 m、南北方向 3.5 m を測る。主軸方向は、溝などの他の遺構と同方向で東北区の遺跡の主軸方向と同一である。柱穴の中には、二段になる掘り方のもの 1 基や石を伴うものも 1 基含まれるが、素掘りの根石や根固め石・裏込石を伴わない軽易な柱穴である。「ホンガンジ」の溝・柵列と関連する建物跡かもしれない。出土遺物は少量で、土師器・須恵器片が出土しているだけで図化出来るものはないが、時期的には同一の時期の土器である。

## 第3節 井戸

調査区中央で 1 基、西寄りに 1 基の 2 基を検出している。



第136図 井戸 1 掘り方実測図

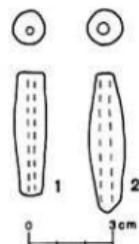


第137図 井戸 1 実測図

## 1. 井戸1

調査区中央で検出された井戸で、石組の井戸である。検出面で最大径2.5mと大形の不定円形で、深さ2.3mを測る比較的浅い掘り方である。断面浅いU字形を呈し、底面は径0.8mと小さく法面は急傾斜を示す。井筒は確認されておらず、井側下部が一部崩壊していることから井筒を抜き去った可能性もある。底は、明瞭な砂層とかではなく、調査時点では大きな土層の変化はみられなかった。

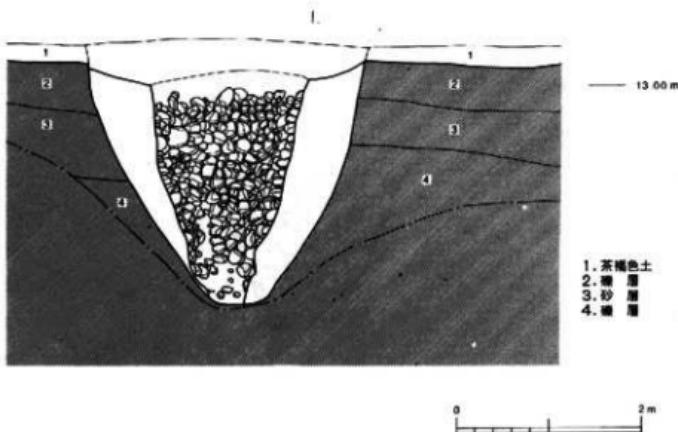
井側は、河原石を積んだ円形の石組で急斜度を呈している。人頭大からそれ以上の河原石を使用している。角礫は全くといって良いほど使用されていない。地山中の円礫を使用したためと思われ、断ち割りをした際にも礫層が何層にも見られた。東地区東側では礫層が10m近く下層まで広がっていることを工事中に確認している。井側の石組は、底に大形の石を組み上部へと積み、裏込には礫とともに粘土で補強されている。石組は、現存部で2.3mの高さまで積んでおり、斜度は68°を測る。出土遺物は少量が埋土中から出土している。須恵器・土師器の破片で固化出来るものはない。



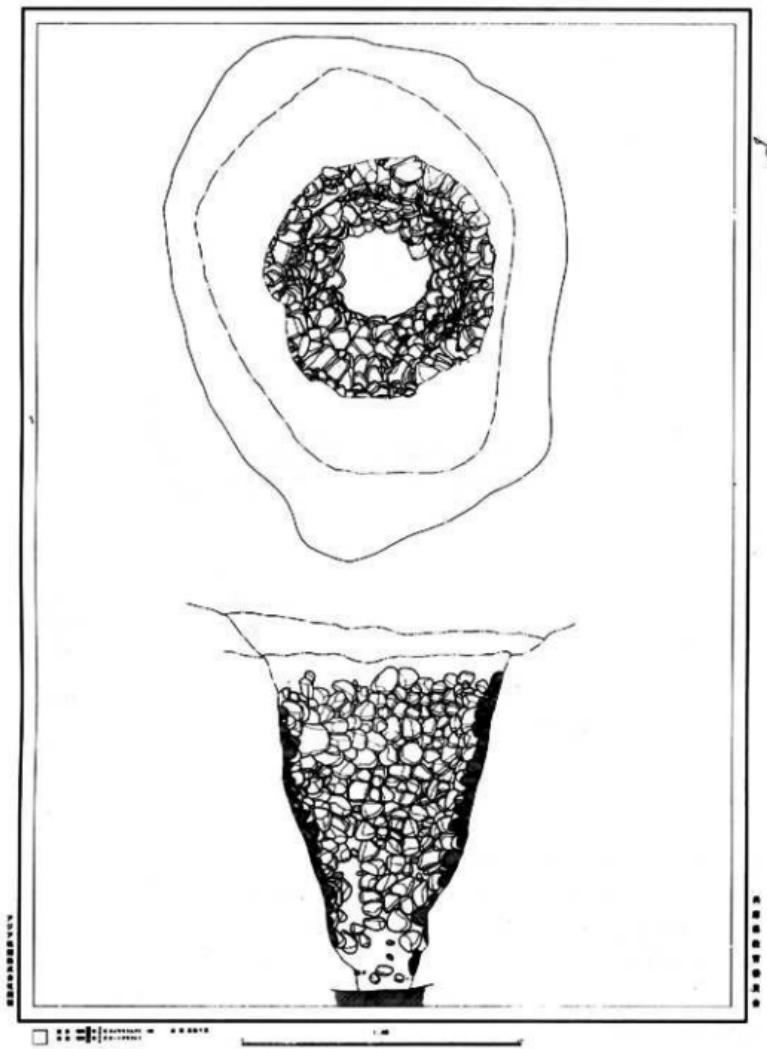
第138図  
井戸1 土錐実測図

## 2. 井戸2

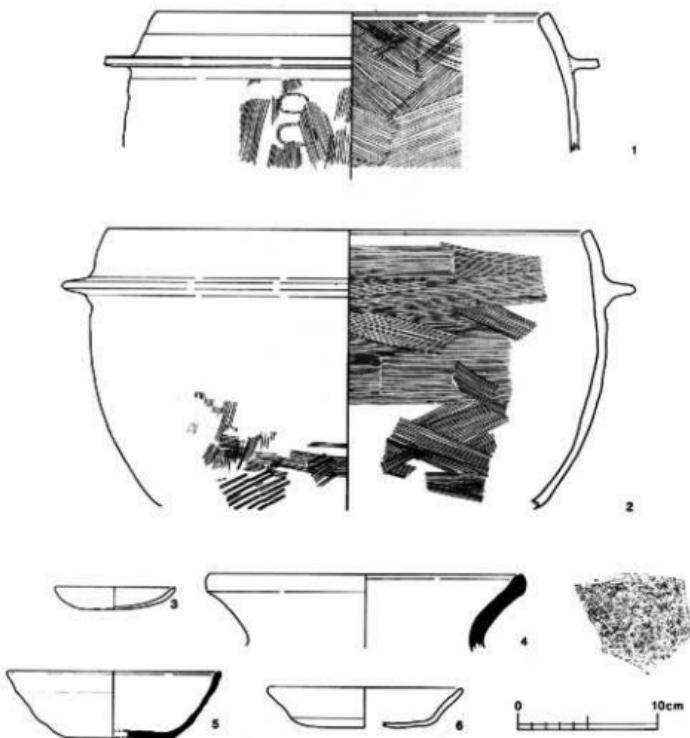
調査区中央西寄りで検出された井戸で井戸と同形態の井戸である。心心間で約15m離れている。



第139図 井戸2 掘り方土層断面図

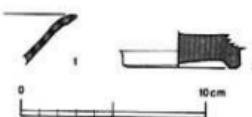


第140図 井戸2実測図



第141図 井戸2土器実測図

る。規模はやや大きく、掘り方上面で最大径3.6mを測る。深さも2.8mと深く構築法も立派である。石組は上面径1.8m、底面で0.4mとやはり逆台形の擂鉢状をしている。石材も地山中の河原石で構築方法も井戸1と同じである。斜度は井戸1に比べると急で70°を測る。裏込の茶褐色粘質土も同様であるが、裏込の粘土・礫が多い。0.5m深くなっているからか、掘り方断面の形状も異なっており、途中で掘削度を変えている。約1mまでは垂直に近く掘り下げる、その後擂鉢状に掘っている。



第142図 井戸2陶磁器実測図

井戸の石組を仔細に観察すると、石組の状況が理解できる。円形の河原石の石組なので、先後関係は角礫に比べて不明瞭だが、目路が通っている部分が判断され積石の状況が看取できる。部分的に大きな石を入れ安定を図っている。掘り方屈曲点の造構面から約1mのところに人形の石材を集中させている。この部分の2・3段は重量感の石を並べている。石材の先後関係から見ると逆時計回りに構築している。

井筒は検出されていないが、底面の石組が崩れていることから井戸1と同様に井筒は抜き去ったものと思われる。出土遺物のなかに大形の底のない羽釜が含まれており、これが井筒に使われていた可能性が高い。現在の標高で底面は10.62mである。出土遺物は、須恵器・土師器などで羽釜を含めて遺物から時期は平安末前後と思われる。

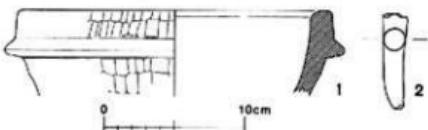
遺物は、須恵器・土師器・陶磁器・土錘が出土している。土師器は皿・鍋・甕・碗があり、図化した羽釜は井筒と推測される。羽釜が2点と皿2点である。(1)は径28cmの大形の羽釜で、外面はユビ成形ののちハケで整えている。内面はハケ整形しており外面は鋤部(羽釜部)までヨコナデで仕上げている。鋤部は角張っており、丁寧に作られている。(2)も径34cmの大形の羽釜で、外面はタタキメののちハケで整形している。鋤部は端部が丸くなっている。外面には鋤部下にスグが付着している。(3)は土師器小皿で8.4cmを測る薄手に焼き上げられている。(6)は径14cm、器高2.5cmを測り、口縁部のみヨコナデで仕上げている。(4)は壺口縁部でヨコナデが施され、外面にヘラ描きの記号が見られる。(5)は備前系の碗で径14.4cmを測る。

#### 第4節 溝

素掘りの溝と溝内に疊を持つ溝の両者があり、前者は2本、後者は1本検出している。

##### 1. 溝1

調査区西寄りを南北に縱貫しており、調査区の西端で検出されている。幅0.2~0.3m、深さ0.1m前後と小規模のもので、断続的に続いているものと思われる。検出している長さは、復原すると30m近くになり、遺跡を限る溝かもしれない。出土遺物は小片だけで、土師器皿・碗の小片である。



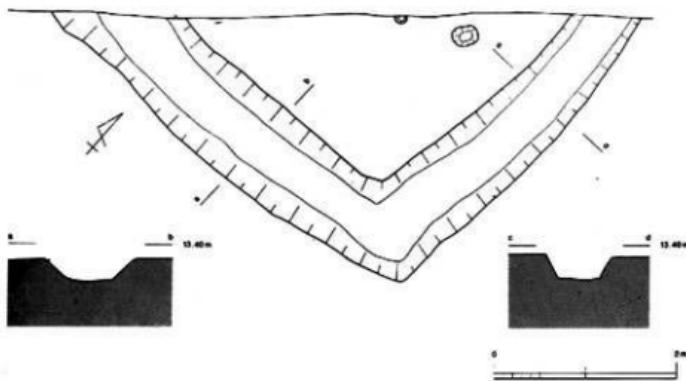
第143図 井戸2 土錘実測図

## 2. 溝2

溝2は集石土壌西側に主軸N60°Wで走る溝で、長さは15m検出している。幅1m前後で調査地内で終わっているが、南北方向はともに削平を受けているかもしれない。集石土壌と0.6mと近接して存在するが、集石土壌と直接関係しているかどうかは疑問である。溝内には拳大の円礫が充満しており、礫の間に小片となった土師器皿など数点含まれている。小片から井戸などの他の遺構と同時期であることが判断できる。

## 3. 溝3

調査地端にくの字形に曲った溝で「ホンガンジ」を回る溝（堀）かとも考えられる。5mと4.5mの2辺を検出している。幅1~1.5mと狭く、深さは0.2mと比較的浅い溝である。底面は平坦で断面逆台形を呈している主軸方向は柵列や建物跡などと同じである。



第145図 溝3実測図

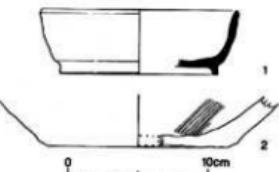
## 第5節 落込み

落込みは西側に集中しており、4基確認している。調査東端のものも平面形態は大きいが、浅いことから土壌として扱っておく。遺物を出土したのは落込み1・2で、3・4についても後世の擾乱とも考えられる。

### 1. 落込み1

調査区北西端で検出されており、北側へ遺構は続いている。残存長2.7m、深さ0.45mの不

定形をしている。埋土は他の造構と同様の茶褐色土であるが、礫を多く含んでいた。出土遺物は須恵器・土師器の破片10数点しか出土していない。(1)は須恵器高台付椀で径14.0cm、器高4.4cmを測る。奈良時代のものである。(2)は擂鉢の底部で、単位のあるおろし目が見られる。備前焼で近世に下るもので、この遺物から、落込み1は近世の造構と考えられる。



第146図 落込み1土器実測図

## 2. 落込み2

調査区西端で検出している。落込み1同様礫を多く含む埋土で、造構の時期は下る可能性が高い。最大長3.8m、幅2m、深さ0.6mで、残存部は不定方形をしている。出土遺物は、須恵器・土師器で図化したものは須恵器椀4点である。(3)は奈良時代のもので、口径12.4cm、器高4.4cmを測る。(1)(2)(4)は底部で斜切り底である。



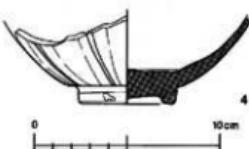
第147図 落込み2土器実測図

## 第6節 土壙他

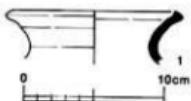
土壙は10箇所基準確認している。集石土壙3基と他は性格不明の土壙である。

### 1. 集石土壙

南端で3基切り合って確認している。3基とも土壙(墓壙)上面に拳大～人頭大の円礫を集石している。3基はU字形に配置されており、集石土壙2が1・3に切られている。



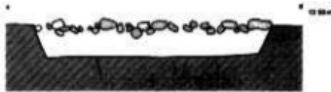
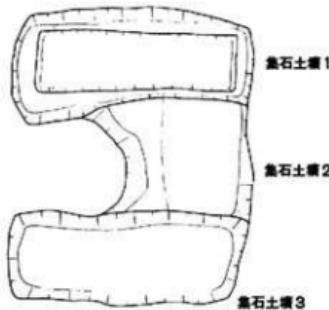
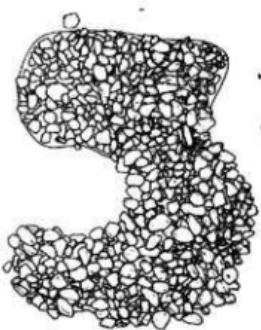
第148図  
集石土壙2陶磁器実測図



第149図 集石土壙2土器実測図

集石土壙1の墓壙規模は長径2.2m、短径1.0mの楕

円形で深さは0.45mを測る。集石土壙は中央に木棺を検出している。木棺は長さ1.8m、幅0.55mで、下層の礫層を切り込んでいるため、底に別に礫を置いたものか判断出来ない。上面に置か



第150図 集石土壙1・2・3実測図

れた集石は棺を検出した面まで落ち込んでいた。遺物は土師器皿の破片が数点見られるが、副葬品とは思われない。

集石土壤2は、主軸をほぼ南北に近いN10°Eにとり、両木口部を集石土壤1・3で切られている。幅1.2mで長さは他の2基よりも長かったものと推定される。底面は他の2基に比べて浅く、残存高で0.2mである。底近くで、土の違いを僅かながら認められたが、木棺と決めるまでは判っていない。出土遺物は須恵器・

土師器・磁器で、図化したものは4点である。(1)は須恵器壺の口縁部で、口径14.2cmを測る。口縁端部は内側に肥厚しており、ヨコナデで仕上げている。(2)(3)は土師器皿で、口径12.4cm前後の中皿である。ユビで整形したのち口縁部のみヨコナデで仕上げている。(4)は青磁で、蓮弁文が施されている。底径4.8cm、残存高4.7cmを測る。底面は露胎であり、龍泉窯の製品と思われる。

集石土壤3は南に位置しており、集石の分布範囲は長さ2.1mで、集石土壤2を切っている。墓壙の規模は長径2.1m、短径0.8mのやや不定の橢円形である。出土遺物は須恵器・土師器の小片だけである。

3基が切り合っているが、集石土壤2が古いことが判るだけで、1・3の先後関係は明らかでない。

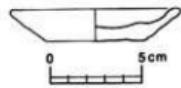
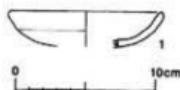
## 2. 土壙

土壙は、17基検出している。最大長2.2mの大形の落込みも含むが、性格の明らかな造構はない。時期も隔差があり、新しい搅乱壙も存在するかもしれないが、土壙1・3を除いて出土遺物は小片ばかりで図化出来るものは出土していない。土壙11で鉄器が1点出土しており、釘かと思われる。土壙1・3も土師器皿が出土しているだけである。

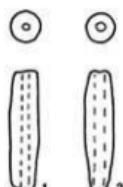
土壙1は最大長0.9m、幅0.5mの橢円形をしており、土壙2に東側を切られている。出土遺物は中央から土師器皿が5枚出土している。径12.0cmの中皿と8.4cmの小皿の両者があり、技法は多くの皿と同じくユビ整形ののち口縁部のみヨコナデで仕上げている。

土壙3も長径0.7m、短径0.4mの橢円形の小形土壙で土師器皿が1点出土している。口径9.0cm、器高1.8cmの土師器小皿で系切底である。ロクロを使って整形している。

他の土壙は全て不定形で、出土遺物もほとんどなく性格も不明である。



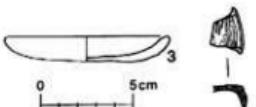
第153図 土壙11 第154図 ピット  
鉄器実測図 土錐実測図



### 3. 構列

溝3や建物跡と同じ主軸で、ほぼ東西方  
向に延びるピット群で13基検出している。

そのうち6基が完全に直線に並び、3.3～  
3.4m間隔で存在する。13基のピットのう  
ち6基が主柱となり、他の3基が柵列の支  
柱ではないかと考えられ、3基は建物跡の  
柱穴である。建物跡に接しており、溝3と  
も深い関係にある造構と思われる。支柱と想定するピットは、3基とも北側に存在する。南側  
に対する柵で3種の造構が有機的に強く関連した造構と思われる。



第155図 ピット出土土器実測図